

二〇一一年度

平安文学における物の怪

指導教授 小山利彦教授

研究科 文学研究科

専攻 日本語日本文学

氏名 李喜貞

第二章 上代文学における怨霊の始源

一 はじめに

二 怨霊とは

三 記紀神話に見る恥

(イ) 伊耶那美の辱

(ロ) 大物主神の羞

(ハ) 豊玉毘売の作

四 崇りとその歴史的背景

五 まとめ

注

第三章 『源氏物語』における物の怪

一 はじめに

二 怨念による物の怪

(イ) 政治的怨念による

初出一覧 三五四

結論 三三五

注 三二八

五 まとめ 三二五

四 藤原顕光と延子の怨霊 三一三

三 藤原元方の怨霊 三〇二

二 菅原道真の怨霊 二九一

一 はじめに 二八九

第五章 歴史物語における物の怪 二八八

注 二七二

六 まとめ 二六八

五 怨霊説と妖物説の折衷説 二六一

四 なにがし院に棲み憑く妖物説 二五五

序

論

よ 敬 人 た た 現 が ホ エ が な 神 史 で を 古
 っ う 々 と と わ 燃 し ル 現 ど の 史 で は 感 代
 て こ も い そ れ え ブ 民 が 現 が 顕 であ り なく と の
 国 と 同 う こ た 上 で 、 族 れ 、 さ や 、 、 っ 信
 を か 様 ° で 神 て っ 炎 エ 神 れ 悪 世 界 世 界 っ 仰
 治 め 、 あ に 対 ぜ っ い の シ プ の て 霊 界 界 き や
 た 天 ろ 対 し は て る 中 プ の 声 い を 的 共 共 共 た 風
 こ 皇 う ° て 神 、 よ う 神 か ト か 直 ° 追 ベ 通 こ 俗
 と は 常 に 、 恐 れ 見 燃 え 尽 き る こ と は 、 異
 が 記 録 さ れ て い る 。 一 方 、 得
 敬 人 た た 現 が ホ エ が な 神 史 で を 古
 っ う 々 と と わ 燃 し ル 現 ど の 史 で は 感 代
 て こ も い そ れ え ブ 民 が 現 が 顕 であ り なく と の
 国 と 同 う こ た 上 で 、 族 れ 、 さ や 、 、 っ 信
 を か 様 ° で 神 て っ 炎 エ 神 れ 悪 世 界 世 界 き や
 治 め 、 あ に 対 ぜ っ い の シ プ の て 霊 界 界 き や
 た 天 ろ 対 し は て る 中 プ の 声 い を 的 共 共 共 た 風
 こ 皇 う ° て 神 、 よ う 神 か ト か 直 ° 追 ベ 通 こ 俗
 と は 常 に 、 恐 れ 見 燃 え 尽 き る こ と は 、 異
 が 記 録 さ れ て い る 。 一 方 、 得

意味するものとの関係性を比較することを試みる。
また、物の怪の退治として呪術や祈祷に關わる巫
女に就いては韓国のムダンのことを取りあげ、比較
文化的視点からは、韓国も考えてみたい。
なお、本論の展開上、表記の問題にする箇所では
「その以外は、一般的なら「物の怪」の表記で統一
する。」

本

論

第一章 もののけ考

― 日・中・韓、比較文化的視点を含めて ―

一 はじめに
平安文学に集中して登場する「もののけ」は、古
代日本の民間信仰や生活風俗をよく反映している。
それは、例えば、歴史書のみならず、日記類や物語、
説話など当時の文献から窺うことができる。「日本国
語大辞典¹⁾」には、「もののけ」の語源説として「『モ
ノ』は『靈魂』の意で、『ケ』は『病氣』の義」と、
記されていいる。科学の発展に恵まれてい今日、
人々にとって、このような靈的存在、また、それに
よる病氣のことを信じる人は少ないだろうし、また
ほとんどの人は昔話に登場するものとして認識して
いるだろう。ところが、古代の人々は「もののけ」
の存在を信じ、恐れていたことが中古・中世の文献
から読むことができてゐる。例えば、古代に、それを靈的存
病氣などの悪いことが起きるたびに、それを靈的存

在、つまり「ものけ」による祟りだと思ひ、「ものけ」を退治しようとする加持祈禱を行なつた。病氣の中でも特に、精神錯乱のような病症は、加持祈禱によつて憑依された憑坐（よりました）の異常な行為と似ているため、当然「ものけ」の仕業だと信じ、人々は怖れていた。このようにな「ものけ」に似ての研究は、多くの研究者たちによつて今日まで行われ、つきり未だにその定義や表記に混同があつて、本章では、「ものけ」の定義を表記の様相を日・中・韓の比較文化的視点も含めて検討したい。「ものけ」の定義や表記を明らかにするといふより、なぜ、そのような混同が起きたのかを中心考察し、また古代日本人が怖れていた「ものけ」の実態、その対処はどのようになつたのかを考察して、いくつとするとする。

二 もののけの義

の「一般的な「ものけ」とは、得体的の知れない「もの」が引き起こす怪異現象で、具体的には死霊、生霊、邪気などが人に取り憑いて苦しめ、病気を起こしたり、死に至らしめたりすることである。その一方で、病自体を「ものけ」と称する例もある。平安時代の清少納言も『枕草子』の中に、「病は胸。もものけ。脚のけ。」と、「ものけ」を病の一つとして挙げている。この「ものけ」の定義について、様々な論考が出されている。

池田弥三郎氏は、「ものけの語義」⁽²⁾を次のように述べている。

もののけとは、怨霊によって生ずる病気を意

味する。人間の肉体的な病を生霊死霊のたたり
であり、その恨みの現われと見たからである。
それがもののけ全体でもの、即ち怨霊という意
味に使われるようになった。

池田氏の「もののけの語義」を見ると、「ものけ」
の意味に変化があることが窺える。最初は、怨霊が
起こす病気のことを「ものけ」と言っていたが、怨霊
そのものを「ものけ」と言うようになったと述べ
ている。
また、折口信夫氏は「ものけ」は「怨霊」であ
ると言いながら、次のように述べている。

元々「ものけ」と言ふ語は霊モの疾ケの意味であ
った。ものは霊であり、神に似て階級低い庶

物の精霊を指した語である。さうした低級な精霊が人の身に這入った為におこるわずらひが、霊之疾である。後には霊疾の元をなす霊魂其物を、ぢかにものゝけとばかり言ふ様になり、それを人間の霊と考へたのである。

（『折口信夫全集』第八卷⁽³⁾）

折口氏は、ものゝけ、精霊が人の体に憑いて、異物として反応した結果、生ずる病気を「ものけ」と言い、「霊の疾」という漢字にあてている。元々病氣のことを指した「ものけ」の語が、後になつて病気を起こす霊魂そのものを「ものけ」と言い、その霊魂を人間の霊だと考えたのだと解釈している。

また、三苦浩輔氏⁽⁴⁾は、平安文学にみえる「物怪」

についで、『万葉集』や『日本書紀』などから「もの」の用例⁽⁵⁾を挙げながら、次のように述べている。

物怪のモノは、「鬼」という文字に象徴される、あるいは蛇と近い存在の、あやしげな威力をもつ靈格です。動植物、器物などで不可思議な靈威をみせるものがあれば、それがモノです。ケはモノのもつ精気、靈威であり、また、モノのもたらす疾患です。やがては怪異を現じ、人を疾ませる靈格そのものを物怪と言うようになります。

以上のよう、池田氏や折口氏、三苦氏が言う「ものけ」とは、威力を持つ靈によつて起こる病気のことであり、後には、病気を起こす靈そのものを「物

怪「だと定義している。

「ものけ」が「病氣」のことでもあるなら、当時の医学関連書にもその症状や病氣の原因など、詳しい資料が得られるだろう。服部敏良氏は古記録を基に、古代の医学に関わる研究書を奈良時代から江戸時代まで、時代別に出版している。その中で、『平安時代医学の研究』⁽⁶⁾が「ものけ」について記述している。やはり、平安時代の「ものけ」というのは、社会的に大きな問題として、また一つの病氣として人々に身近なものであったことが考えられる。

日本最大の百科史料事典である『古事類苑』⁽⁷⁾の方技部十八「疾病四」には、江戸末期から明治時代にかけて刊行された『倭訓栞』⁽⁸⁾（前編三十三）を引用

した「もののけ」の記述がある。

ものけ、源氏に多くいへり、三代實録に、物怪と見えたり、楞嚴經に、物怪之鬼といへり、邪崇をいふなり、

「ものけ」とは、「物怪」であり、「物怪の鬼」であり、「邪崇」でもある。この「邪崇」については、韓国の朝鮮時代の医学書である『東^ト醫^イ寶^ホ鑑^ガ』の「雜病編」卷七に「邪崇形證」について次のように書かれている。

視・聽・言・動俱妄者、謂之邪崇。甚則能言平生未見聞事及五色神鬼。此乃氣血虛極、神光不足、或挾痰火、非真有妖邪鬼崇也。「入門」○邪崇之證、似癲而非癲、有時明、有時昏。「回春」○邪

之為病、或歌或哭、或吟或笑、或眠坐溝渠、啖食糞穢、或裸體露形、或晝夜遊走、或嗔罵無度。「千金」○人為鬼物所魅、則好悲而心自動、或心亂如醉、狂言驚怖、向壁悲啼、夢寤喜厲、或與鬼神交通。病苦乍寒乍熱、心腹滿、短氣不能飲食。「病源」○人之精神不全、心志多恐、遂為邪鬼所擊或附着。沈沈默默、妄言謔語、誹謗罵詈。訐露人事、不避譏嫌。口中好言未然禍福、及至其時、毫髮無差。人有起心、已知其故。登高涉險、如履平地。或悲泣呻吟、不欲見人。如醉如狂、其萬端。「綱目」○人見五色非常之鬼、皆自己精神不守、神光不完故耳。實非外邪所侮、乃元氣極虛之候也。「正傳」○夢寐不祥、多生恐怖、為祟或證矣。「得效」

(『原本東醫寶鑑』雜病篇卷七・五三一頁)

この医学書によると、邪祟の症状について、見る・

聞く・言う・行動することが筋の通らない非現実的な様子であると言う。これがひどくなる、見たこととも聞いたこともない事と五つの光（神鬼）が見えるというが、妖しいものが本当にいるのではなく、氣血が虚弱しているからであるとする。そしてこれを病氣の一つとして漢方薬の作り方や鍼灸法という治療についても書かれている。しかし、医学の知識がなかった古代韓国も、日本の平安時代と同様に「もののけ」——韓国では「鬼神^{クイシン}」——による病氣だと思い、お寺での祈禱やムダン（巫堂）によるクツを行った。実際、この風習は今日も残っている。町の中で、「^ヒ」のマークが赤い色で描かれている白い旗がかかっている家がムダンの家であるが、最近には、普通に見かけるものでは無くなってきている。韓国のムダンについては本章の後半にまた触れることにする。

交渉するための手段に關するものであり、靈と人が
こゝに接感あるうへに訴え来るものあり、靈と人が
は、漢字はむろん。また、肥後氏は「頃の」やま
な存在の表現であると言ふ。こゝで言う古い日本語
とであり、漢字の「靈」は、やや高い位置の人格的
は、古い日本語として低い位置の原始的な精靈のこ
ると、區別している。肥後氏によると、「ものけ」
「ものけ」と「靈」は嚴密に言ふと違ふものであ
る。受止められたと述べる。ところが、肥後和男¹⁰氏は、
あると言ひ、後に「ものけ」のなる「ものけ」とも同義語のよう
折口氏が「問題はその簡単な片付かない。例えば、
しかし、問題は、その簡単な片付かない。例えば、
け「と」ものけ「と」の關係は明らかでない。例えば、
このように見ると、病氣の意味での「もの

れに對して、「靈」は、「もののけ」の究極原因としての實在であるとする。つまり、「もののけ」は「靈」の持つ一つの作用に過ぎない。「靈」は「もののけ」として自らを現わし、人は「もののけ」において「靈」に触れたと言う。要するに、肥後氏は「もののけ」を「靈」の顯現を示す氣配として捉えている。

「もの」に「靈」という漢字を当て、その性質を考へてきたが、その前提も定かなこととはいえない。中国の最古字典である『説文解字』には、「物」の字を「萬物也」と記している⁽¹⁾。肥後氏も「物はあらゆる存在をさし、ひとり人間のみを言ふのではない。森羅萬象すべて人間に感覺されるものである」と言う⁽²⁾。また、藤井貞和氏も「物」に對して「えたいの知れない、名付けようのないしろものだからモノだ

というので、しかもそれをさして言うことをはばか
られる存在である。かきと忌み詞として使われること
と呼ぶほかない。灵的な存在といふ意味が附着するこ
から、モノ霊的存在といふ意味が附着する」と述
べて、折口氏の「このようには、漠然とした広い意味を
して反論した。このように、古代の日本人はどのよう
持つものか、折口信夫氏の「鬼の話」を挙げる。
考えていたのか、折口信夫氏の「鬼の話」を挙げる。

日本の古代の信仰の方面では、かみ（神）と、
おに（鬼）と、たま（靈）と、ものとの四つが、
代表的なものであつたから、此等に就て、總括
的に述べたいと思ふのである。鬼は怖いもの、
神も現今の様に抽象的なものではなく、もつ
と畏しいものであつた。今日の様に考へられ出
したのは、神自身の上した為である。たまたまは

眼に見え、輝くもので、形はまるいのである。ものは、極抽象的で、姿は考へないのが普通であつた。此は、平安朝に這入つてから、勢力が現れたのである。(『折口信夫全集』第三卷)⁽¹³⁾

折口氏は、「もの」は「かみ(神)」、「おに(鬼)」、「たま(靈)」と並ぶ具體的形態を持たない靈的存在として考えたようである。しかし、靈的存在としての「もの」の用例はわずかで、ほとんど物質的存在が主である。藤井貞和氏は、「モノは《靈魂》か《物象》か」と問い、『古事記』での用例を列挙している。それによると、多くは「著身之物(衣類)」、「我物」、「食物」、「山河之物(産物)」、「奇物(珍しい物)」といった、有形の具體的な物体を指している。「もの」が

靈的存在を示す例としては、『古事記』に、大物主オホモノヌシと
いう神の名前としてたった一例しかない藤井氏は
言う。しかし、「もの」は「物」だけではなく、「鬼」
も「もの」と読めるし、「鬼」は「かみ」とも、また
「神」は「もの」とも読める。このように、靈的存在
としての「もの」は、その特徴によつて、「物」と
も、「鬼」とも、あるいは「神」とも表すことが出来
るだろう。
『萬葉集』では「鬼」は、ほとんどが「もの」と
訓じられている。その用例は、「鬼もの」が十一例、「物もの」
が一二九例ある。⁽¹⁴⁾その中で、「鬼」字を使った最古の
用例は、巻第四・五四七番の歌で「天雲の外に見し

より吾妹児わぎもこに心も身さへ縁よりに西鬼尾しものをという笠朝臣金村が作った返歌（七二五年の春）である。ところが、この返歌を始め、十一例の「鬼もの」の用例は、すべて今日でいう鬼の意味ではなく、「くものを、くものか、くものゆえ」のように詠嘆的文末用法として用いられている。この「鬼」字について、馬場あき子氏は次のように述べている。

「鬼字」にふさわしい和訓をめぐって、「おにと」もの」とはなかなか結着がつかなかった。ほぼ平安末におよぶまで「もの」と「おに」と二様によまれていたわけである。しかし、そうしたなかにも、しだいに両者の区別は分明にされてゆき、「もの」の方は明瞭な形をとみなわぬ

感覺的な靈の世界の呼び名に、と定着してゆく。
一方が「ものけ」の「もの」「ものおそろし」
「ものすごし」などの「もの」となつて深層心
理に眠る原始的な不安や畏怖感にみちびき出さ
れた幻影となつていったのにたいし、「おに」の
方は「しだい」に形象化され、憎悪と不安とのな
かに、なぜか不思議な期待を持たれつつ成長する
時期を迎える。そして、こうした趨勢のなかで、
「おに」と微妙な離合を繰り返しつつ、しだい
に「かみ」は「おに」から分離して、これもま
た別個の体系をなしていったのである。

(『鬼の研究』四十四頁¹⁵)

馬場氏の『鬼の研究』では、「もの」は明瞭な形を
し
て
い
な
い
感
覺
的
な
靈
の
世
界
で
、「
お
に
」
は
目
に
見

えないけれども、實在感を持つ対象として捉えてい
る。「鬼」の一文字に「おに」と「もの」という読
みがあつて、後に別々の意味として「もの」は感
的な靈の世界のような幻影で、「おに」は形象化され
るなど、二つに分離されたという。また、「おに」の
意味の中には「かみ」の意もあつたが、これもまた
分離して、別の語として區別することになつたとい
う。このように、言葉はその時代の文明や歴史の背
景によつて細かく分離して行くことが窺える。

また、『日本書紀』欽明天皇二年七月条で、靈は「カ
ミ」、神は「タマシヒ」と訓じられた例もある。した
がつて、靈的存在としての「もの」は「かみ（神）」、
「おに（鬼）」、「たま（靈）」とも言えるのではなか
らうか。森本茂氏の『伊勢物語全釈』⁽¹⁶⁾によると、本
来の「鬼」という文字を「もの」、「かみ」、「し

こゝに、おに、など、に、読み、分け、けた、こと、が、平安時代
 に入つて、から、は、鬼、の、書、いて、魔、物、や、怨、靈、の、意、味、も
 した、と、する、的、な、もの、と、して、使、わ、れた、た、の、も、の、意、味、も
 し、か、ら、感、覚、的、な、もの、の、け、し、と、使、わ、れ、た、の、も、の、意、味、も
 読、み、か、ら、亡、魂、や、超、自、然、の、存、在、の、し、て、姿、を、持、た、な、い、の
 る、一、方、亡、魂、や、超、自、然、の、存、在、の、し、て、姿、を、持、た、な、い、の
 よ、う、に、見、る、こ、と、が、で、き、な、い、も、の、の、意、味、だ、つ、た、が、仏
 で、目、に、見、る、こ、と、が、で、き、な、い、も、の、の、意、味、だ、つ、た、が、仏
 教、が、入、つ、て、か、ら、仏、教、の、邪、鬼（い）の、姿、と、結、び、つ、き、今、日、の
 我、々、が、考、え、て、い、る、鬼、と、い、う、形、に、変、化、し、固、定、さ、れ、た
 の、で、は、な、い、か、と、考、え、ら、れ、る、。何、か、古、代、中、国、の、神、秘
 そ、れ、で、は、な、い、か、と、考、え、ら、れ、る、。何、か、古、代、中、国、の、神、秘
 思、想、か、ら、誕、生、し、た、鬼、は、何、か、古、代、中、国、の、神、秘
 が、異、なる、複、雑、な、存、在、で、あ、つ、た、こ、の、神、秘、思、想、は、靈、氣
 楼、が、頻、繁、に、発、生、す、る、山、東、半、島、が、起、源、ら、し、く、太、古、か

ら曇気楼のような不思議な現象や異常事象を「鬼」と呼んだ可能性も考えられる。日本最初の漢和辞書である『倭名類聚抄』(鬼魅類第十七)は「鬼」の語源について、次のように記している。

四聲字苑云鬼居偉反和名於爾或説
云隱字訛音於尔鬼物隱而不欲顯
形故俗呼曰隱也人死魂神也一
云吳人曰鬼越人曰魃音蟻又祈
反

姿の見えないものを意味する漢語「隠(おん)」が転じて、「おに」と読まれたとする。この「鬼をに」の語源からも分かるように、中国では死んだ人の霊を「鬼」

といふ。つまり「幽靈⁽¹⁹⁾」のことであろう。今でも亡くなることを「鬼籍に入る」というが、死者を「鬼」と呼ぶのと関係があるように。この「鬼」の語が深く関わつてゐるものが「鬼」と「霊」のものだけ、語に「も」の語が深く関わつてゐるものが「鬼」と「霊」のものだけ、意味するところが簡単にひと言で言えないからである。しかし、この「鬼」と「霊」といふ意味が含まれてゐることは疑えないだらう。

三 もののけの表記をめぐる

日本語がいつから漢字といふ文字によつて記されるようになったのかは定かではない。しかし、中国

せない。日本に漢字がいつ伝来したのも確かではない。日本には固有の文字がなく、漢字が伝来していが、日本の表記が始まったと考えられる。文字の伝来から和語の表記が始められたと考へ、逆により、和語に当てた文字や、漢字の意とは関係なく、発音のみを用いた万葉仮名は奈良時代に国語として定着したのである。このようない日本語の歴史によって様々な日本語の語源説をめぐる論争が少なくない。

本章では「物の怪」と「物の氣」に言及し、論争をめぐって、一般的に「物の怪」と「物の氣」の表記をめぐって、何故、そのように論争や表記の混同が生じたのか、その表記によつて言葉の意味するものは何かを探つてみたい。そのためには、日本語の歴史に大きな影響を与えた漢字、つまり中国の古い文献から「物怪」と「物氣」

の用例を調べる必要がある。また、日本の古い文献ではどのように使われているのかを比較しながら、当時の人々のもののけ観を垣間見たいと思う。まず中国で出版された『漢語大詞典』⁽²⁾からその二つの語の意味を探ってみる。

【物怪】・・・怪異事物、怪物。

【物気】・・・指所謂物質性的妖気。

これによると、「物怪」は「怪異な事物、妖怪」であり、「物気」は「いわゆる物質的な妖気―何か悪いことが起きそうな怪しい気配、もしくは怪しいエネルギー―を指す」と区別して定義している。それに対して、日本の場合は、どのように解釈しているのか、

『日本国語大辞典』⁽²³⁾を挙げてみる。

もののけ「物怪・物気」人にとりついて悩まし、病気にしたり死にいたらせたりするとされる死霊・生霊・妖怪の類。また、それらがとりついて祟ること。邪気。

もっけ「物怪・勿怪」①思いがけないこと。意外なこと。不思議なこと。あやしいこと。②けしからぬこと。不吉なこと。③「もののけ」に同じ。

日本の国語辞典では、「物怪」と「物気」を区別しない。同じ意味として記されている。さらに、「物怪」の読みを明らかにしない場合は、「もっけ」とも読め

るが、今日は普通、「ものけ」と読む。しかしながら、「もっけ」の意味は、中国語「物怪」の意味と似ている。同じ漢字に二つ以上の読みがあり、どう読むかによって意味も少し変わってくる。日本語の特徴として、漢字という文字そのものだけが意味を表すのではなく、その漢字をどう読むかということも言葉の意味を表すうえで大切になってくるというところがわかる。

ここで、中国と日本の古代の文献からそれぞれの用例を挙げてみよう。まず、「物怪」の用例は次のようである。

① 所見天樂、皆國殊窟穴、家占物怪、以合時應、

其文圖籍、襪祥不法。(『史記』²⁴天官書第五)

② 萇弘乃明鬼神事。設射狸首。狸首者諸侯之不

來者。依物怪、欲以致諸侯。諸侯不從。而晉人執殺萇弘。周人之言方怪者、自萇弘。

(『史記』封禪書第六)

③ 曰、何謂物、曰成於形與聲者、鬼神是也、不能有形與聲不能無形與聲者、物怪是也、故其作而接於民也無恒、故有動於民而爲禍、亦有動於民而爲福、亦有動於民而莫之爲禍福、適丁民之有時也、作

原鬼、
(韓愈「原鬼」⁽²⁵⁾)

④ 季桓子穿井、得土缶、中有羊焉。使人問仲尼曰、「吾穿井獲狗、何也。」仲尼曰、「以丘所聞者、羊也。」非曰、「君子於所不知、蓋闕如也。」孔子惡能窮物怪之形也、是必誣聖人矣。

(柳宗元「非國語」上・墳羊⁽²⁶⁾)

以上の①②④まで中国の史書などから「物怪」の用例を挙げてみたが、これ以外の『漢書』、『晉書』、『隋書』、『唐書』、『宋史』などからも「物怪」の語が使われている。⁽²⁾『史記』で使われた「物怪」用例①は、「天変に應じて国ごとに地域対応をし、家ごとに物怪を占って、その時と事に対応した」という「天変」のこととを意味している。用例②は、「周に参朝しない諸侯に萇弘が奇怪な方術で参朝させようとしたが、諸侯は従わず、むしろ晋の人に殺されてしまった」という。ここでは、「奇怪な方術・妖術」のことを意味している。用例④は、国語という書物を柳宗元が非難したもので、「土の中の甕から生きている羊が出てきた」とことを、博物である孔子を試そうと「生きている狗が出てきた」という。ここで柳宗元は土の

中から生きているものが見つかったことに対して
 「物怪」だといふ。つまり、「奇怪な物」、あるいは
 「奇怪な現象」として解釈している。用例①、②、
 ④の「物怪」は、日本での使用例と違って、靈的存
 在より奇怪な現象、怪しい現象のことを意味してい
 る。用例③に戻ると、仏教を批判し、儒教を重んじ
 た韓愈の「原鬼」(鬼とは何か)では、「鬼」と「物
 怪」の本質について詳細に記している。「鬼」は声も
 形も氣(觸覚性)の物(も無い)と言ひ、「物」には、形
 と声によつて成立つ土、石、風、雷、人、獸、それ
 から声も形も無い「鬼神」があると言ふ。しかし、
 形も声も無いのに人に接觸する物があつて、それが
 「鬼」と「物怪」だとする。人が悪いことをしたこ
 とによつて「鬼」が物に憑いて現われ、災難を起こ
 すとする。また必ず形と声があり、現れ、災難を起こ
 ない「物怪」はたまに出現し、人に憑いて禍をもた

らしたり、福をもたらしたり、あるいは禍福をもた
らさないこともあるとする。韓愈は「鬼」が崇る原
因は人間自身が招くことである。「鬼」のことを「も
の」とし「の」とし「の」のように考えていたことが窺える。
『今昔物語集』では、「物怪」と書いて「もの」のさ
とし「と訓じた用例がある。

① 此ノ事ニ依テ、様々ノ物怪有ケレバ、占トス

ルニ、異国ノ軍いぐなみおこり発テ可来きたるべキ由よしヲ占セ申ケレバ

(卷第十四第四十五)

② 其ノ後、家ニ物怪ものごとしノ有ケレバ、陰陽師ニ其ノ

崇ヲ問フニ、「其ノ日重ク可慎つつしむべシ」トトタリケレ

バ、其ノ日ニ成テ、門かどヲ差さし籠こめテ堅ク物忌ヲ為ル
二、
(卷第二十七第十三)

右の①の傍線部について新編全集の頭注では、「異変。不思議な前兆」と解釈している。また、②については「頭注では、「神仏のお告げ、またはそれを示す異変」と解釈してあり、韓愈が言った「鬼」と「物怪」の記述に類似している。

森正人(28)氏は右の①②の読みを「もつくゑ」と読むべきで、この文章での「物怪」を「大きな凶事、厄災の予兆としての変異」として意味を解いている。その根拠として平安末期の辞書である『色葉字類抄』モ豊字の「物怪 陰陽部／災異」を挙げている。確かに「物怪」と書いて「もつけ」と読むこともあり、

この場合は人に不吉な感じを与える異変・災害・不幸の意味である。因みに、『今昔物語集』の新編全集では、「物怪」を「もつくゑ」と読む用例はなかったが、用例②の岩波新大系では、「もつくゑ」と訓じており、「もののさとし」とも読めると注に付けている。また、「物」と「怪」の間に助詞「の」を入れると、「もののけ（物ノ怪）」と読むが、この時は死霊・生霊・邪気のことであり、これらの祟りの意味として捉える。このように、「物怪」の読みについて『今昔物語集』は、「もののさとし」、あるいは「もつくゑ」と助詞「の」を入れた「もののけ」を別語⁽²⁹⁾のように分けて表記している。

日・中の「物怪」表記の例に続き、さらに、「物気」の用例を中国の古代文献から挙げる。

① 涼風居西南維、主地。地者沈奪萬物氣也。六月也。律中林鐘。林鐘者言萬物就死、氣林林然。其於十二子爲未。未者言萬物皆成、有滋味也。北至於罰。罰者言萬物氣奪、可伐也。北至於參。參者言萬物可參也。（『史記』律書第三）

② 鬼之見也。人之妖也。天地之間、禍福之至、皆有兆象、有漸不卒然、有象不猥來。天地之道、人將亡、凶亦出、國將亡、妖亦見。猶人且吉、吉祥至、國且昌、昌瑞到矣。故夫瑞應妖祥、其實一也。而世獨謂鬼者不在妖祥之中、謂鬼猶神而能害人、不通妖祥之道、不睹物氣之變也。國將亡、妖見、其亡非妖也。人將死、鬼來、其死非鬼也。亡國者、兵也、殺人者、病也。

これ以外も『漢書』、『後漢書』などからも「物氣」
 の語が使われている。⁽³¹⁾ 用例①は、「物氣」とは「萬物
 の氣」という万物にある氣のことを指している。ま
 た、用例②の『論衡』は後漢時代の様々な学説や習
 俗に對して批判を記したもので、ここでは「物氣之
 變」のことに關係として捉
 えられている。全体の文章から見ると、この『論衡』の
 「訂鬼」の条は「鬼」の屬性について詳しく記して
 いる。以上の二つの用例からは、前掲した『漢語大
 詞典』で記されている「何か悪い事が起きそうな怪
 しい氣配の事」や化物・妖怪などの氣、またはそれ
 らのエネルギーの「意味からは少し離れている」とこ
 ろが、全体の内容から考えられることは、目に見え
 ない氣のことで、それが何らかの影響によって鬼に
 もなったり、物怪にもなったり、病氣にもなったり、

ものさしとして捉えることが出来るのではない
いかというところである。やはり、すべての「物」は
「氣」で作られているので「物氣」とは、「萬物の氣」
のことである。この氣の発する物によって「鬼氣」、
「妖氣」、「火氣」などという語が『論衡』にはよく
見られる。従って、「物^{もの}」が現れる前に起こる現象、
もしくは怪しげなるしもの現われ、予兆として理
解することまできよう。
一方、日本語の「物怪」と「物氣」については、
異字同義語という説と同音異義語という説がある。
先行研究には、漢字は違っても意味が同じであ
る異字同義語説が多い。それを裏付ける例として『源
氏物語』と同時代の源経頼の日記である『左経記』
寛仁二年（一一〇一）閏四月十七日条で「早旦法性
寺に参る、御惱頗る宜し、御惱物氣云々」と「もの

の「の漢字表記が「物氣」と表記されている。また、寛弘五年（一〇〇八）九月十日条の「紫式部日記」には、「御物の怪どもかりうつし、かぎりなくさわざのしる」と、「物の怪」の表記が使用されてい
 いる。同時代にも「物の怪」の表記として「物怪」
 と「物氣」も使われたことが窺える。さら
 に、右の「左経記」寛仁二年閏四月十七日条の三日
 後である二十日条の「小右記」では、道長を胸痛で
 苦しめた兄道兼の死靈を加持祈禱する場面で、夜に
 この邪氣を憑坐に移したが「名の称せず。気色故二
 条相府の靈の如し」とあるように当時、「物の怪」、
 「物氣」の「邪氣」とあるように「物の怪」は病氣の
 原因として「物の怪」と「物氣」を
 あらう。のけ「邪氣」と「靈」などは病氣の原因とし
 使分け、藤本勝義氏³²は「源氏物語のへ物の怪」文

学と記録の狭間―』によると、「いわゆる物の気は、主に人霊の憑依によつて、人を病に陥れたりする、おそましき悪霊の類をイメージするものとなっている。しかし、元来『物の気』は、特定の靈魂を指示するものではなかつた。特に平安時代初期～中期の史書・記録類でのものは、多く『物恠』と記されていて、ほとんどが、漠然とした怪異現象を示している」として、いくつかの例を挙げてゐる。まずは、

此日、御卜の事有り。仍りて神祇官陰陽寮等を召す。日本紀所に於て、伊賀出雲兩國言上の物恠等の事を卜占せしむ。

（『本朝世紀』天慶五年四月十日条）

この四日後の記事には、

又、近曾伊賀出雲国等恠異有るの由の解文を
言上せり。神祇官陰陽寮勘申で云はく、恠を見
る国及び震異乾坤の方の国に疾疫兵乱有るべし、
と申せり。

（『本朝世紀』天慶五年四月十四日条）

最初の記事では「物恠」と記し、その四日後は「恠
異」と記している。その怪異現象を占った結果、疾
疫兵乱、つまり伝染病や戦乱が起るといふ占いで
あった。ここでいう「物恠」の「恠」の使い方とし
て、天変地異、つまり天変上の怪異現象で、崇りの
範圍も個人ではなく、大勢の人が巻き込まれる崇り
である。藤本氏は言う。一方、「物氣」の場合、
個人に取り憑き、病気にさせる意味が多く、その例
として、『貞信公記』延喜十九年（九一九）十一月
十六日条「五節の一人忽に物氣に煩ふ。他人を以て

舞はしむと云々と、五節舞姫が物気にとり憑かれ
たことを挙げてゐる。また『小右記』寛仁四年十月
二日条に、後一条帝の病氣に關して「又種々物氣顯
露云々」など、崇りの範圍が個人という狭い範圍で
の「物氣」と、崇りと關係ない大勢が巻き込まれる
「物怪（恠）」と區別してゐる。
そもそも、「物怪（恠）」が初めて日本の史書に記
されたのは、『日本後紀』天長七年（八三〇）閏十二
月二十四日のことで、これを『日本紀略』が引用し
てゐる。

甲午。僧五口を請じ金剛般若經を読み奉る。
兼ねて神祇官をして解除せしむ。物恠を謝する
也。

この記事も藤本氏が述べるように不特定多数に対す

る崇りについでのものであった。この語が初めて記された『日本後紀』には「物恠」という漢字表記を用いていることから、やはり漢籍や歴史書による「物怪（恠）」の記事は、中国の「物」に対する怪異現象という「物怪」に似ている。一方、「物氣」は靈的存在による祟り、ある面では、人間が作り出した人工的な存在の怪異現象かも知れない。何故かというところ、「物怪（恠）」の使用は歴史書や漢籍に多く見られるし、「物氣」の使用は虚構の物語に多く、平安中期以降からは日記類にも多く見られるからである。今日の『源氏物語』や『栄花物語』、大鏡』などでは「物の怪」の表記が一般的であるが、江戸時代に読まれたことが本花物語』では「物の氣」の表記が使われたことが本居宣長の『古事記伝』³⁰³から窺うことが出来る。

者ではなく、靈験ある山に籠って修行しな³い、修験
祭などによつて退治、または治癒させようとした。思
い、仏教によつて修行、陰陽道による祓、神道による
従つて、陰陽道に基づく俗信の原因が盛んな時代の思
な⁴ど、陰陽道に基づく俗信があるいは祈禱に専念する
その結果によつては喜び、寮に占わ⁴せ、吉凶を判断、
怪異現象だと思ひ、陰陽寮に自然の些細な変化まで
りした。平安時代の貴族は自然の些細な変化まで
加持をした。平安時代の貴族は自然の些細な変化まで
また、山岳修行によつて験力を修めた修験者による
するか、重い病気や出産の場⁴は効験ある密教僧、
とは少ない。その代わり、お寺に行つて祈禱を
軽い症状でも、医者⁴を呼んだり薬を飲んだりするこ

があつて、光源氏が夕顔を亡くした後、瘡病わらはやみの発作を起こしたので「まじなひ、加持などまゐらせたまへど」効験がなく、北山のすぐれた修行者を訪ねる場面がある。ここでいう「まじなひ」祈祷とは、神仏に祈りその靈力によつて病を治療することであり、「加持」は、密教で行う祈祷の修法である。もう一つの憑り祈祷とは、平安文学によく見られる加持祈祷で、もののけを憑坐に乗り移して調伏させることである。

持 祈 紫 式 部 日 記 『 には、彰子中宮の出産に關わる加
祈 禱 の 凄 ま じ い 光 景 が 詳 細 に 描 か れ て い る 。

今とせさせたまふほど、御物の怪のねたみの
しる声などのむくつけさよ。原の蔵人には心誓阿
闍梨、兵衛の蔵人にはそうそといふ人、右近の蔵

人には法住寺の律師、宮の内侍の局にはちそう阿闍梨をあづけられたれば、物の怪にひき倒されて、いとほしかりければ、念覚阿闍梨を召し加へてそののしる。阿闍梨の験のうすきにあらず、御物の怪のいみじうこはきなりけり。宰相の君のをぎ人に、叡効をそへたるに、夜一夜ののしり明かして、声もかれにけり。御物の怪うつれと召しいでたる人々も、みなうつらで、さわがれけり。

ここは彰子中宮の出産が無事に終わって後産に入つた時、憑坐に駆り移されたもののけたちが悔しがつてわめく声など、加持の光景がリアルに描写されてゐる。また、清少納言の『枕草子』一本の二三段「松の木立高き所の」では、女主人がものけに悩まされて加持祈禱をする場面が描写されている。

涼しげに透きて見ゆる母屋に、四尺の几帳立
てて、その前に円座置きて、四十ばかりの僧の、
いと清げなる、墨染の衣、薄物の袈裟、あざや
かに装束きて、香染の扇を使ひ、せめて陀羅尼
をよみぬたり。
物の怪にいたうなやめば、うつすべき人として、
大きやかなる童女の、生絹の単衣、あざやかな
る袴、長う着なしてぬざり出でて、横ざまに立
てたる几帳のつらにぬれば、とざまにひねり
向きて、いとあざやかなる独鈷を取らせて、う
ち拝みてよむ陀羅尼も、たふとし。
見証の女房あまた添ひゐて、つとまもらへた
り。久しうもあらで、ふるひ出でぬれば、もと
の心失せて、行ふまに從ひたまへる、仏の御
心も、いとたふしと見ゆ。みな内外したり。た

ふとがりてあつまりたるも、例の心ならば、い
かにはづかしとまどはむ。みづからは苦しから
ぬ事と知りながら、いみじうわび泣いたるさま
の心苦しげなるを、つき人の知り人どもなどは、
らうたく思ひ、け近くゐて、衣ひきつくろひな
どす。かかるとに、よろしくて、「御湯」など言ふ。
北面に取り次ぐ若き人どもは、心もとなく引き
さげながらいそぎ来てぞ見るや。単衣どもいと
清げに、薄色の裳など萎えかかりてはあらず、
清いみじうことわりなど言はせてゆるしつ。「几
帳の内にありとこそ思ひしか、あさましくもあ
らはに出でにけるかな。いかなる事ありつらむ」
と、はづかしくて、髪をふりかけて、すべり入
れば、「しばし」とて、加持すこしうちして、「い

かにぞや。さはやかになりたまひたりや」とて、
うち笑みたるも、心はづかしげなり。「しばしも
候ふべきを、時のほどになりはべりぬれば」な
ど、まかり申しして出づれば、「しばし」などと
むれど、いみじういそぎ帰るところに、上臈と
おぼしき人、簾のもとにぬざり出でて、「いとう
れしく立ち寄せたまへるしに、堪へがた
う思ひたまへつるを、ただ今おこたりたるやう
に侍れば、かへすがへすなむよろこび聞えさす
る。明日も御いとまのひまにはものせさせたま
へ」となむ言ひつつ、「いと執念き御物の怪に侍
るめり。たゆませたまはざらむ、よう侍るべき。
よろしうものせさせたまふなるを、よろこび申
しはべる」と、言すくなにて出づるほど、いと
験ありて、仏のあらはれたまへるとこそおぼゆ
れ。

女主人の加持祈祷する場には、ものけの退散を担
当する四十歳ぐらいの僧が几帳の外で陀羅尼を誦し
ている。それからものけを驅り移す憑坐へ移すべ
き人として、大柄の童女が几帳の所に座っている。
僧は女主人にものけを童女に驅り移すために独鈷
を持たせて祈祷をしながら陀羅尼を誦している。し
ばらく経つと、女主人のものけが童女に乗り移し、
気分も少しよくなつたので女房たちが女主人に薬湯
を飲ませる。女主人のもものけが憑坐に乗り移ると、
違う部屋に移され、そこでもものけの正体を憑坐の
口を借りて名乗らせたり、言いつくすべさせたりす
ることによつて調伏させるの加持の憑り祈祷であ
る。このよくな騒々しい加持祈祷が無事終わり、も
のけが驅り移された童女のこゝとが氣になつた女房
たちは童女がいる所に行く、すでに僧によつても

ののけは退散されていいた。氣をもとに戻した童女は
乱れた自分の姿に気づき、恥ずかしく引つ込むの
でである。清少納言はこの加持祈禱に効験を現わした
僧に對して「仏のあらはれたまへる」と、仏の化身
と絶賛する。その反面、「すさまじきもの」第二三段では、もの
のけを調伏しようとする者が自信満々に憑坐に独鈷や
数珠を持たせ、高い声を絞り出すようにして陀羅尼
を誦していたが、まったく効験ない。法力ある僧で
あれば目に見えない護法童子が現われ、ものけを
退治させて加持祈禱は終わるはずなのに、憑坐にも
ののけを驅り移すことすらできなく、結局憑り祈禱
を諦めて経文を誦し続けるが、それもまた疲れたか、
あくびをしたり横になつてしまふ様子であつた。
その姿を清少納言は「いとをかしまうさまじげなり」と
その毒で興ざめのする感じであるといふ。また、

「にくきもの」第二六段には、加持祈祷が商売繁昌
であちこちのもの、加持祈祷が陀羅尼を誦す
で声が半分眠ったような声になる、験者が描かれてい
る。それに對して「いとにくし」と、とても憎らし
いと、いう。また、『枕草子』の「苦しげなるもの」段
には、頑固なもののけの調伏を頼まれた験者が自分
の法力の弱さ、効験の無さによつて人の笑いものに
なることを恐れ、一生懸命になつている姿が描かれ
る。それを清少納言は「いと苦しげなり」と、とて
も辛そうに思つていた。『枕草子』には、ものけ
このように清少納言の『枕草子』には、ものけ
の退治法として加持祈祷に取り組んでいる僧、験者
の大変さと金儲けのような加持祈祷を行なう験者の
滑稽が面白く描かれていゝ。加持祈祷に使われたものは何
があるのか。まず、加持祈祷に欠かせない護摩を焚

くことがある。『源氏物語』の葵巻を見ると、六条御息所が自分の着ている「御衣などもただ芥子の香にしみかへりたる」と加持祈祷に使われる芥子の匂いが染み込んでいることを不気味に思い、「御汨参り」へ髪を洗うこと、「御衣着替へ」などしても消えなかつた。六条御息所の身体に加持の時に焚く護摩（芥子）の香が染み付いていること、つまり葵の上に取り憑いている生霊は噂通り、御息所自身であった。これを自覚するきっかけである。護摩を焚くことは、病人を癒す効果や病人の臭気を消すという作用を利用した邪気を祓う呪術的な力として当時の加持祈祷には欠かせないものであった。ちなみに、今日は麻薬に使われる芥子を吸うと、幻覚状態になり、見えなものであるのが見えたり、異常な行動をするなど、まるで憑依されたかのような様子になるのは当然である。

加持　　る精　い　も　る　し　の　け　坐　い　麻　る　う
持　た　こ　の　神　な　の　と　い　で　調　に　て　薬　と　。
の　せ　れ　で　治　い　の　考　当　は　伏　な　、　の　、　そ
修　て　ら　あ　療　。　け　え　時　な　の　る　病　成　狭　れ
法　、　以　ろ　に　こ　は　、　は　か　加　資　人　分　い　を
に　加　外　う　は　れ　退　こ　、　ろ　持　格　に　を　場　考
用　持　に　。　や　は　、　し　の　病　う　は　一　持　つ　て　芥　子　を　持　つ　て　、
い　祈　も　、　り　ま　、　う　の　。　種　の　幻　覚　を　利　用　あ　れ　ば　、　こ　の　人　が　憑
ら　禱　、　焚　き　物　が　重　要　な　役　割　を　果　し　て　い　に
れ　の　仏　具　は　陀　羅　尼　を　声　高　く　誦　す　。　に
る　僧　は　あ　る　独　鈷　や　数　珠　を　病　人　に
仏　具　の　中　で　両　端　が　尖　つ　て　分
の　精　神　治　療　に　は　や　り　焚　き　物　が　重　要　な　役　割　を　果　し　て　い　に
い　の　考　え　、　こ　の　病　の　原　因　を　祈　禱　を　行　う　こ　の　よ　う　に　違
る　と　は　、　こ　の　病　の　原　因　を　祈　禱　を　行　う　こ　の　よ　う　に　違
し　い　当　時　は　、　ろ　う　か　。　し　か　し　、　科　学　的　知　識　の　乏
の　で　は　な　か　ろ　う　か　。　し　か　し　、　科　学　的　知　識　の　乏
け　調　伏　の　加　持　は　一　種　の　幻　覚　を　利　用　し　た　儀　式　と　い　え　る
坐　に　な　る　資　格　を　持　つ　と　す　の　事　情　を　知　つ　て　い　る　人　が　憑
い　て　、　病　人　に　つ　い　て　全　て　の　事　情　を　知　つ　て　い　る　人　が　憑
麻　薬　の　成　分　を　持　つ　芥　子　を　焚　く　し　か　も　病　人　の　近　く　に
る　と　、　狭　い　場　所　で　大　勢　の　僧　侶　が　お　経　を　読　み　、　そ　こ　で
う　。　そ　れ　を　考　え　て　、　当　時　の　加　持　祈　禱　の　現　場　を　想　像　す

岐^さしいない独^さと、両端が三叉に分かれている三
鉦、両端が五叉に分かれている五鉦があり、これら
を金剛杵（こんごうしよ）と言う。『佛教語大辞典』
によると、金剛杵は「古代インドの武器。堅固であ
らゆるものを打ち砕くので、金剛の名を冠している。
密教で、煩惱を破碎する菩提心の象徴として用い

る。」と記している。これらも加持祈祷に欠かせない
仏具の一つである。
とところで、密教が日本に入る以前、つまり平安時
代以前の病気の治療や怨霊、もしくは神の祟りに対
処するにはどのようなことを行なっていたのであろうか。
またお金がかかる加持祈祷に恵まれていない庶民た
ちはどのような方法によって病気や災厄に対応した
のか民間信仰を探ってみたい。

はに祭に見あやリかす信る官との
 ない送の祭に對てる夢ィからるし琉がとい琉こ
 が儀相の対してみ。のの、世なたり球拳う球のよ
 、禮に談しよ次啓と襲、、のげ、琉王うな
 一をにな一般。、、の仰れ球球時代な日
 ノ行っ人。、、の祀にる王国から本の
 口なたり相ヲ口よっ因多い制定の時に自分ノ口ムと祖靈信仰を基本とす
 一巫女口寄せをし。神垂れ、カ、ンダ、リ
 と巫女口寄せをし。神垂れ、カ、ンダ、リ
 同女口寄せをし。神垂れ、カ、ンダ、リ
 じである。神垂れ、カ、ンダ、リ
 くある。神垂れ、カ、ンダ、リ
 、る。神垂れ、カ、ンダ、リ
 神。神垂れ、カ、ンダ、リ
 垂。神垂れ、カ、ンダ、リ
 れ。神垂れ、カ、ンダ、リ
 へ。神垂れ、カ、ンダ、リ
 カ。神垂れ、カ、ンダ、リ
 ン。神垂れ、カ、ンダ、リ
 ダ。神垂れ、カ、ンダ、リ
 一。神垂れ、カ、ンダ、リ
 リ。神垂れ、カ、ンダ、リ

る。間の生活の中に深く関わりが多い韓国
では、ここで日本の古代国家と関わりが多い韓国
イ）といいう巫病や神からの命令によって「ユタ」に
なる。さらには、東北地方の「イタコ」という目が見えな
い、または弱視の巫女の存在も見落とせない。「イ
タコ」は、青森県を拠点として亡き人や祖霊の言葉
を伝える口寄せを行ない、死者や祖霊と、今生きて
いる者との間をつなぐ仲介者の役割を、憑坐して、今
の「イタコ」は、密教の加持祈禱で憑坐して、口寄
せを行なったり、梓弓と叫ばれる弓状の楽器や倭琴、
である。和琴、太鼓などの楽器を用いることが特徴
である。以上、日本の三つ巫女をみると、人間世
界と靈魂の世界をつなぐ媒介者として過去も現在も人
間の生活の中に深く関わりが多い韓国

のムダン（巫堂・巫女・巫堂）についても挙げてもよい。なぜなら、韓国のムダンは、日本の平安時代、ものけ調伏をするために霊媒者となった憑坐と同様、靈魂と通じ合う巫女であるので、ムダンについて考察することには、日本の巫女を考える上でも何か参考になるのではないかと思われるからだ。アニミズムを基にした朝鮮時代のシャーマニズムである。これは朝鮮時代の土着信仰として、その起源は古朝鮮（？）紀元前一〇八年）からだとされるが、定かではない。韓国の巫俗信仰は、天神・地神・山神・人神（人神は、善霊である神明と悪霊である鬼神がある）などの神々を崇拜して、この神々と人間をつなぐ仲介者、つまりムダン（巫堂・巫女・巫堂）が中心となつて、祭祀を行う。ムダンは神に供え物をし、踊りと歌などを通じて人間の吉凶禍福を調節し

てくれることを祈願する「クツ（ク）」という儀礼
を行なう。特に悪霊である鬼神によつて病気になる
など、家にも起る悪霊の仕業に對し、それを追ひ払
う役割もある。ムダンは神と交信が出来る者とし
て、巫家に生まれ、ムダンは、神になる世襲巫と、
超自然的な現象を経験したり、または沖繩の「ノロ」
や「ユタ」のようになり、巫病や神からの命令によつてム
ダンになる降神巫がある。ムダンの起源は不明なが
ら、ムダンの祖先と言われるバリ姫（鉢里公主）
（바리공주）神話がある。二〇〇八年岩波書店から翻
訳出版された韓国の作家黄皙暎ファンソクギョン氏の『パリデギ』が
このパリ姫説話を素材とした長編小説であるので、
参考とされたい。韓国の古代文学である「叙事巫歌
（서사무가）」の中で、パリ姫説話は高麗時代以前の

ものとは推定される。巫祖になる特定の人物について
歌う巫俗神話である。パリ姫はある王様の7人姉妹
の末っ子として生まれるが、王子が欲しかった王様
によつて森へ捨てられる。ここで言う「パリ」は「捨
てる」という意味である。しかし、ある老夫婦によ
つて元気に育てられる。ある日、パリ姫の両親が病
に伏せて死にかけていたところを占ってもらったら、
その病はあゝの世の生命水へ命の泉だけ助けられ
るといふことだった。ところが、六人の姫たちは両
親のためにあの世へ行くと自信がなかつた。その時、
生まれてすぐ捨てられたパリ姫が両親を助けるため
に、日の沈む西天にある生命水を汲みに行く。とこ
ろが、生命水がある所の門を守っている守門長から、
七年間一緒に暮らしながら七人の息子を生んでくれ
れば、生命水をあげると言われ、その条件を受け入れ
る。後に生命水をもちつてこの世に戻つて来て、両

親を生きかえしたという歌である。これによってパ
 リ姫は自ら巫女の祖先になつたと伝えられる⁽⁴⁰⁾。パ
 姫はあの世とこの世をつなぐ、またあの世の力によ
 って病気を治すムダンのようにな存在であるため、巫
 女の守護神とも言われる。指すが、男性の巫覡もいて
 ムダンは巫女のこのことを指すが、男性の巫覡もいて
 一パクスは巫女のこのことを指すが、男性の巫覡もいて
 画監督前田憲二氏によると、十世紀から十四世紀
 にかけは高麗時代を迎え、この時代までには巫
 俗神事や神占いなどのクツマ王宮での神事と深くか
 かわり、ムダンや男シヤマンであるパクス(博士
 またりト師)は大変尊敬され、社会的にも高い地位
 にあつた。それ以後、朝鮮王朝になる、儒教が国
 教に定められ、クツマ王朝には軽視され、儒教が国
 教に定められ、クツマ王朝には軽視され、儒教が国

を受けようになる⁴¹。しかし、巫俗信仰は古代から現代に至るまでその影響は無視できない。いほど、韓国人の生活の中に深く浸透している。にもまた、男のシャーマンは前田氏がいうようににも、現在日本の東北地方に数・百・千・万といふ数の「悪霊」が存在しない。ムダンは悪霊を追いや、た⁴²と⁴³いう。おそらく、パンスは巫俗信仰をもとにした仏教や道教などの合成信仰としてムダンより

は新しいシャーマンの一種であろう。また、村山智
順氏はこのようにな盲人の男シヤマンに
力は経力等に依つて、正面から鬼神を威嚇し以て
鬼神をして退散を余儀なくせしむるであらう。巫覡
の方には盲人のなすが如き正面攻撃法を採る者
もあるが、一般には御曲舞踏、供物等に鬼神の歡
心を買ひ、之をおだて退て貰ふ消極的なやり方を
するであつて、支那の敬遠思想とその本質に於て
似通つたものである。⁴³ ヲと、ムダンとの相違点を述
べている。巫俗は韓国の固有民俗文化として
今もその脈が途絶えることなく、田舎の広場から
ダンの鈴の音と絶えぬ太鼓やケンガリ、銅鑼、チャ
ルメなどの楽器の音が響き渡つていゝ。戸前で天鈿

女命が「排^{ワザ}優^{オキ}」や「顯^カ神^ム明^ガ之^カ憑^カ談^リ」儀礼を行なった
とされてゐる。また、「魏志倭人伝」に、卑弥呼は
鬼道で衆を惑わしていたといふ記述もあるように、
異界と人間界の間をつなぐ者として古代日本のみな
らず韓国にもその存在を探ることが出た。このよ
うに巫女的な人物は神話時代から今日にかけて、そ
の命脈は絶えることなく、人々に親しみある存在と
して巫俗文化を創り上げて来た。超自然的な力に對
する恐れや、天神崇拜、祖先崇拜といつた土俗信仰
に人々は支配されつつ、新しい宗教が入つて来ても
そのようにならな土俗信仰が基本となつて、今後も
がれて行くことだらう。

五 まとめ
本章では、平安文学によく登場する「もののけ」

について、その意味するものは何か、また漢字表記
 に対する混同をどう解釈すればいいのか、古代から
 畏れていた異界のものに對して先人たちはどのよう
 に対処して来たのか、日本を中心として中国と韓国の実
 例を挙げながら考察した。漢字文化圏に属する日・中
 ・韓の文化や習俗は似ているところが多くなる。互い
 の民俗学や歴史学の研究に参考になると思われ。定
 義と漢字表記の混同である。それは日本語の特徴で
 ある漢字とひらがなの混じりであり、一つの単語を
 音読みをするか訓読みをするか、つまり漢字語で理
 解するか、和語として理解するかの問題が生じる。
 例えば、「鬼」という語は「おに」と読むが、「鬼神」
 の場合は「オニガミ」または「キシシ」と読める。
 それは一つの漢字に二つ以上の読み方があるからで、
 これによつて意味が変わる場合も少なくない。従つて、

て、「物怪」の語も「モノノケ」とも「ブツカイ」とも「モツケ」とも読める。「物気」も同様である。これを注意しながら古文献に接する必要がある。外来語や若者の言葉など昔に比べると、言葉の数が多く、表現も豊かになった現代人にとつて、たとえば、中国の文献に「物怪」という語を見た時、これを「ものけ」で読むべきか、「ぶっかい」で読むべきか混同するのは当然である。このように古代の日本人は、中国から仏教の経典や歴史書などが入った時、これを皆が分かるようにどう訳せばいいのか苦労したはずだ。当然、これを訳す人の性格や知識、信仰によつて書物の内容や漢字の表記は少し変わるかもしれない。たとえば「病気を意味するものけ」であるか、「逆に、得られないものけ」を「物」で表記するか、古文献にもあるように「神の気」

や「親王の氣」のように「物氣」を表記するのが正
しいか。その判断は書き手がどっちにその意味の重
点を置くかによつて決めることだと思つて、従つて、
本章ではあえてもののけの漢字表記を避けてひらが
なで表記した。
本章では、「もののけ」の意味が変化してきたこと
を、先行研究をふまえて、言葉の変遷史という面
から、もののけの様態を探つてきた。折口信夫氏の
「ものけ其他」に詳しく説明しているように、「も
のけ（靈・精靈）」が人の身体に入つて起こす病氣のこ
とをものけと言つたが、後になつて、その病氣を
起こす原因である「ものけ（靈・精靈）」、そのものを
ものけと呼ぶようになったのである。この説は、
池田弥三郎氏や三苦浩輔氏、藤井貞和氏などの論文
からも読みとることができる。もともと「物恠」は自然
界の現象であつたのが、陰陽師のト占によつて怨靈

の崇りである判断され、いつしかものけは怨霊
 の崇りとして通用するようになったのである。そ
 の怨霊の祟りが病気の原因とされるのは平安時代の陰
 陽師の特徴である。陰陽師の安倍晴明が撰した『占
 事略決』は、占術の基本的な説明や占いの解説が
 記されている。占術書で、当時の陰陽師たちの手引き
 とも言える。これを基に病気を「神の類」、⁴⁴「仏
 の類」、⁴⁴「霊鬼の類」、⁴⁴「呪詛」、⁴⁴「その他」という五つ
 に分類して占っていた。平安時代に深く関わってい
 る陰陽寮は吉凶の判断だけではなく、天文の観察や
 暦作成の管理など、平安貴族の生活に密着している
 ことから、当時のものけ観に大きく影響していた
 ことが窺える。このけ観に大きく影響していた
 人々はひたすら神に祈るしかなく、当時の神

と人間をつなぐ媒介者が必要であった。それは異界
と人間界をつなぐ巫覡にあたるものである。聖書に
も、神と人間を結ぶ大祭司や予言者たち、新約時代
にはイエスのような存在がそれにあたる。日本も韓
国もこの巫覡のような役割は、もともと王が行った。
たとえば、日本の場合は、仲哀天皇が琴を弾き、そ
の隣で神功皇后が神懸りをしたこと、また、韓国の
場合は、古代三国時代の新羅第二代王南解ナメ次次雄チヤチヤウンの
次次雄チヤチヤウンという名がシャーマンの呼称であったように、
国の祭と政治を司る役割をした記録がある。しかし
政治と宗教が分離されていく過程で、巫女が登場し
たと考えられる。現在、日本の東北地方の「イタコ」
や沖縄の「ユタ」、韓国のムダンがその例である。
以上のことから、古代国家は日本のみならず、韓

創りにマれのシ国
りもニるのヤも
上溶ズ°けー中
げけムまたマ国
て込やたいニも
いんア人うズシ
くでニ間思ムヤ
のそミの想のー
でのズ生も基マ
あ命ム活生本ニ
ろ脈のやまとズ
うを影信れなるム
°保響仰たのア時
ちが心のでニ代
つ、のべはミで
つ現ーないムあ
、代人スにかよっ
人間の生はと考つ
の生活シ考てや
文化のヤえらも、
を中ーらも、

注

(1) 『日本国語大辞典』第十二卷(小学館、二〇〇一年)

(2) 池田弥三郎「もののけの語義」『日本の幽霊』(中央公論新社、一九七四年)

(3) 折口信夫「ものゝけ其他」『折口信夫全集』第八卷(中央公論社、一九六六年)

(4) 三苦浩輔「平安文学とものけ」(『基督教文化研究所研究年報』第二十一号、一九八八年)

(5) 「物怪」の「モノ」の用例は次のようである。山有邪神、郊有姦鬼、遮衢塞径、多令苦人。

(景行紀四十年)

四つの蛇、五つの毛乃の集まれる穢き身をば
厭ひ捨つべし(仏足石歌)
天雲のよそにみしより吾妹児に心も身さへ縁
西鬼尾(万葉四ノ五四七)

朝東風に井堤越す波の外目にも不相鬼故滝も
とどろに（万葉十一ノ二七一七）

（6）服部敏良『平安時代医学の研究』（科学書院、

一九八〇年）または、『王朝貴族の病症診断』
（吉川弘文館、二〇〇六年）による、「ものの
け」の記事は疾病解説の「日記物語と疾病」
の章に四番目の病名として載っている。

（7）『古事類苑』（古事類苑刊行会（神詞廳藏版）
一九三一年）の方技部十八（疾病四）による
もの。

（8）『倭訓栞下』（皇典講究所印刷部、一八九八
年）による「ものゝけ」記述である。

（9）許^{ホシユン}浚『原本東醫寶鑑』（豊年社刊行）慶長十

八年（一六一三）、許^{ホシユン}浚によって刊行された

韓国の朝鮮時代の医学書である。疫病・婦人科・小児科に関するもの。その内、巻七の「邪祟」である。漢文の現代語訳は、『對譯東醫寶鑑』（法仁文化社、一九九九年十二月）を参考した。

(10) 肥後和男「平安時代における怨霊の思想」『御霊信仰』民衆宗教史叢書第五卷（雄山閣、一九八四年）

(11) 平津館叢書『説文解字（一）』『説文解字第二上』（芸文印書館、一九六七年）に、次のように記されてある。

萬物也牛為大物天地之数起
於牽牛故从牛勿声文弗切

(12) 藤井貞和『物語の起源―フルコト論』（筑摩書房、一九九七年）

(13) 折口信夫「鬼の話」『折口信夫全集』第三卷

(中央公論社、一九九六年)

(14) 『萬葉集』における「鬼もの」の用例は次のよう

である。

一・卷第四―五四七番

天雲之外從レ見吾妹兒尔心毛身副縁西

鬼尾

二・卷第四―六六四番

石上零十方雨二將レ関哉妹似相武登言

義之鬼尾

三・卷第七―一三五〇番

淡海之哉八橋乃小竹乎不レ造レ笑而信

有得哉恋敷鬼呼

四・卷第七―一四〇二番

殊放者奥從酒嘗湊自辺著経時尔可レ放

鬼香

五 · 卷第十一 | 二五七八番

朝宿髮吾者不_レ梳愛君之手枕觸義之鬼

尾

六 · 卷第十一 | 二六九四番

足日木之山鳥尾乃一峯越一目見之児尔

应_レ恋鬼香

七 · 卷第十一 | 二七一七番

朝東風尔井堤超浪之世染似裳不_レ相鬼

故滝毛響動二

八 · 卷第十一 | 二七六五番

吾妹子尔恋乍不_レ有者苻薦之思乱而可

死鬼乎

九 · 卷第十一 | 二七八〇番

紫之名高乃浦之靡藻之情者妹尔因西鬼

乎

一〇 · 卷第十二 | 二九八九番

今更何壯鹿將レ念梓弓引見施見縁西鬼

乎
十一・卷第十二―二九四七番

念西余西鹿齒為便乎無実吾者五十日手

寸応レ忌鬼尾

以上、十一例がある。しかし、「鬼」の漢字以外も「もの」と読む用例が七種類あつたので挙げて置く。

一・「物」と書いて「もの」と読む用例…一二

九例

二・「毛乃」と書いて「もの」と読む用例…五

例

三・「毛能」と書いて「もの」と読む用例…三

〇例

四・「勿能」と書いて「もの」と読む用例…一

例

五・「母乃」と書いて「もの」と読む用例 ..

五例

六・「母能」と書いて「もの」と読む用例 ..

二二例

七・「物能」と書いて「もの」と読む用例 ..

一七例

(1 5) 馬場あき子『鬼の研究』(筑摩書院、一九八

八年)

(1 6) 森本茂『伊勢物語全釈』(大学堂書店、一

九七三年)

(1 7) 仏教の「邪鬼」について、『佛教大事典』

(小学館、一九八八年)によると、「四天

王の足下に踏まれている鬼。夜叉」のこと

である」と記してある。また、「ふつう四

天王像は一鬼を踏まえるが、東大寺法華堂

像や東大寺のよう二鬼に造られる場合も

(1 8)

ある。なお毘跋毘沙門天が地天女とともに踏む、二邪気は、とくに尼藍姿・毘藍姿とよばれる。また毘沙門天の腹部の鬼面は海若とよばれ、のち毘沙門天が踏む邪気も耐薰とよんだ。転じて俗に人に逆らう者のこととを天邪鬼という。これによって、鬼の姿は仏教の影響が大きくなり関係していることが窺える。

(1 9)

元和三年古活字版二十卷本『倭名類聚抄』(勉誠社、一九七八年)による引用。因みに、『倭名類聚抄』は、醍醐天皇の皇女勤子内親王の命によつて承平年間(九三一〜九三八)に源順が編纂した日本最初の漢和辞書である。

中国の『漢語大詞典』によると、「幽魂。人の死後の靈魂をいう。またひろく鬼神をさ

(20)

す。「と幽霊の定義について記している。

鉄剣に刻まれている銘文は全部一一五文字で、その内容は次のようである。

(表) 辛刻年七月中記乎獲居臣上祖名意富

比埜其兒多加利足尼其兒名亓已加利
獲居其兒名多加披次獲居其兒名多沙

鬼獲居其兒名半亓比

(裏) 其兒名加差披余其兒名乎獲居臣世々

為杖刀人首奉事来至今獲加多支鹵大
王寺在斯鬼宮時吾左治天下令作此百
練利刀記吾奉事根原也

「ワカタケル大王」について、『古事記』に

は、「大泊瀬幼武」とあり、『日本書紀』に

は「大長谷若建」とあり、雄略天皇のこと
である。

高橋一夫『鉄剣銘一一五文字の謎に迫る・

- 埼玉古墳群』(新泉社、二〇〇五年)、江上波夫「金石文としての稻荷山鉄剣銘(講演)」(『古代日本の民俗と国家』出川出版社、一九九九年)参照。
- (21) 藤尾知子「ものけ系譜」『国語語彙史の研究 二』(和泉書院、一九八一年)
- (22) 『漢語大詞典』第六卷(漢語大詞典出版社、一九九〇年)
- (23) (注1)に同じ。
- (24) 吉田賢抗著新訳漢文大系第九四卷『史記 四(八書)』(明治書院、一九九五年)
- (25) 松平康國講述『二大漢籍国字解』第九卷「八大家文第一、卷一(韓愈著)原鬼」(早稲田大学出版部、一九二八年)
- (26) 『柳宗元集』第四冊(中華書房、一九七九年)
- (27) 台湾中央研究院歴史語言研究所漢籍電子文

献での検索による。

(2 8)

森正人「へもののけ」考―源氏物語読解に向けて―『夢と物の怪の源氏物語』翰林書房、二〇一〇年)

(2 9)

森正人氏は「もっけ(物怪)」と「もののけ(物の怪)」は別語であると『邦訳日葡辞書』を挙げている。「*Moore*.. 不幸な事、あるいは、悪いことや堪え難い事などが思いがけなく起こること。*Moore*.. 魔物に取りつかれた人の体内にいるという悪魔、狐、またはそれに類するもの。」と、室町時代においてても明らかに別語であったと述べている。

(「モノノケ・モノノサトシ・物恠・恠異―憑霊と怪異現象とにかかわる語誌」『国語国文学研究』第二七号、一九九一年)

(3 0) 山田勝美著新訳漢文大系第九四卷『論衡 下』

(明治書院、一九八四年)

(3 1)

台湾中央研究院歴史語言研究所漢籍電子文
献での検索による。

(3 2)

藤本勝義『源氏物語のへ物の怪』—文学と
記録の狭間— (笠間書院、一九九四年)

(3 3)

本居宣長『古事記傳 三』二十三之卷 (日本
名著刊行會、一九三〇年) によると、「榮華
物語、玉群菊巻ハ頼道大將の病給ふ事を云
る段」に光よし吉平など召て、物問せ賜ふ。

御物氣モノノケや、かしこき神氣カミノケや人の呪詛など」

云々と、現代の一般的な「物の怪」の表記
と違って「物の氣」と記している。

(3 4)

小峯和明氏によると、「聖は本来、知徳や才
芸の秀れた人物を意味した。「日知り」「火
知り」の語源説や「歌聖」「碁聖」の用語に

(35) 『日本仏教史辞典』(今泉淑夫編集 吉川弘文

館、一九九九年)によると、「加持は確立と
か、決意の義から転じて加護の意味に用い
られる。密教では特殊な解釈をして『加』
とは仏の大悲大智が衆生に加わること、
『持』とは衆生がこれを受持することであ
る。」と定義している。

また、竹園賢了氏は「加持祈祷というのは人
間が神仏の加護によって日 常生活の災難
を免れて幸福な生活を送ろうと望んで行う
儀式である。特に加持というのは仏教の中で

の密教に於いて、行者が手指を結び合わせて一定の相を表わし、口に仏の經文を唱え、心に本尊を思い浮べるならば、この三つの行が仏に通じて行者は仏と交ることが出来、これによって行者が仏に守護せられるということとである。従つて加持とは仏が人間を守護することの意味する」という。(「加持祈祷」『國文学解釈と鑑賞』(八月特集増大号)至文堂、一九五一年)

(36) 憑坐のことを『枕草子』では「移すべき人」、『平家物語』では「よりました」、『讃岐典侍日記』では「ものつくもの」と表記している。また、もののけを憑坐に乗り移すことを『源氏物語』と『栄花物語』では「驅り移す」と表記している。

(37) 中村元『佛教語大辞典』上巻(東京書籍、

一九七五)

(38) 『古事記』中巻 二三五、二三七頁参照。

(39) 『日本書紀』巻第五 崇神天皇七年二月条参照。

(40) ホン・テハン 『서사무가 바리공주전집』①、④(叙事巫歌 파리姫全集①、④)(民俗院、二〇〇四年)

(41) 前田憲二「朝鮮半島の呪術と靈魂観」巫女^ムを貫く祭儀——『渡来の原郷——白山・巫女^ム・秦氏の謎を追って——』(現代書館、二〇一〇年)

(42) (注41)に同じ。

(43) 朝鮮総督府編『朝鮮の鬼神』(図書刊行会、一九七二年)

(44) 『占事略決』病崇法第卅七(『神道大系 論

說編十六陰陽道『神道大系編纂会、一九
八七年』の本文を引用すると、次のよう
である。

謂占崇之大體、以日辰陰陽中凶將言

之。神吉將凶、為崇神。神凶將吉、

為有崇鬼。各以神將分別吉凶。又有

氣為神所作、無氣為鬼所作。用將俱木

主ニ社神、用將俱火主竈神、用將俱

土主ニ土公及大歳神、上下俱金主道路

神、上下俱水主水神。功曹大衝主氏神、

又風太一勝先主ニ竈神、傳送魁主舞神

或以馬祠神、徵明神后大衝天剛主北辰、

天剛主水邊土公、小吉主門井土公及厨
膳、河魁主ニ竈土及丘キウ墓土公、大吉主
ニ山神大歳土公又小澤土公、從魁太一
神后主咒詛、太一主ニ毒藥及佛法、傳
送主ニ形像シユ、騰虵主竈神客死鬼、朱雀主
竈神及咒詛惡鬼、六合主縛死鬼求食鬼、
勾陣主土公廢竈神、青龍主社神及風病
食物誤アヤマリ、天后主母鬼及水上神、大陰主
廁鬼、玄武主溺死鬼乳死鬼、大裳主丈
人、白虎主兵死鬼道路鬼、天空主無後

鬼、餘^ル以余神將所決之。

※本文中の『古事記』、『日本書紀』、『萬葉集』、『今昔物語集』、『源氏物語』、『枕草子』、『栄花物語』、『大鏡』は、新編全集（小学館）による。『紫式部日記』は、小谷野純一著『紫式部日記』（笠間書院 二〇〇七年）による。

第二章 上代文学における怨霊の始源

一 はじめに
桓武天皇の平安京遷都後、怨霊の発動とされる現象やそれを恐れ、御霊として祀る御霊信仰が多く見られる。御霊信仰は、平安初期、平安京に住んでいた庶民の間から始まり、貞観五年（八六三）初めて国の行事として御霊会が神泉苑で行われた。平安中期に入ると、身の周りに起こる全ての災いを怨霊のせいにして、陰陽師による占いや験力ある密教僧、または修験者、または聖による加持祈禱を行なうなど、災いから免れようとすることが盛んになってくる。それは『続日本紀』や『日本紀略』、『扶桑略記』のような歴史物語、『御堂閔白記』、『小右記』、『紫式部日記』のようないくつかの日記類などから窺うことができる。では、平安時代以前の話が多く語られるのか。本稿では、平安時代以前

に遡った初期の怨霊思想はどのようなものであったのか、その起源を探り、古代の人々が考えていた霊魂観がどのようになつて行くのかを考察する。これらは平安文学に多く登場する「物の怪」の本質にながらる手掛かりになるだろう。

二 怨霊とは

た 史 論 『愚管抄』巻第七には次のようにある。
怨霊について、平安末期の比叡山の僧慈円が書い

趣 怨 霊 ト云ハ、センハタゞ現世ナガラフカク意
モ ヲ
ヲ ナシ事ナリ。顯ニソノムクイヲハタサネバ冥
ニ ナルバカリナリ。

怨靈とは、現世において深く恨みを持って、仇を選
んで転倒させようとし、讒言虚言を作り出し、それ
が天下にも及んで世を乱れさせ人に危害を加えたり
するものであり、現世で出来なかつたことを冥界で
晴らすも存在だと解釈して来る。要するに、恨みを持
たせた相手を生きたままに果せなかつた場合は死んだ後
あり、それが現世で果せなかつた場合は死んだ後も
その恨みを相手に晴らすという執念深いものである。
怨霊という語句が用いられずとも、そのような怨
霊に相当する存在への記述は遡ることができる。例
えば、『三代実録』貞観五年五月二十日条には、「事
に坐して誅せられ、冤魂厲をなす」として、これが
疫病につながるのと記されている⁽¹⁾。この記事の疫病の
流行は、菅原道真の怨霊事件に較べると間接的な攻
撃という印象を受ける。道真を排除した人々が集う

信じていた古代人も怨霊思想と
いう感覚は全くなか
った。は言いついた。切れない
良末期や平安時代のよう
に皇位継承に深く関わ
った。怨霊とは少し異なる
か。もしも別表現で怨霊
の存在が示され、以外
の「祟り」など別の表現
で怨霊の存在が示され、
踏躰する怨霊や物の怪の
跳梁はこれとどのよう
な関係、影響力を持つて
いるのか、まず上代文学
から探ってみたい。

三 記紀神話に見る恥
神々の世界に怨霊が存在した
とは、少し抵抗感がある
かも知れない。しかし、
怨むことは人間だけが
持つてくる感情ではない
よ。『古事記』や『日本
書紀』に表される神々の
怨みを考える上で、鍵と
なるのは恥の感覚であった。
なお、本文について

『古事記』と『日本書紀』は新編全集（小学館）に
よるものとする。

『古事記』による恥の表記は、「恥」、「辱」、「耻」、
「忤」、「慚」を用い、『日本書紀』では、「恥」、「辱」、
「羞」、「慚」、「慙」、「垢」、「戮」、「慝」などが用い
られていゝる。本稿はその中から「辱」、「羞」、「忤」、
この三つの漢字表記における「恥」の感情が、
この問題を探つてみたい。また、この恥の感情が、
どのような関係性を持つていゝるか考察してみたい。
い。

（イ）伊耶那美の辱は

高天原で生まれた伊耶那岐と伊耶那美は、
淤能碁おのこ

呂^ろ島に天降りし、天御柱を立てて八尋殿という神殿
を建てる。そこから日本列島の島々（国生み）や石、
風、山などの自然神を生み出した。しかし、火の神
である迦^か具^ぐ土^ちを生んだために、伊耶那美は女陰を焼
かれて病み伏してしまい、ついに神^か避^むさる。愛する妻
を失った伊耶那岐は悲しみのあまり、火之迦具土神
を切り殺してしまふ。さらに伊耶那美を元の世界に
戻すため、黄泉国を訪問し、現世に戻るように訴え
る。伊耶那美はもう黄泉国の食べ物^{（2）}を食べてしまっ
たので、もとの世界には戻れないと言う。しかし、
黄泉国まで迎えに来てくれた伊耶那岐の熱意に黄泉
神と相談してみることにする。但し、その間「我を

視ること莫れと、絶対自分の姿を見ないようにと
言つて殿の内に入る。と、伊耶那美がなかな
か戻つて来ないので、待ち切れなくなつた伊耶那岐
が禁止された殿内に入る。

待つこと難し。故、左の御みづらに刺せる湯
津々間櫛の男柱を一箇取り闕きて、火を燭
して入り見し時に、うじたかれころきて、頭
には大雷居り、胸には火雷居り、黒雷居
り、陰には析雷居り、左の手には若雷居り、右
の手には土雷居り、左の足には鳴雷居り、右の
足には伏雷居り、あはせて八くさの雷の神、成
り居りき。(『古事記』上巻)

そこで見た光景は、伊耶那美の顔は蛆虫がたくさん
集り、身体の八力所からは雷神が鳴り響く姿であつ

た。その恐ろしい姿を見た伊耶那岐は逃げ帰ろうとした。そのころに伊耶那美は「吾に辱を見しめつ」と言いながら黄泉醜女を使つて追いかけるのであつた。やつとそこから逃れた伊耶那岐は、黄泉国と葦原中国の間にある黄泉比良坂を千引石といふ巨大な岩を置いてその道を完全に塞いだ。これによつて伊耶那美の恨みは大きくなり、ついでに汝が国の人の草を、一日に千頭絞りに殺さむ」と、夫の国の人々を一日に千人を絞め殺すと呪う。これが人間の「死」の始まりであろう。これに対して伊耶那岐は「汝なむちしか然しか為せば、吾あれ一日とひに千五百ちいほの産屋を立てむ」と、一日に千五百の産屋を立てて人々を誕生させると返すのであつた。これは伊耶那美の「死」に対する「生」の始

まりであろう。最初は伊耶那美が自分の姿を見るな
と、いう禁忌を伊耶那岐が破ったことから恥の感情が
恨みに変わり、相手を呪い崇るという結果となった。
また伊耶那美の辱がきっかけで死の国と生の国は
別々の世界となってしまうのである。自分の姿（正
体）が見られ、醜いとか汚いと思われることが「辱」
の感情を引き起こしたのである。これは死と生と
いう二つの世界への分かれであり、愛する夫婦の離
別でもある。神の世界でも恥じることには大きなエネ
ルギ―を起こすことであつたことが窺える。

（口）大物主神の羞は

紀 大物主神については『古事記』以外にも『日本書
紀』や『風土記』にも登場する「崇りの神」、または
「色好みの神」として知られている。まず「崇りの

神として登場は、崇神天皇の御代に疫病が流行り、民が死に絶えようとした時、天皇が神託を得るために神かむとこ牀でお休みになったところ、夢に大物主神が現われる。

是は我が御心ぞ。故、意富多々泥古を以ちて我が前を祭らしめたまはば、神の氣起らず、国も亦安く平ぎなむ（『古事記』中巻）

この疫病は大物主神、自らがやったことで、自分の子孫が祀らないと神の氣、つまり崇りをなすという恐るべき威力ある神である。神の崇りによる疫病流行の記録は、『日本書紀』に記されているこの大物主神の崇りが一番古い。右の傍線部について、新編全

集『古事記』の頭注七は、「『物の怪^ケ』のケと同じく、怪異の意」と解釈している。また、本居宣長は『古事記伝』の注釈で神を物^{モノ}ともいうので、「神の氣」も「物の氣」も同じことだと解釈している。しかし、後になってこれを分けて「神の氣」は神の崇りで、「物の氣」は人の崇りであるようになったと述べている⁽³⁾。これによつて、『源氏物語』に多々登場する「物の怪（氣）」の研究に一つの手がかりとして興味深い。ついでに「もののけ」の漢字表記については、「物怪」（新編全集『源氏物語』）、「物恠」（国史大系本『本朝世紀』）、「物氣」（新編全集『今昔物語集』）、「ものけ」（新編全集『枕草子』）など、色々な表記が論じられている。『今昔物語集』の場合は、「物怪」の

表記の用例も多く、新大系では「もののけ」と訓じ、大系では「災異」の意味として「もつく彖」、または「もののけ」と訓じている用例もある。「もののけ」の表記をめぐっては、第一章で述べたように、表記によって「もののけ」の定義が変わることはない。ただ、それぞれの表記によって、筆者が考えた「もののけ」の意味がどちらに重点を置いたかという問題である。

さて、大物主神のもう一つの側面「色好みの神」としての登場は、丹塗矢伝説と三輪山伝説である。丹塗矢伝説は、ある美人が大便をしていたところ、大物主神が丹塗矢に化けて女陰を突き、子を儲けさせたという説話である。「古事記」によると、この子が後に神武天皇の皇后富登多々良伊須須岐比売となる。三輪山伝説では、大物主神が美男子に化けて女

のもとを通い、子供を産ませたという内容に少し異なる点があるが、『古事記』と『日本書紀』にも記されていている。ある日、倭迹迹日百襲姫のところを夜ごとに通う男（大物主神）の正体に疑問を感じた女はその姿を見せることを懇願する。男はその願いに答え、「吾、明旦に汝が櫛笥に入りて居む。願はくは吾が形にな驚きそ」と、自分の姿に驚かないように言う。翌朝、女は言われた通りに櫛箱を開けて見ると、その中には衣の紐のような美しい小蛇がいた。その光景に女は驚き、叫んでしまった。その驚きに大物主神は美男子の姿に戻り、「汝、忍びずて吾に羞せつ。吾、還りて汝に羞せむ」と怒り、三輪山へ帰ってし

ま った。女 の ところ を 夜 ごと 訪 ね る 大 物 主 神 は、ま
る で 『 源 氏 物 語 』 に 登 場 す る 夕 顔 の ところ を や つ し
て 忍 び 通 う 光 源 氏 の よ う で あ る 。 こ こ で は、大 物 主
神 が 自 分 に 羞 を か か せ た 倭 迹 迹 日 百 襲 姫 に 同 じ 羞 を
か か せ る と 崇 り を 予 告 し た こ と が 分 か る 。 そ の 崇 り
は 次 の よ う で あ る 。

爰こゝに倭迹迹姫命、仰ぎ見て悔いて急居つきう。急居、

此には菟う岐き于うと云ふ。則ち箸に陰を撞つきて薨かむさり
ます。(『日本書紀』巻第五 崇神天皇)

女 は 悔 悟 の 念 に 襲 わ れ、 つ い に 箸 で 女 陰 を 突 い て 死
ぬ 結 末 で あ る 。 大 物 主 神 が 女 に も 同 じ 恥 を か か せ る
と い う こ と は、 離 縁 の 宣 言 と も 言 え る で あ ろ う 。 こ

の説話は『日本書紀』に記されてある箸墓伝説にもつながる。

三輪山伝説の大物主神の場合、伊耶那美「辱」とは少し違って、「見るな」という禁忌ではなく、「驚くな」という禁忌を破ったことである。この話の結末は、「羞」を意識した大物主神が女を恨み、呪い崇めたところ、女は「箸に陰を撞きて」死んでしまったのである。新編全集『日本書紀』の頭注は、「離縁譚は、いわゆる異類婚姻譚における『見るな』のタブーを破ったことに起因するのではなく、『驚くな』といったのに驚いた、つまり動物神としての権威が失墜したのを恥じて退去したのである。」と解釈している。つまり、驚くなと言ったことに対して驚いたことが、いかに神の神威、尊厳さを失墜させることであるかが窺える。驚いたことも羞をかかせたことと同一のもので、その対価は死で償うしかないことで

あ
ろ
う
。

(ハ) 豊玉毘売の作は

天津日高日子番能邇々芸能命と大山津見神の女木
花之佐久夜毘売との間で生まれた火遠理命の海神国
訪問の話である。火遠理命(山幸彦)は兄の火照命
(海幸彦)の鉤を海の中に失くしたため、海神の宮
に行く。そこで出逢った豊玉毘売と結婚し、海神の
宮で三年を過ごす。ところが、失くした兄の鉤を返す
すためにもとの国(葦原中津国)に戻り、鉤を返す
とともに呪術を成し、兄を自分の臣下にさせた。そ
の頃、海神の国から豊玉毘売が来て、身籠ったこと
を告げ、子を産むにあたって次のように願う。

凡て他し国の人は産む時に臨れば、本つ国の

形を以ちて産生むなり。故、妾、今本の身を以ちて産まむとす。願はくは妾をな見たまひそ

（『古事記』上巻）

すべて異郷の者は出産の時に「本つ国の形」、つまり本国の姿になつて子を産むので、決して自分の姿を見ないように願うのである。しかし、この話を不思議に思った火遠理命は豊玉毘売の出産を覗き見してしまつた。すると、豊玉毘売の姿が八尋もある大鰐に変えて這いのたかつていたのである。それに驚き、怖くなつた火遠理命はその場から逃げ去つた。その事を知つた豊玉毘売は「心恥づかし」と思い、産んだ子を残して海神の国へ歸つてしまつた。

「妾は恒に海つ道を通りて往来はむと欲ひき。

然れども、吾が形を伺ひ見つること、是甚^{はつ}作し」とまをして、即ち海坂を塞ぎて、返り入りき。

(『古事記』上巻)

豊玉毘売は、自分の醜い姿を見られたことによつてとても恥ずかしく思い、海神の国と葦原中国を往来できる海坂を塞いで海神の国へ帰つてしまつたのである。この話では、古代文献によく見られる「見るな」という禁忌を破つた結果として、海の世界と陸の世界との交流、交通の断絶が生じたことを語つている。これは、最初に挙げた伊耶那岐の黄泉国訪問と同じパターンである。豊玉毘売の場合は恨みよりも「作」に軸がおかれて、見られた側が恥を意識し、忌を破つたことによつて、見られた側が恥を意識し、

元来、自由に往来できた。二つの世界が断絶されると、いふ悲劇の結末となる。伊耶那岐と伊耶那美、それから大物主神と倭迹迹日百襲姫、また火遠理命と豊玉毘売との関係の断絶である。これが恥問題と絡んだ神の怒りの表現、つまり崇りの始まりではなかるか。それでは、ここまで見てきた記紀神話にみる三つの恥の話から時代を変えてきた平安中期の『源氏物語』にみる恥について考えてみたいと思う。

は、故大臣の娘で、前東宮の妃である。貴族社会の中、でも教養深く、品がある貴婦人として貴公子たちとの憧れであった。その彼女がなぜ光源氏の一生に生霊や死霊と現われるのであるか。単純に夫婦多妻制といふ貴族社会に苦しんでいる女性の嫉妬心が六条御息所の人生を大きく変えるきっかけであった。

たのか。新齋院御禊の日、光源氏の晴れ姿を見た
めに人目を忍んで出かけた六条御息所は光源氏の正
妻である葵上の一行に乱暴され、見物に出た大
勢の前で自分の悲惨な姿が暴かれてしまふ大事件が
起こる。当時の貴族社会は禁^ッ忌^フが多く、身分が高け
れば高いほど前驅を追わせて進むのが派手になる⁽⁴⁾時
代であつた。だから息所の深まる一方であつ
た。教養が深く、高貴な六条御息所の素晴らしい姿
では無い、光源氏の愛人といい忍び相手とされて、
に負ける立場、氏の高貴といふ乱暴され、
めちやくちや、これにはなつた惨めな姿が大勢の前で暴
たこと、これにはなつた惨めな姿が大勢の前で暴かれ、
つたこと、これにはなつた惨めな姿が大勢の前で暴かれ、

身から遊離し、葵上の出産の場に生霊として現われ、取り殺してしまったのである。要するに、嫉妬心や物思いを論ずる前に、見られたくない自分の惨めな姿が見られた辱めは、生きている人間の生身から魂が抜け出すほど恐ろしい怨霊に変わるパワーを物語が与えている点を論じるべきである。従って、恥じることとが崇りへとつながるといふことが記紀神話と『源氏物語』の六条御息所の生霊事件から窺うことができる。崇りをなすに至る恥の意識について、戸谷高明氏は、「自己と他者との関係において生ずる意識であるが、具体的には他者に対して自分が劣っていることを意識し、面目をなくしたり、名誉が傷つけられたり、侮辱されたりした時に抱く心情である」と言う。このような恥の意識は、崇りを発動させる原動力を持っていると言っても過言ではなからう。

四 崇りとその歴史的背景

記紀神話では恥が要因で神が神へと、或いは、神が人間へと崇りをなした。さらに奈良末期以降の文献では皇位継承に関わる人間が人間へと崇りをなすことがよく見られる。この「たたり⁽⁶⁾」という言葉の起源は、今日我々が考えている意味とは少し異なる。崇りについて折口信夫氏は、もともと「神の示現」であるとして、それが後世になって御霊信仰や怨霊思想によって特定の人間の怨恨感情、すなわち崇りに結びつけられたのは、日本人の宗教意識に独自の変化が生じたためだと言う⁽⁷⁾。柳田國男氏も「タタリにはもとより罰の心持はなく、ただ『現わ

れる』というまでの話だったかと思う」と言う⁽⁸⁾。また池田弥三郎氏は、次のように述べている⁽⁹⁾。

たたりとは、出現・示顯・影向などを意味するだ⁽¹⁰⁾つを語根とした語であつて、怨靈の要求する処のあるのを人間に知らせる為に、その意味をまず人にわからせようとして表わす、きざしなり、し⁽¹¹⁾るしなりを言う。

つまり、「たたり」のもともとの意味は、今日の意味と違って、神靈の出現であり、神の意志を知らせる信号である。その信号を人が知ろうと神に問えば、神靈が特定の人間や物に憑依し、その意志を伝える

のである。前掲した崇り神としての大物主神が自分の意志を知らせるために疫病を流行らせたことがその例である。

神の示現としての崇りの用例は、古く『日本書紀』神代下（第九段）一書第二に「高皇産靈尊、因りて勅して日はく、『吾は天津神籬と天津磐境とを起樹て、

吾が孫みまこの為に斎いはひ奉まつるべし。』云々」と記されている

ように、神霊が神聖な森の樹立ちの神籬ひもろぎと磐境いわさかに降臨することであつた。また、「神代上（第七段）正文」

に天照大神が天の石窟いはやに籠こつた時、天鈿女命あまのうすめが「手

に茅ち纏まきの稍ほこを持ち、天石窟戸あまのいはやとの前に立ち、巧わざに俳優をきを

作^なす。亦天香山の真坂樹を以ちて鬘とし、蘿^{ひかげ}を以ちて蘿、此には比舸^{ひか}礙^げと云ふ。手緼^{たすき}として、手緼、此には多須^{たす}積^きと云ふ。火処^{ほところ}焼き、覆槽^{うけ}置^ふせ、覆槽、此には于^う該^けと云ふ。顕^か神^む明^が之^か憑^り談^りす。顕^か神^む明^が之^か憑^り談^り、此には歌牟^{かむ}鵜^が可^か梨^りと云うと天照大神が自分に乗り移る神懸かりをしたと記されている。

古代の人々は常に神の神意をうかがい、天皇が夢によつて神のお告げをもらつたり、巫女^{ひこ}（皇后の役割^い）による神懸かりを行なつたりしたことが窺^{うかが}える。

この神懸かりは、神の意志を知るため、巫女に神靈が乗り移ることとして、平安時代の物の怪調伏の加持祈祷に似ている。その加持祈祷を行なう際、物の怪（死霊）を憑よりまし坐ましに乗り移すことと同様である。しかし、奈良以前には人間が人間に崇るという思想はなく、神の崇りだけがあつたと考えられる。『日本書紀』の天武紀には次のように記されている。

天皇の病を卜ふに、草薙劍に崇れり

天武天皇の病氣の原因は草薙劍の崇りであるとする。この劍はもともと熱田神宮にあつたものの、天智天皇七年（六六八）、僧道行が劍を盗んで新羅に逃げようとしたが、途中で嵐に遭い、迷い戻つて来たところ捕まえて、劍は無事に宮中で預かることになった。

それが朱鳥元年（六八六）、天武天皇の崩御がきっかけで熱田神宮に返還されることになる。要するに、神の祟りは神を侮り、神祀りを疎かにした結果、災いが起こるという神の意志表現、もしくは神の戒めである。神の示現である祟りの意味はその後、非業の死を遂げた人を恐れるがゆえに神として祀る御霊信仰や怨みを持つて死んだ人が祟りをなすという怨霊思想に変容していく。つまり、特定の人間の怨恨感情が祟りに結びつけられるようになっていく。

非業の死を遂げた者が生前の怨みによって自分を陥れた相手を祟ったと考えられる用例は、奈良末期にあつた藤原広嗣の乱が挙げられる。天平十二年（七四〇）、僧玄昉と下道真備の排除を求め上表文を提出した藤原広嗣が反乱を起こし、二ヶ月後に捕縛され、斬り殺される事件である。その後、天平十七年

(七四六)、あれほど聖武天皇に寵愛された玄昉は筑紫観世音寺に追放され、翌年死去するが、世間では藤原広嗣の靈によつて殺されたのだと伝えられている。⁽¹³⁾

また、天平宝字元年(七五七)には橘奈良麻呂の変があつた。橘諸兄の子奈良麻呂が推す道祖王は聖武天皇の遺言により皇太子となつた。しかし、道祖王はすぐに廃され、藤原仲麻呂が推す、後に淳仁天皇となる大炊王が新たに皇太子に立てられる。奈良麻呂はこのことを仲麻呂の専横として強い不満を持ち、仲麻呂を殺害しようとした。さらに、孝謙女帝を廃し、塩焼王、道祖王、安宿王、黄文王の中から天皇を擁立しようとした。これは政界の多くの官人や皇族を巻き込んだ大規模な謀反計画であつたが、事前には発覚し、失敗に終わる。この事件により、佐

伯全成は自殺、小野東人、道祖王、大伴古麻呂、多治比積養らは獄死する。謀反の計画は事実であり、冤罪ではないが、このような政治的失脚によって死に至った人々の怨霊が社会的恐怖と成り始めたようだ。例えば、『続日本紀』孝謙天皇（天平宝字元年七月）七月八日の記事を引用すると次のようである。

民間或は亡魂に仮託し浮言紛紜として郷邑を擾乱する者有らば、軽重を論ぜず、皆同罪とす。普く遐迹に告げて宜く妖源を絶つべし。

この記事でわかるように、世間では既に怨霊について恐れていたのが窺える。

この事件より早く史料的に確かめられる怨霊が天平元年（七二九）に起こった長屋王の変である。長屋王は武天皇の皇子高市皇子を父とし、母は天智

天皇の皇女新田部皇女である。聖武天皇即位とともに左大臣となり、政権を担うようになる。天平元年二月十日、藤原氏とは対立するようになる。天平元年二月十日、長屋王が密かに左道を学び、国家を倒そうとしていると密告があり、天皇は藤原朝臣宇合らを長屋王の邸に遣わしてその罪を追及する。その三日後（十二日）、長屋王とその妻吉備内親王（草壁皇子の娘）を自害させ、その遺骸を生駒山に葬ったとする¹⁴。実際の記録はここまでであるが、『日本靈異記』中巻「己が高徳を^{たの}恃み、賤形^{せんぎやう}の沙弥^{しゃみや}を刑^うちて、現に悪死を得し縁第一」には長屋王の屍骸について次のように記されている。

天皇、勅して、彼の屍骸を城の外に捨てて、焼

き末くだぎ、河に散らし、海に擲すてしむ。唯し親王の骨のみは土佐の国に流る。時に、其の国の百姓おほみたから多く死ぬ。云ここに百姓患うれへて官つかさに解げして言まうさく「親王の氣に依りて、国の内の百姓皆死に亡うすべし」とまうす。天皇、聞しめして、皇都みやこに近づけむとして、紀伊の国海部あまの郡の椒抄はじかみの奥おくの嶋に置かしめたまひき。

『日本靈異記』では、長屋王の屍骸を平城京の外に捨て、焼き碎いて川や海に投げ散らかせるというが、

このやり方は多田一臣氏によると、「靈の再生・報復を避けるための処置だ」という¹⁵。また川や海に投げ散らかした長屋王の骨だけが土佐の国に流れて、多くの人が死んだという怨靈の祟りを恐れ、長屋王の骨を少しでも都に近づけようとした事をみると、奈良時代以前の神の祟りから非業の死を遂げた人の祟りへと変わっていったことが窺える。さらに、傍線部の「親王の氣^ケに依りて」というところの「氣」は怨靈になった長屋王の悪気であろう。伊耶那美の呪いは伊耶那岐本人ではなく「人草」に向けられたものであつたし、長屋王の骨も流れ着いた地で「百姓」を多く殺したとされてゐる。のちの怨靈が恨むべき相手以外にもその矛先を向けるのは、このあたりを始源としてゐるのであろう。

また、この長屋王と関係がある人物で、非業の死を遂げた奈良末期の怨霊として、井上内親王が挙げられる。井上内親王は四十五代聖武天皇の娘で、後に四十九代光仁天皇の后（井上皇后、吉野皇后）となる。内親王という高い身分だけではなく、当時、女性の最高位であった皇后の座にも手に入れた。また、彼女は天皇の第一皇女ということもあり、将来、場合によっては女帝となっていた可能性もあった。う。ところで、聖武天皇の妻に、権力を握っていた藤原氏一族である藤原光明子（後の孝謙・称徳天皇）を生じた翌年に安部内親王（後の孝謙・称徳天皇）を出産する。さらに聖武天皇の即位六年後、光明子は皇后となり、安部内親王は皇太子となつた。藤原氏にとつて安部内親王を天皇にする為には、井上内親王は目障りだつたらう。井上内親王は伊勢の

斎宮として派遣される。斎宮に選定されたのは、五歳といたう幼い時期であった。が、実際、伊勢神宮に派遣されたのは十一歳である。斎宮といたう禁生は二十年余り、弟（安積親王）毒薬による他殺といふ説がある。彼の女の斎宮生活に終えて、京すゝる。彼の間の朝廷では、長い屋敷の記録に残つて、ないが、その間の斎宮生活についで斎宮生活を終えて、その乱のうな様な朝廷では、陰謀が途絶えなかつた。その混乱の中、京に戻つた井上内親王は三十一代後半になつて、白壁王（後の光仁天皇）と結婚し、酒人に親王（桓武天皇の后）と他戸親王（皇太子）を産む。しかし、桓武天皇の御間、藤原百川の陰謀によつて、宝亀三年（七七二）井上皇后は廃后となり、息子の他戸親王は廢太子となる。この事件について、『続日本紀』は次のように記している。

三月二日 皇后の井上内親王は呪詛の罪（光
仁天皇の姉・難波内親王を呪い殺したとされた）
に連座して、皇后の地異を廃された。
五月二十七日 天皇は、皇太子の他戸王を廃
して庶人とした。（中略）
今、皇太子と定めてあつた他戸王の母である母
井上内親王が呪詛によつて大逆をはかつている
ことは一度や二度のことではなく、度々発覚し
てゐる。そもそも高御座の一人の私的な位では
ないと思つてゐる。それ故、皇嗣と定めもうけ
られない皇太子の位に謀反・大逆の人の子を決
ておいたなら、公卿たち百官の人は、天子の
人たちが、天下の
人たちが、天下の
くおそれ多い。そのれだけなく、後世が平安で
末永く欠けることがないようなく、政治でなければ

ならぬと神として思うので、他戸王を皇太子の位を停め退ける、と仰せになる天皇のお言葉を、みな承れと申しつける。

井上内親王が廃后になって二か月後、他戸親王も廃太子となるが、『水鏡』では他戸親王も母と同じくあしき心があったと記している。廃后、廃太子となつて三年後、宝亀六年（七七五）四月二十七日、二人は同じ日に幽閉先で亡くなる。井上内親王五十九歳、他戸親王十五歳であった。親子が同じ日に死んだという不自然な死には暗殺説もある。『続日本紀』（講談社学術版）によると、井上内親王が亡くなった翌年から八年間にわたつて様々な災異が起こつたとする。また、二十日間以上、夜ごと京中に瓦・石・塊が降つて来たり、宮中に妖怪が現われたりしたことが

など、怪異現象が記録されている。これは藤原百川の陰謀によって廃后・廃太子になった二人の怨霊の仕業ではないかと考えられた。これによって光仁天皇は、宝亀八年（七七七）遺骨を改葬させ、墓を御墓と追称する。さらに、延暦十九年（八〇〇）崇明天皇（早良親王）の名誉回復とともに井上内親王も皇后と追号し、御墓を山陵と追称した。

以上のように、井上内親王の物語は『水鏡』⁽¹⁸⁾ や『平家物語』にもその名が伝えられているように、平安王朝の宮廷にも当然、伝えられていたと考えられる。平安中期の作品『源氏物語』に登場する六条御息所の原型⁽¹⁹⁾として井上内親王が挙げられるのは、皇太子の後であり、斎宮の母であり、死後、怨霊として祟りをなすという点がまさに六条御息所そのままであ

るからだ。歴史に詳しく光源氏の人生を揺るがす存在
 を創作するにあたり、人物造型で、井上親王のこ
 ととしての六条御息所の人物造型である。井上親
 とから大きな影響を受けたのである。むしろ井上
 内親王との完全な一致はない。しかし、モデルの一
 人と考えるのと、物語の読みがよいかになると思わ
 れる。井上親王の周圀で起きた陰謀や皇太子の廃
 立は六条御息所の夫「前坊」の身に起きていたかも
 しれない。過去を想像させる。つまり、『源氏物語』の
 桐壺巻以前に政変を想定するのである。六条御息所
 の父大臣と前坊、それらと対立した六条左大臣
 といふ構図である。従って、敗れた側の六条御息
 が生霊となつて左大臣家の葵上を殺したといふ、政
 治的怨念説も考えられる。

五 まとめ

な 怨 霊 の 思想 が 成立 する ため には、まず 霊 の 観 念 が
な け れ ば 成 り 立 た ない。こ の 霊 と い う 文 字 は そ も そ
も 中 国 の 漢 字 で あ り、紀 元 前 と い う 早 い 段 階 か ら 日
本 で 使 わ れ た と は 考 え 難 い。従 っ て、こ の 霊 を 表 わ
す 日 本 の 古 い 言 葉 は 「タ マ」 「タ マ シ」 で あ る う と
肥 後 和 男 氏²⁰ は 言 う。さ ら に、肥 後 氏 は 「古 代 に は 怨
霊 は 存 在 す る こ と が な かつ た。在 っ た の は、神 と し
て の 魂 の 崇 り だ け で あ る」と 言 う。崇 り に お け る 神
の 意 志 が ネ ガ テ ィ ブ な 感 情 に 固 定 さ れ、の ち の 怨 霊
を 予 感 さ せ る も の と し て は、最 初 に 取 り あ げ た 記 紀
神 話 が あ る。神 の 「見 る な」、「驚 く な」と い う 禁^タ忌^フが
破 ら れ た、そ の 恨 み や 憎 悪 が 恥 の 感 覚 と 結 び 付 き、
そ の 結 果、平 穩 な 暮 ら し か ら 一 変 し た 憎 し み に よ る

関係の断絶・破壊が生じる。このことから古代の崇
りの痕跡が窺える。冒頭で取りあげた三つの恥問題をま
つ目は、伊耶那岐と伊耶那美の場合で、禁忌を破つ
たことによつてあれほど仲が良かった夫婦神にも関
わらず、争いが起こり、死と生という二つの世界に
分かれ、お互いに往来が出来なくなつた。二つ目は、
崇り神として三輪山伝説と関係ある大物主神と倭迹
迹日百襲姫の場合で、前掲の「見るな」という禁忌
とは違つて、「驚くな」という禁忌である。しかし、
禁忌は破られるものであろうか、倭迹迹日百襲姫は
その禁忌を破り、大物主神の呪いによつて離縁だけ
ではなく、死になつてゐる。三つ目は、火遠理
命と豊玉依比売の場合で、出産の時にその姿を見て
はいけない禁忌を破つてしまつた火遠理命によつて、
豊玉依比売は生まれればかりの子を残して海の国へ、

帰つてしまつたという夫婦離別譚である。これらは、神話の世界での神が神へと、神が人間へと崇る怨霊の始まりではなからうか。しかし、この段階では怨霊や崇りの感覚の有無ははっきり判断できないが、怨霊思想の原点として、もしくは根源としてまとめておきたい。「見るな」の禁忌、「驚くな」の禁忌が破られたことによつて、神としての神性、本性が暴かれ、それによつて、神としての尊さ、威厳が失墜し、神による恥の意識は、今日で言う崇りの感覚と近くなるのである。

神が人間の延長であるとするならば、人間の霊も神のような威力を奮えると考えたかも知れない。怨霊思想は仏教とも結び付き、変わつて行く。例えば、仏教の影響によつて、罪意識による心の呵責が怨霊の崇りを意識させた。また、初期の崇りは、神の意志する祀りごとを疎かにしたことによつて、神の意志

が疫病の流行と行ろがいうことと家して現れた神の示現中
 あつた。と生活か人が中間心となり、神は人間延長の
 心とした。捉えられ、この間に神が意識した長の
 ように人が問も意識する。このよくなり、神が意識した
 の感覚が人間の間に意識する。このよくなり、神が意識
 にする。ように人間の間に意識する。このよくなり、神が
 の発展は権力を握る。このよくなり、神が意識する。こ
 争いからは人への恨みをもつ。このよくなり、神が意識
 で負けた。側人は死ぬ。このよくなり、神が意識する。こ
 手に現れた。そのために崇め、神の示現のよくなり、神
 である。そのために崇め、神の示現のよくなり、神が意識
 怪しむ。現れる。そのために崇め、神の示現のよくなり、
 分を祀る。そのために崇め、神の示現のよくなり、神が
 うこと、疫病の流行は神を祀る。そのために崇め、神の
 うこと、疫病の流行は神を祀る。そのために崇め、神の
 みをと現わす。そのために崇め、神の示現のよくなり、神
 をと現わす。そのために崇め、神の示現のよくなり、神が

れると考えられたことから、いわゆる御霊信仰が生まれたのである。この怨霊思想は平安時代に入ると、皇位継承に関わる怨霊にのみならず、一夫多妻制という貴族生活の影響で男女の嫉妬心による怨霊化や病気の原因を怨霊や物の怪のせいにする新しい怨霊観が生まれるのである。その一例として『源氏物語』が挙げられる。『源氏物語』の中での六条御息所は、生霊・死霊として大活躍をする。さらに、光源氏に関わる女君たちに対する嫉妬心が創り上げた形象、つまり物の怪として『源氏物語』正編を彩る人物になる。

本章は、平安文学によく登場する物の怪の始まり、その原点について考え、奈良時代の記録を中心に調べたものである。これを基に平安文学における物の怪の実態を次の章から述べていきたい。

注

(1) 神泉苑における御靈会について『三代実録』

貞観五年(八六三)五月二十日条には、次のように記されている。

廿日壬午、於神泉苑、修御靈会、勅遣左衛中将從四位下藤原朝臣基経、右近衛權中将從四位下兼行内蔵頭藤原朝臣常行等、監会事、王公卿士赴集共觀、靈座六前設施几筵、盛陳花果、恭敬薰修、延律師慧達為講師、演説金光明經一部、般若心經六卷、命雅樂寮伶人、作樂、以帝近侍兒童、及良家稚子、為舞人、大唐高麗更出而舞、雜伎散樂競、盡其能、此日宣旨、開苑四門、聽、都邑人出入縱覽、所謂御靈者、崇道天皇、伊予親王、藤原夫人及觀察使、橘逸勢、文

室宮田麻呂等是也、並坐レ事被レ誅、冤魂成
レ厲、近代以来、疫病繁発、死亡甚衆、天
下以為、此災御靈所レ生也、始レ自ニ京畿一、
爰及ニ外国一、毎レ至ニ夏天秋節一、修ニ御
靈会一、往々不断、或礼レ仏説レ経、或歌且
舞、令ニ童貫之子・粧馳射、膂力之士袒裼
相撲、騎射呈レ芸、走馬争レ勝、倡優・戯、
遞相誇競一、聚而觀者、莫レ不ニ咽一、遐
邇因循、漸成ニ風俗一、今茲春初、咳逆成レ
疫、百姓多斃、朝廷為祈、至レ是乃修ニ此会
一、以賽ニ宿一也、

(2) ヨモツヘグヒ(記)黄泉戸喫、(紀)喰泉之竈)と

言つて黄泉の国で煮炊きされたものを食べる
と葦原中国(地上、現世)に帰れなくなる
という。これと同様の伝承は、ギリシア神話や

神話は、大地の女神デメテルの娘ペルセフォ
 ネの物語である。ペルセフォネは冥府の王ハ
 デスに誘拐され、冥界の石榴の実を食べてし
 まい、地上には戻れなくなつた。反対に、フ
 インランドの英雄ワイナモネンの場合は、冥
 界王の館を訪ねた際、勧められた酒を口にし
 なかつたので無事に故郷のカレワラに戻るこ
 とができた。とされている。(大林・吉田・敦
 彦監修『日本神話事典』大和書房、一九九七
 年)

(3) 本居宣長『古事記傳 三』二十三之卷(日本
 名著刊行會、一九三〇年)

(4) 藤井貞和「三輪山神話式語りの方法そのほか
 | 夕顔の巻」(『共立女子短期大学文科紀要』
 第二十二号)によると、「高貴な身分といわれ
 る人が前駆を追わせて進むのは、身分がつく

りだすタブー的空間をそこにあらわし、悪霊、ものけの類が入って来ないようにする極めて古代的信仰に根ざした習俗である。身分が高ければ高いほど霊力が高く、タブー性が強いから前駆の数も多くなり、一段と悪霊、もののけにたいする守りをかためて、つけいられないようにする。とタブー性が強い身分こそ悪霊やもののけのような類が憑きやすいとする。

(5) 戸谷高明「伝承と表現―記紀の『恥』をめぐって―」『古代伝承論』(桜楓社、一九八七年)

(6) 『日本語語源辞典』(現代出版、一九八四年)に記されてある「崇る」は、「立た・る」(立つ)と同根。立ツは隠れていたものが、はつきりと姿を現わすこと。人間の行為をとがめて、神仏・怨霊など隠れていたものが災いを

すること」と定義している。

(7) 『ほ』・『うち』から『ほがひ』へ 『折口信夫全集』第十六巻。

(8) 『みさき神考』 『柳田國男全集』⑮ (筑摩書房、一九九〇年)

(9) 池田弥三郎 『日本の幽霊』 (中公文庫、一九七四年)

(10) 大森亮尚氏 『日本の怨霊』 (平凡社、二〇〇七年) によると、「たつ」は、もともと神霊の発動を意味する。「秋立つ」「風立ちぬ」などの「たつ」も神の御業としての動きを伝える語で、きざし、しるしを意味するこ
とばかり始まっているとする。

(11) 本文中に紹介した通り、崇神天皇の時、疫病が流行って多くの民が死に絶えようとしたので、天皇が神託を得るために夢を見た

(1 2)

ところ大物主神が現われ、託宣をする。また、同じ崇神天皇の時、二人の皇子（豊城命と活目尊）の片方を皇太子に立てようとして、それぞれ皇子に夢を見させ、それを占うことにする。このように古代の夢とは、神と交信できる手段として神聖なことであったことが窺える。

仲哀天皇が筑紫の香椎宮にいる時、熊曾国を討とうとして神託を求め、行事を行なう。天皇は神を招き寄せる、いわゆる招魂のため、琴を弾き、建内宿禰大臣が神託を受け、庭にいて神のお告げを乞い求めたところ、神功皇后が神懸りの状態になって神託を得る。しかし、仲哀天皇は神のお告げに対し、「詐為す神」と思い、琴を押しやり、弾くのを止めた。すると、「神大く忿りて」、「お

よそこの天の下はそなたが統治すべき国ではない。そなたは黄泉国への道に向かいなさい」と託宣した。これを聞いた建内宿禰大臣は恐ろしくなり、天皇に琴を弾き続けることを申し上げ、天皇はいい加減に琴を弾き始めたが、まもなくその音が止んだ。神を「詐為す神」と疑った仲哀天皇はすでに亡くなっていた。(『古事記』中巻 二三五、二二六頁参照)

(1 3) 『続日本紀』聖武天皇 天平十八年六月十八日 日条参照。

(1 4) 『続日本紀』聖武天皇 天平元年二月二十三日 日条参照。

(1 5) 多田一臣校注『日本靈異記 中』「己おのが高徳

を恃^{たの}み、賤形^{せんぎやう}の沙弥^{しゃみ}を刑^つちて、現に悪死を

得し縁^{えに} 第一「(筑摩書房、一九九七年)

(16) 『続日本紀』卷第三十四(光仁天皇 宝龜七年閏八月、十一月)によると、「是の月、夜毎に瓦・石と塊と自ら内豎の曹司と京中の往々の屋の上とに落つ。明けて視れば、その物見に在り。廿餘日を経て乃ち止む。」と記されている。

(17) 『続日本紀』卷第三十四(光仁天皇 宝龜八年二月、四月)によると、「辛未、大祓す。宮中に頻りに妖怪有るが為なり」と記されている。傍線部の脚注では、「宝龜六年四月に没した井上内親王と息子の他戸親王に關係するか」と、妖怪の正体を井上内親王と

息子の他戸親王であることを思わせる解釈をしていゝ。
中山忠親著・和田英松校訂『水鏡』(岩波書店、一九三〇年)五十代光仁天皇を引用すると、「百川この程の事どもをうかゞひ見るに、后まじわざをして御井に入れさせ給ひき。帝をとく失ひ奉りて、我御子の東宮を位に即け奉らんといふ事どもなり。その井にいれたる物を、ある人とりて宮の内にもてあつかひしかば、この事皆人知りにき。」と呪詛の疑いが窺える。また、井上内親王が死後、龍になつたとあり、宝龜八年冬には雨が降らず、世の中の井戸水が絶えて、宇治川の水まで絶えようとしたとある。十二月には、藤原百川や光仁天皇の夢に冥界からの使者なのか、鎧兜を着た百人ばかり

の者が来て、二人を探し出そうとしたことが度々現われたと言う。それが井上内親王と他戸親王親子の資料の仕業だと思ひ、光仁天皇は深く憂ひ、諸国の国分寺で金剛般若経を読ませたとある。しかし『日本の怨霊』の著者大森亮尚氏は、平安末期に成立した歴史書『水鏡』は、かなり眉唾もので、人間を悪く描くことを目的にしたような作品なので信用し難いと言う。

(19) 金田元彦「六条御息所の原型―怨霊の系譜―」『源氏物語私記』(風間書房、一九八九

(20) 肥後和男「平安時代における怨霊の思想」『御霊信仰』民衆宗教史叢書第五卷(雄山閣、一九八四年)

※本文中の『続日本紀』は、宇治谷孟著『続日本紀』講談社学術文庫（一九九五年）による。
『水鏡』は、岩波書店（一九三〇年）による。

第三章

『源氏物語』における物の怪

一 はじめに

『源氏物語』は大きく光源氏の一代記である正編と続編である宇治十帖に分けられる。この物語は、物の怪物語と言っても過言ではないほど「物の怪」と「鬼」という語がしばしば登場する。『源氏物語』に限らず、『栄花物語』や『大鏡』、『今昔物語集』、『小右記』など、平安文学の作品の中でもよく見られる語である。これらの作品に見られる物の怪の特徴は、政治的権力争いによる敗北者の恨みや一夫多妻制による女たちの恨みが大多数である。その中で、『源氏物語』における物の怪はどのようなものであるだろうか。『源氏物語』の物の怪については今まで多くの研究者たちによって語られて来た。特に六条御息所の生霊や死霊については様々な論が出されている。ここでは六条御息所に限定せず、紫式部が『源氏物語』を通して表現しようとした物の怪観について再検討したい。

本章では『源氏物語』における物の怪について、大きく史実に重点を置いた怨念による物の怪と、第一章で「物の氣」について論じたように病における物の怪、最後に、その他の物の怪として宇治十帖の浮舟物語、この三つに分けて考察する。

まず、桐壺朝において詳しく語られていない前坊と六条御息所の故父大臣に関わる政治的争いの痕跡を探ってみたい。また、当時の一夫多妻制という貴族社会の中で息を潜めていた女たちの嫉妬による争いを探り、作者紫式部の物の怪に対する考え方や作品の中で描写を検討しておきたい。これらは歴史性を持っている源氏物語を一層リアルに理解するためである。

二 怨念による物の怪

（イ）政治的怨念による

光源氏の若き頃、年上の忍び相手として六条御息所

が登場する。「六条わたりの女」(夕顔巻)と語られる彼女は、その登場に際し、当初身分は明らかになされていない。場所的に六条という、宮中から離れているが、雅な伝説の残る地である⁽¹⁾。六条御息所の具体的な紹介は次のようである。

まことや、かの六条御息所の御腹の前坊の姫宮、齋宮にゐたまひにしかば、大将の御心ばへもいと頼もしげなきを、幼き御ありさまのうしろめたさにことつけて下りやしなまし、とかねてより思しけり。(葵巻・一八頁)

この葵巻で初めて六条御息所の素性が明かになる。故東宮妃で、高貴な人物として登場する六条御息所には、亡き夫前坊との間で儲けた姫君がいて、齋宮に卜定され、伊勢神宮に奉仕することになっている。その

斎宮とともに母六条御息所が一緒に下ろうとするなど、葵巻に入ってから具体的な家系や年立が語られている。貴公子たちの憧れであった高貴な身分の六条御息所はこの後、光源氏の正妻である葵の上を、生霊に変貌して取り殺す。猟奇的な悲劇の展開が待っているとは誰も予測できなかったであろう。

大殿には、御物の怪いたう起こりていみじうわづらひたまふ。この御生霊、故大臣の怨霊など言ふものありと聞きたまふにつけて、思しつづくれば、身ひとつのうき嘆きよりほかに人をあしかれなど思ふ心もなければ、もの思ひにあくがるなる魂は、さもやあらむと思し知らるるもあり。

（葵巻・三五〜三六頁）

葵の上の出産は、光源氏にとって最初の子供であり、

父左大臣にとつては、一族の繁栄をかけた出産である。右に引用したように、この出産には物の怪の影が窺える。右の傍線部を見ると、左大臣家に物の怪がよく現れるが、その物の怪の正体について六条御息所の生霊か、故父大臣の御霊だという噂があるという。物語の中では、この噂に関して詳しく語っていないが、傍線部の噂をする者がいるということは、政治的な何らかのトラブルによる六条御息所家の怨念をまず考へるべきであろう。

六条御息所の父大臣は、故前坊を擁立する側で、葵の上の父であり、桐壺帝の妹大宮の夫である左大臣との政治的争い、あるいは、皇位継承に起因する問題で敗北したので、「この御生霊、故大臣の怨霊など」という噂があったのではないかと想像できる。この噂について、「新編日本古典文学全集」(小学館)の頭注では、次のように解釈している。

六条御息所の亡き父大臣が左大臣を恨んで死んだとも読めるか。それならば、左大臣に対立的であつた右大臣の政治的敗北ということになる。

(葵巻・三五頁)

この政治的争いについては、諸説がある。まず、森一郎氏は前坊や父大臣の政治的失脚を思わせる暗い過去のもの怪化として考えている⁽³⁾。この説は、川崎昇氏⁽⁴⁾、三谷栄一氏⁽⁵⁾、深沢三千男氏⁽⁶⁾などの御霊信仰説を踏まえ、政治的怨念説を主張している。六条御息所の物の怪出現は彼女の嫉妬心だけではなく、亡き夫前坊の廃太子事件による父大臣の失意と怨恨といった背景が絡んだ政治的事件の可能性を示している。光源氏が生まれた時に、皇太子をめぐって弘徽殿女御が心配していたことが窺

える。これと関連づくと考えられるのは、前坊の史実として保明親王が挙げられる。一条兼良の『花鳥余情』では、次のように説明している。

前坊とは東宮を辞退したまふを申小一条院な
とのことし坊とは東宮を称するなり云々

（葵巻・七四頁）

（省略）朱雀院の立場は源氏四歳の時なりそれ
よりさきの東宮にてまし／＼しによりて前坊と
は申侍り保明太子小一条院などの例なり

（賢木巻・八五頁）

つまり、前坊とは、東宮を辞退したことをいうとする。
保明親王は醍醐天皇の第二皇子で、母は、藤原基経
の娘穩子でありながら、時平の娘仁善子を妃としてい

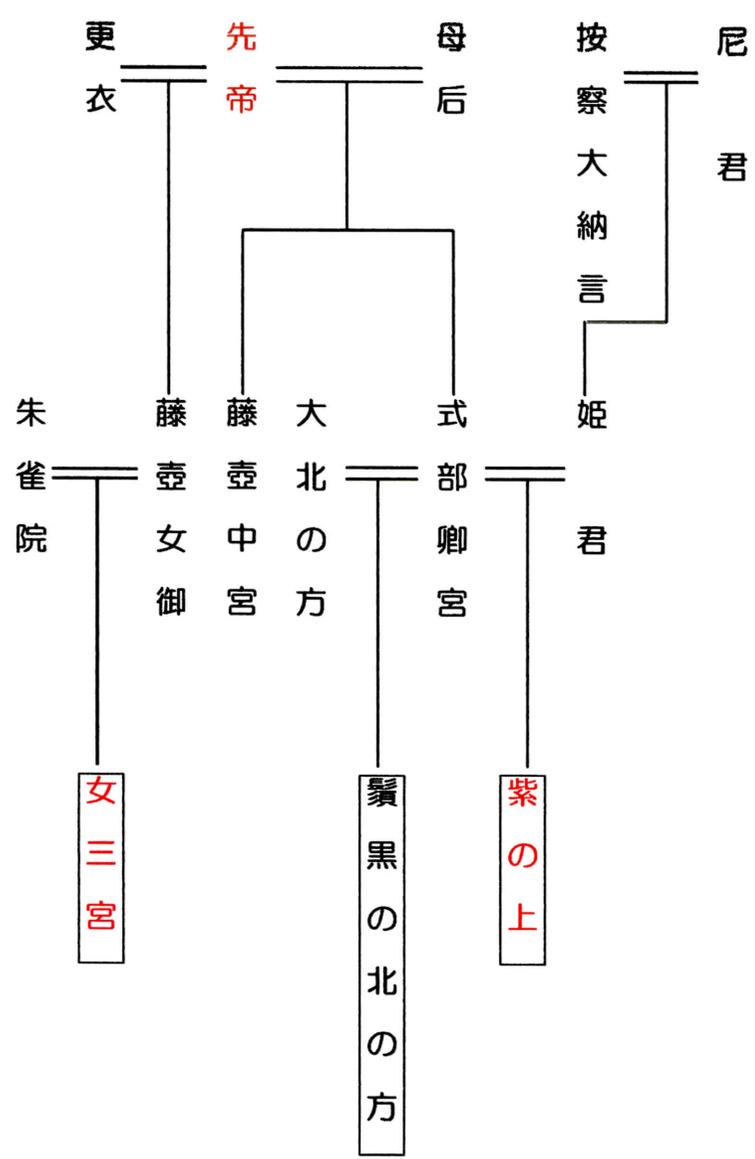
る。保明親王は延喜四年（九〇四年）、わずか二歳で立太子し、東宮となるが、延喜二三年（九二三年）天皇になれず、二十一歳の若さで亡くなってしまふ。この背景には菅原道真の怨霊による祟りがあったとされるが、それについては第五章で語ることにする。また、『源氏物語』より後の史実であるが、三条天皇の皇子である小一条院（敦明親王）が自ら東宮を辞退するが、実は、藤原道長によって廃太子になったとも言える史実もある。もう一つ、平安初期に遡った桓武天皇の時代に、同腹の弟早良親王が皇太子であるが、政治的権力闘争に巻き込まれて廃太子となり、淡路に移送中、亡くなってしまうた事件があるが、これらが『源氏物語』の桐壺帝と弟の前坊、また六条御息所の父故大臣との関係を推測するには良い参考になると思う。

桓武時代の政治の流れとしては、天武系の血筋を王統から排除する強い動きがあった⁽⁸⁾。それに加担してい

た東宮大夫大伴家持らは、後に早良親王の即位をめざし、桓武天皇の奈良行幸の際に、天皇の信任を得ていた藤原種継（早良親王と対立）を暗殺する事件（七八五年）を起こす。これによって早良親王は廃太子となり、その結末は、自ら絶食によって憤死してしまふのである。しかし、桓武天皇は、延暦一九年（八〇〇年）に、早良親王に崇道天皇の号を追称する。このような歴史に詳しくかった紫式部がこれらの歴史を準拠として、六条御息所や亡き夫の前坊という人物を創造したとすると、前坊の生前に何らかの兄弟間トラブルがあったのか、先帝の時代に、もしくは六条御息所の故父大臣と葵の上の父左大臣との間に何らかの政治的怨みがあったって、崇りとして現われたと噂されたかも知れない。

たとえば、『源氏物語』の中で紫の上と女三宮と鬚黒の北の方の家系を見てみると、三人とも桐壺帝以前

の先帝の系図に入っている。



この中で、鬚黒の北の方を除くと、紫の上、女三宮に六条御息所の死霊が取り憑いていることが分かる。この系図からは、六条御息所の前坊を間に先帝と故父大臣と何らかの政治的絡みがあった可能性が窺える。それを考えると、今上天皇の外戚となる鬚黒と婚姻関係に在る先帝の孫鬚黒の北の方にも物の怪が取り憑く必要性も見えてくるだろう。また、葵の上に六条御息所の生霊や故父大臣の死霊が噂される理由からは、左大臣家との権力争いが窺える。

以上のように『源氏物語』に語られていない、前坊の廃太子説や政治的争いの敗北者としての六条御息所の故父大臣という物語構造を考えてみた。これについて、浅尾広良氏は「六条御息所の物の怪の出現が専ら彼女自身の嫉妬心のみによ来するわけではなく、そこに何らかの政治的事件―廃太子事件による父大臣の失意と怨恨といった背景が絡んでいるのではないか

という想定である。⁽⁹⁾「と物の怪に憑く側と憑かれる側の関係性を明らかにしている。

従って、娘が東宮の御息所として、後に天皇の外戚という権力を手に入れたはずの六条御息所の父大臣であったが、前坊の御息所となった娘の不憫さに、死んでからも、まるで藤原元方や堀河大臣（藤原顕光）の怨霊の崇りのように、政治的権力の勝利者、葵の上の父左大臣家と先帝の系譜に崇りの怨霊として現れたとも考えられる。

（口）恋愛における嫉妬心による

平安時代という貴族社会の中での女性は、男性に顔や姿を見せなくてはならなかったようだ。幼いころは男女の別はなかかったけれども一〇歳頃（元服）になると、女性はいく帳や襖を隔てて話すことが常識であった。こうした環境の中、貴族女性たちの結婚というのはどの

ようなものであるか。当時は、一夫多妻制で男性が女性の家に通う形であった。女性の顔は知らないけれども、その女君に仕えている女房たちの話や噂を聞きつけた男君が訪ねることによって結婚が成立したのである。これを「妻つま問ま婚いこん」と言う、男性が女性のもとに通い、子供が何人か生まれると、同居するという奈良時代の結婚生活の形態がそのまま平安貴族社会に受け継がれたのであろう。その習慣は『万葉集』の歌から読むことができる。

春日に衣はいたく通らめや
七日し降らば七日来じとや

(巻第十・一九一七)

朝去にて夕は来ます君故に
ゆゆしくも我は嘆きつるかも

右のように、春雨が降っただけなのにずっと来ない男への恨みや、毎日訪ねてくれた男が来なくなっただけに待ち続ける当時の女性の嘆き、悲しさが感じられる歌である。

平安時代を開いた桓武天皇は四十五歳で即位し、七〇歳で退位するまで、二十三人の妃と三十五人の子供を儲けていたという。紫式部が生きていた当時は、藤原氏が政権を持っていて、いわゆる摂関政治のもとで娘を大事に育てて天皇の后にする。さらに、皇子が誕生することが高級貴族にとって最高の権力の座であった。天皇家の系譜を見て分かるように、帝の周りには女御や更衣たちが大勢仕えている。しかし、この一夫多妻制は女たちの悲劇の争いの始まりとなる。

「いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶら
ひたまひける」云々（桐壺巻・一七頁）

『源氏物語』の桐壺の巻でも分かるように、桐壺帝に
は大勢の女御や更衣たちが仕えていた。その中、あま
り身分も高くない桐壺更衣が帝に寵愛されていた。と
ころが、帝に愛されることだけで周りの女御や更衣た
ちに酷く虐められたあげく、光源氏が三歳の時、亡く
なってしまう。このように、当時の後宮の中では女御
や更衣たちの嫉妬による争いは時代が変わっても終
わらなかつた。

ところが、『源氏物語』を見ると、一夫多妻の中
で女達の嫉妬心は争いだけでは止まらない。自分も知ら
ないうち、魂が抜け出て、ライバルの相手に取り憑く
六条御息所の生霊事件が発生する。政治的な怨みを呑
んで死んだ後、死霊として人を祟ることが歴史物語や

説話集でよく見られる。しかし、生きている人の魂が
跳梁し、人に憑依することはなかつた。生霊の祟りは
当時、珍しい発想であることが窺える。

六条御息所の存在は夕顔巻から登場するが、「六条
わたり」(夕顔)・「六条京極わたり」(若紫)の貴
婦人として、物語の始発部ではあまり大した役割では
ない影のような存在であった。しかし、葵巻に入つて
からは彼女の呼称が初めて語り始められる。彼女の素
性が明らかになつたところから、六条御息所の物の怪
としての活躍が始まる。

まことや、かの六条御息所の御腹の前坊の姫
宮、斎宮にゐたまひにしかば、大将の御心ばへも
いと頼もしげなきを、幼き御ありさまのうしろめ
たさにことつけて下りやしなまし、とかねてより
思しけり。(葵巻・一八頁)

六条御息所は光源氏より七歳も年上の貴婦人である。しかも前東宮の妃であり、斎宮の母でありながら、今は娘と一緒に伊勢神宮へ下ろうと思ひ悩んでいるのである。光源氏は十二歳ごろ、元服と同時に左大臣の娘葵の上と結婚する。しかし、夫婦の仲はあまり良くなく冷え切っていたが、葵の上の懐妊をきっかけに光源氏の態度は葵の上に対して優しくなった。その反面、六条御息所へは夜離れがちになつてしまふ。さらに、新斎院が賀茂川の河原で禊を行う御禊の日に、源氏の正妻である葵の上の一行に六条御息所の車が乱暴される事件が起こる。この車争いは次第にエスカレートして、六条御息所の車は榻も折れ、御簾も引き破られ、隅に追いやられてしまった。大勢の見物客が集まつた行列の中で、前東宮妃であつた高貴な身分の六条御息所のプライドがスタスタに引き裂かれたので

あろう。それにしても六条御息所はそのまま帰らず、源氏の晴れ姿を見る為に壊された車の中から見物するが、源氏はそれに全く気付かず、艶っぽい流し目を送りながら通り過ぎるのであった。人々の目の前で屈辱を受けた六条御息所の心の傷はますます深くなつて行く。六条御息所は源氏への執念深い愛と正妻に対する嫉妬の怨念のために、つい自分も意識しないうちに生霊となつて、出産直前の葵の上を苦しめる。

まださるべきほどにもあらずと皆人もたゆみたまへるに、にはかに御気色ありてなやみたまへば、いとどしき御祈祷数を尽くしてせさせたまへれど、例の執念き御物の怪一つさらに動かず、やむことなき験者ども、めづらかなりともて悩む。

(葵巻・三七〜三八頁)

この後、物の怪は調ぜられ、やがて光源氏と対面し、執念深い物の怪の正体は明かされる。

かく参り来むともさらに思はぬを、もの思ふ人の魂はげにあくがるものになむありけるとなつかしげに言ひて、
なげきわび空に乱るるわが魂を結びとどめよ
したがひのつま
とのたまふ声、けはひ、その人にもあらず変わ
りたまへり。いとあやしと思しめぐらすに、ただ
かの御息所なりけり。(葵巻・三九〇四〇頁)

光源氏は葵の上の口を借りてしゃべっている物の怪の声と気配から六条御息所の生霊であることを確信する。光源氏は六条御息所によって苦しんでいる葵の上に同情し、葵の上の出産後、自ら薬湯を飲ませるほ

ど、愛情が深くなつていく。ところが、葵の上は無念にも急逝してしまふ。そして、六条御息所は自分の魂が葵の上を取り殺したことについて疑いながら、光源氏に弔問の手紙を送る。

「聞こえぬほどは思し知るらむや。」

人の世をあはれと聞くも露けきにおくる神を思ひこそやれ

ただ今の空に思ひたまへあまりてなむ」とあり。
（葵巻・五一頁）

これに対して、源氏からの返事は、

「こよなうほど経はべりにけるを、思ひたまへ
怠らずながら、つつましきほどは、さらば思し知
るらむとてなむ。」

とまる身を消えしも同じ露の世に心おくらむ
ほどぞはかなき

かつは思し消ちてよかし。御覽ぜすもやとて、
これにも」と聞こえたまへり。（葵巻・五二頁）

と、やはり六条御息所自身が生霊となり、葵の上を取り殺したことを光源氏が確信していることが分かった。彼女は嘆き、その恨みのまま、心の傷のまま、齋宮である娘と一緒に伊勢へ下ることを決意する。しかし、『源氏物語』の生霊事件は、ここで終わることなく、六条御息所の怨念は死んでからも光源氏の最愛の人、紫の上や女三宮を祟る死霊として登場する。何故、六条御息所は物の怪にならざるを得なかったのか。『源氏物語』の中から一夫多妻による悲劇を背負った女性達の人物関係を、より分かりやすくするために系図を作り、検討してみよう。

〔系図1〕

北の方

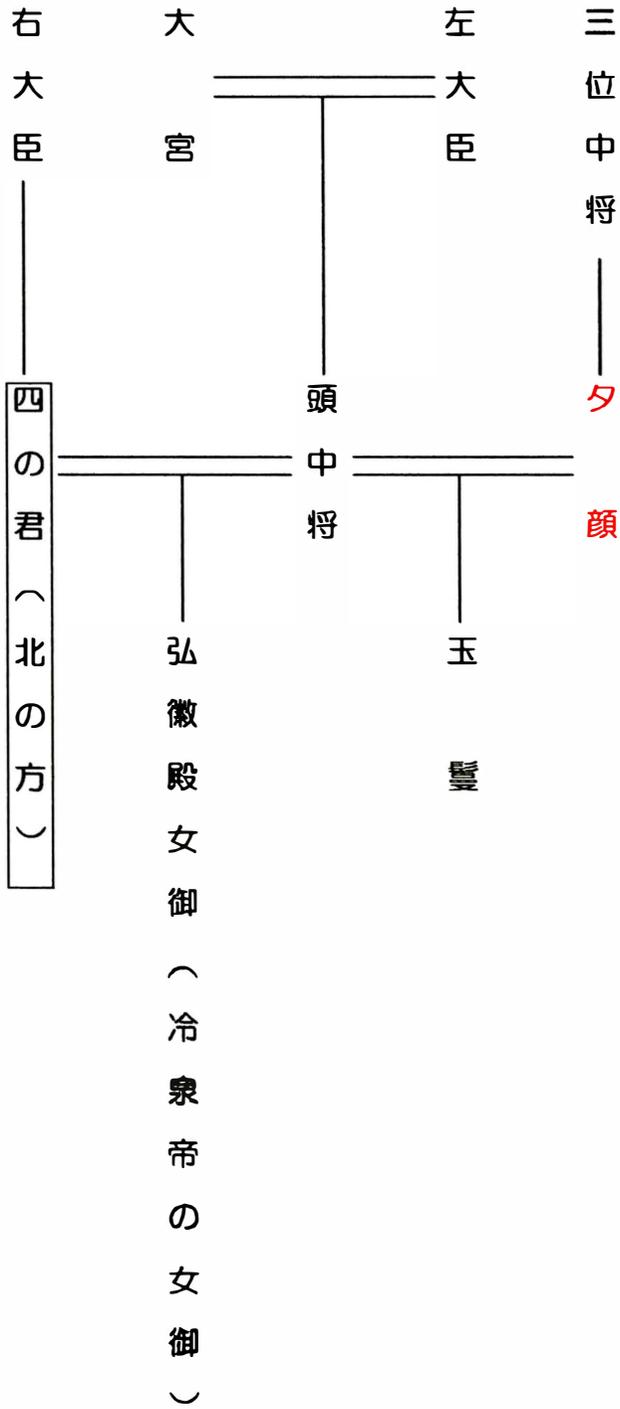
大納言
桐壺更衣
光源氏

一院
桐壺帝

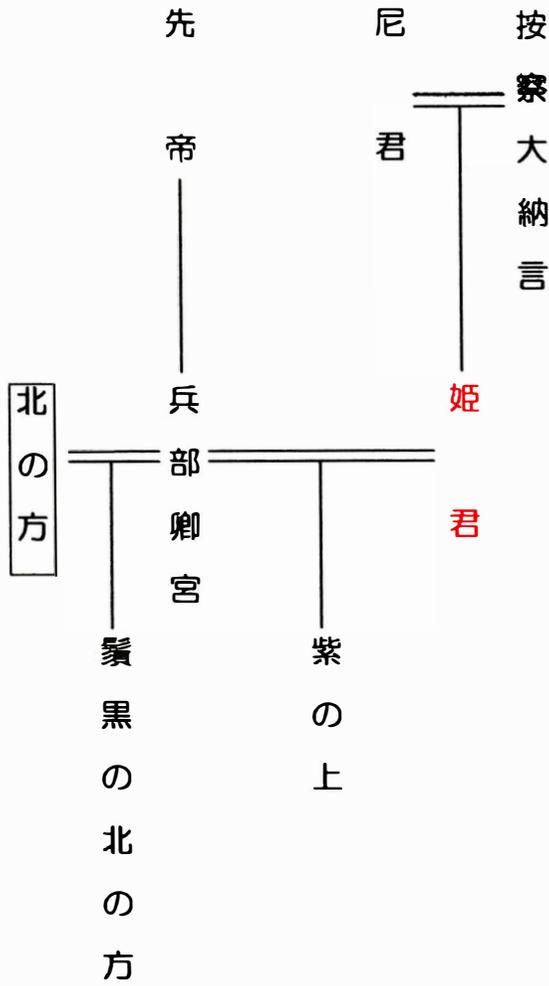
春宮（朱雀帝）

右大臣
弘徽殿女御

【系図2】



〔系図3〕



囲み線

赤文字

悲劇を与えた者

悲劇を受けた者

右の「系図1」から「系図3」は、物語の中で正妻としての資格、あるいは権力を持っている人物と、その人物から妨害を受けたあげく死に至った人物との関係図である。当時の男は政治的な権力争いが多いが、女達も正妻という座をかけた争いが烈しい嫉妬の情念を深めさせていたのであろう。

「系図1」では、桐壺帝の所に「あまたさぶらひたまふ」女御や更衣たちがいる。その中、帝寵を受けていた桐壺更衣に帝の第一皇子の母である弘徽殿女御が「あやしきわざ」という嫌がらせを行っていた。

参う上りたまふにも、あまりうちしきるをり
りは、打橋、渡殿のここかしこの道にあやしき
わざをしつつ、御送り迎への人の衣の裾たへがたく
まさなきこともあり、また、ある時には、え避ら

ぬ馬道の戸を鎖しこめ、こなたかなた心を合はせてはしたなめわづらはせたまふ時も多かり。

（桐壺巻・二〇頁）

弘徽殿女御は当時、帝に寵愛されている桐壺の更衣に嫉妬するだけではなかつた。桐壺更衣の皇子光源氏の誕生によつて、東宮という政界の権力が光源氏の方に流れるのではないかという念を抱き、桐壺の更衣をもつと深く恨むのであつた。このような恨み、あやしきわざ、もしくは呪詛が行われる中、桐壺更衣は亡くなつたのである。

「系図2」では、光源氏のライバルであり、葵の上の兄である頭中將の正妻四の宮と、「雨夜の品定め」で紹介された「内気な女」夕顔との関係図である。

頭中將の北の方は右大臣の娘であり、朱雀帝の母弘徽殿大後の妹でありながら、身分も教養も高い人であ

る。しかし、自分の夫が素姓も分からない夕顔の所に
通うことで嫉妬の心が湧いてくる。

去年の秋ごろ、かの右の大殿よりいと恐ろしき
ことの聞こえ参で来しに、もの怖ぢをわりなくし
たまひし御心に、せん方なく思し怖ぢて、西の京
に御乳母住みはべる所になん這ひ隠れたまへり
し。それもいと見苦しきに住みわびたまひて、山
里に移ろひなんと思したりしを、云々

（夕顔巻・一八五〜六頁）

右の引用のように、夕顔は頭中将の北の方の脅迫、呪
詛を避けて住まいを転々としながら身を隠していた。
その生活の中、光源氏の誘いで訪れた荒れ果てた廃院
で正体不明の物の怪に取り殺されてしまう。この正体
不明の物の怪を頭中将の北の方の呪詛によって現わ

れたものとして解釈することもできる。しかし、その正体については、第四章で述べることにする。

「系図3」の場合は、光源氏の初恋である継母の藤壺中宮の兄兵部卿宮の北の方と、紫の上の母である姫君との関係図である。兵部卿宮の北の方の素姓について物語の中では紹介されていないが、先帝の皇子兵部卿宮の正妻という位置から高貴な身分であることが窺える。その反面、紫の上の母君は、父按察大納言が宮仕えさせようと大事に育ててきた姫君であった。しかし、その願いどおりにはなれず、父大納言の死によって母の尼君が世話をしているところを兵部卿宮が通うことになる。

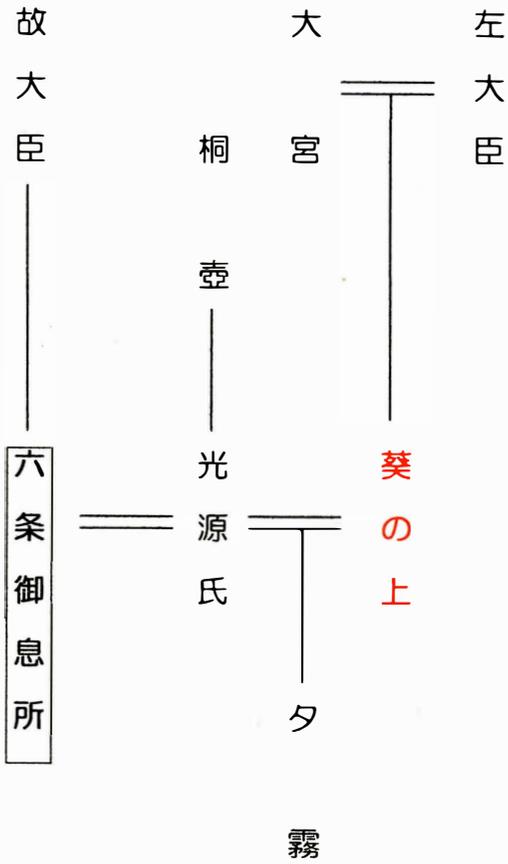
兵部卿宮なむ忍びて語らひつきたまへりけるを、もとの北の方やむごとなくなどして、安からぬこと多くて、明け暮れものを思ひてなん亡くな

りはべりにし。もの思ひに病づくものと目に近く
見たまへし。(若紫巻・二一三頁)

右の引用からも分かるように、兵部卿宮には北の方
へ(正妻)がいて、兵部卿宮が姫君の所へ通うことを嫌
がっている。その高貴な身分の威勢で姫君を威嚇した
のである。紫の上の母君はその気苦労さから病にな
り、亡くなってしまったのである。

ここまでの三つの系図から、正妻の虐めを受ける方
が、正妻より身分が低く、後見者がいない弱い立場で
あることが窺える。自分より身分が低い相手に対して
の嫌がらせは嫉妬だけが原因であろうか。
次の「系図4」では、今までの系図と異なる所が窺
える

【系図4】



囲み線

赤文字

物の怪に憑かれる側
 物の怪になる側

「系図4」は前にも述べたように、「葵」巻で描かれている六条御息所の生霊事件による悲劇を示している。光源氏の正妻である葵の上が六条御息所の生霊に取り殺されるといふ、前掲した系図とは少し違う関係図が窺える。「系図1」から「系図3」までは、正妻側からの一方的な虐待や呪詛によるもので、後妻からの反撃は見られない。しかし、「系図4」の六条御息所と葵の上の場合には、逆に正妻の存在について後妻が猛烈に嫉妬をする。さらに、例の御禊の日、人目につかぬよう身をやつした六条御息所が葵の上の一行によつて押しつけられ、大勢の面前で惨めな姿がさらけ出される出来事があった。高貴な六条御息所はこの車争いによつて公けの前で恥をかかされてしまう。これがきっかけで「物を思し乱る事、年頃よりも多く」なり、「御心地も浮きたるやう」な具合から六条御息所へ（後妻）の生霊事件が起きた。何故、六条御息所は

物の怪になったのであろうか。その背景として考えられるのは、

一・嫉妬する相手と身分の差がないこと、

二・性格として「いと物をあまりなまで思ししめたる御心ざま」であること、

三・嫉妬心だけではなく、相手から受けた屈辱的な出来事によるプライドの損害、

この三つの要素がきっかけとなつて六条御息所を物の怪へと変貌させたのではなからうか。六条御息所の例から分かつたことは、単純に嫉妬だけで相手を呪詛したり、物の怪となるのではなく、その裏には平安時代の貴族社会の身分制度が強く影響していることである。この身分制度は男女の恋愛にも大きな影響を及ぼしている。身分が高ければ高いほど、貴族としてのプライドも高く、常に人のうわさや世間の目を気にする傾向が強い。「系図1」から「系図4」まで、一

見男女の愛情による嫉妬が相手を憎んだり、呪詛をしたり、やがて物の怪になるように見えるが、実は、嫉妬の感情より身分制度によるプライドが大きく作用をしている。六条御息所の場合は、物を思いつめる性格にも関係あるが、それより生霊にまでなるほどの原因は、プライドに傷つけられた屈辱感という感情がもっと大きく影響したと考えられる。

三 病における物の怪

（イ）お産に関わる物の怪

歴史物語によく見られる出産の場に、数多くの物の怪が出て来てのしり騒ぐ描写がある。生命の誕生とともにお産の者の生と死の境と言える出産の場は、数多くの物の怪の集合場所と言っても過言ではない。それは、「弱り目に祟り目」ということわざのように、人間の一番弱い心身とともに不安定なお産という場

に忍び込んで来るのが平安時代の物の怪観であろう。
『源氏物語』の葵巻に描かれてある初めての葵の上
のお産の場も例外ではなかった。いよいよ葵の上の陣
痛とともに僧侶たちの加持祈祷が始まる。

まださるべきほどにもあらずと皆人もたゆみ
たまへるに、にはかに御気色ありてなやみたまへ
ば、いとどしき御祈禱数を尽くしてせさせたまへ
れど、例の執念き御物の怪一つさらに動かさず。や
むごとなき験者ども、めづらかなりともて悩む。

（葵巻・三八頁）

多くの物の怪の中で「執念き御物の怪一つさらに動か
ず」験者たちが困っている様子が見える。この執念深
い物の怪が取り憑いて加持祈祷にも関わらず、なかな
か離れようとしないう様子である。この物の怪の正体

は、前掲したように、新齋院御禊の日に源氏の正妻である葵の上にプライドを傷つけられた「かの六条御息所」の生霊である。

宮の御湯持て寄せたまへるに、かき起こされたまひて、ほどなく生まれたまひぬ。うれしと思すこと限りなきに、人に驅り移したまへる御物の怪どもねたがりまどふけはひいともの騒がしうて、後のことまたいと心もとなし。言ふ限りなき願ども立てさせたまふけにや、たひらかに事なりはてぬれば、山の座主、何くれやむごとなき僧ども、したり顔に汗おし拭ひつつ急ぎまかでぬ。

(葵巻・四一頁)

この加持には比叡山の高僧を招き入れた左大臣家の権勢が見られる。ようやく数多くの物の怪も調伏さ

れ、葬の上は無事に夕霧を出産する。加持祈祷によつて憑坐に駆り移された物の怪は葬の上の出産を妬ましがっていた様子が後産の厳しさを表している。しかし、それも束の間、秋の司召のために左大臣家の人達が内裏に参ったところを、例の物の怪がまた葬の上を襲い、彼女は息絶えてしまふのである。

このような、お産に関わる物の怪については、源氏物語だけではなく、歴史物語の中でもしばしば見られる。葬の上の出産の場面のモデルとも言える紫式部が仕えていた彰子中宮の出産の場面がその例である。左は、寛弘五年九月十一日条の土御門殿における彰子中宮の敦成親王（後一条天皇）出産の場面に現れた物の怪の描写である。

日一日苦しげにて暮らさせたまふ。御物の怪どもさまざまかり移し、預り預りに加持しののし

る。月ごろ殿の内にそこらさぶらひつる僧はさ
なり、いはず、山々寺々の僧のすこしも験あり行
ひすると聞しめすをば、残らず尋ね召し集めた
り。内にはいととおぼつかなく、いかなればか
と思しめして、年ごろかやうのこともなれ知りた
る女房ども、一車にて参れり。御物の怪、おのお
の屏風をつぼねつつ、験者ども預り預りに加持し
ののしり叫びあひたり。

（『栄花物語』巻第八・四〇〇〜一頁）

彰子中宮は藤原道長の娘であり、一条天皇の后であ
る。『栄花物語』には、お産が始まった彰子中宮に様々
な物の怪を「寄りまし」（憑坐）に駆り移しながら加
持をする僧侶の声、「寄りまし」に移った物の怪の騒々
しい光景が生々しく描写されている。この場面は、『源
氏物語』の葵の上の出産の場面と共通点が窺える。そ

れは葵の上のお産の加持に比叡山の高僧を招き入れ
た左大臣と、右の傍線の所である。歴史物語である『栄
花物語』には、彰子中宮のお産の加持に山々寺々から
験力ある全ての僧を呼び集めた藤原道長がまさに葵
の上の父左大臣の権勢に重なる描写である。ところが
が、葵の上は夕霧を出産した数日後、亡くなってしま
うが、彰子中宮の場合は敦成親王を無事に産し、後
産も無事に終わるといふ違いはある。また、彰子中宮
の出産、特に後産について『紫式部日記』では、次の
ように記している。

今とせさせたまふほど、御物の怪のねたみの
しる声などのむくつけさよ。源の蔵人には心誉阿
闍梨、兵衛の蔵人にはそうそといふ人、右近の蔵
人には法住寺の律師、宮の内侍の局にはちそう阿
闍梨をあづけたれば、物の怪にひき倒されて、い

といとほしかりければ、念覚阿闍梨を召し加へて
そののしる。阿闍梨の験のうすきにあらず、御物
の怪のいみじうこはきなりけり。宰相の君のをぎ
人に、叡効をそへたるに、夜一夜ののしり明かし
て、声もかれにけり。御物の怪うつれと召しいで
たる人々も、みなうつらで、さわがれけり。

(『紫式部日記』一三五頁)

彰子中宮の出産が無事終わって後産に入った時、憑坐
に駆り移されていた物の怪たちが悔しがってわめく
声など、加持の光景がリアルに描写されている。
その一方、『源氏物語』の紅葉賀巻に描かれている
藤壺女御の皇子(冷泉帝)出産の場面(1)は、これまでの
凄まじい描写とは違って、光源氏との密会による懐妊
と
描
写
し
か
描
か
れ
て
い
な
い。
さ
ら
に
明
石
の
君
の
姫
君
(
明

石中宮へ出産の場合は、ただ明石で「女にてたひらかにものしたまふ」という安産のことを源氏のお使者から告げられる場面がある。この二つの事例のように、加持祈祷や物の怪の調伏など、具体的には描かれていないケースもある。ところが、柏木との密会によって不義の子薫を出産した女三宮の場合は、

験者など召し、御修法はいつとなく不断にせらるれば、僧どもの中に験あるかぎりみな参りて、加持まゐり騒ぐ。(柏木巻・二九八頁)

という、大騒ぎで加持を奉仕する描写もある。ここでは、葵の上のような凄まじい描写ほどではないが、女三宮のお産にも物の怪を調伏させる為の加持祈祷が行われていたことが描写されている。このように、出産という場には、物の怪が頻繁に

現れることが分かる。その理由として考えられるのは、出産という多大なエネルギーを放出する場であることが挙げられる。その多大なエネルギーを使う妊婦の身体の衰弱から、特に物の怪はお産を控えている妊婦に憑きやすいものなのではなからうか。人々が出産による一族の繁栄を妬み子孫を断絶させようとする物の怪の存在を意識したことが読みとれる。

(口) 病気に関わる物の怪

① 鬚黒の北の方と物の怪

「真木柱」巻に登場する鬚黒の北の方に取り憑いていた、持病と言ええるほどしつこい物の怪が、病に關わる物の怪の一つの例である。鬚黒は冷泉帝時代に東宮へ今上帝の叔父である、つまり天皇の外戚である。その鬚黒の北の方とは、次のように記されている。

北の方は紫の上の御姉ぞかし。式部卿宮の御大君よ。年のほど三つ四つが年上は、ことなるかたはにもあらぬを、人柄やいかがおはしけむ、姫とつけて心にも入れず、いかで背きなんと思へり。

（藤袴巻・三四三頁）

鬚黒の北の方は、光源氏の最愛の女性である紫の上の異腹姉で、鬚黒より三、四歳年長者である。しかし、鬚黒は北の方と何とかして別れようと思っている。それは、北の方の人柄に問題があるということではなからうか。鬚黒の北の方は時々物の怪によって正気を失うことがある、夫の鬚黒を玉鬘に向かわせる要因にもなる。

女君、人に劣りたまふべきことなし。人の御本

性も、さるやむごとなき父親王のいみじうかしづ
きたてまつりたまへる、おぼえ世に軽からず、御
容貌などもいとようおはしけるを、あやしう執念
き御物の怪にわづらひたまひて、この年ごろ人に
も似たまはず、うつし心なきをり多きものし
たまひて、御仲もあくがれてほど経にけれど、
云々（真木柱巻・三五七頁）

本来は、「御容貌などもいとようおはしける」「父宮に
似たてまつりて、なまめいたる容貌したまへる」とさ
れ、「本性はいと静かに心よく、見めきたまへる人」
であり、「まことの心ばへのあはれなる」と、さらに
親王である父に「いみじうかしづきたてまつ」られ、
世間の評判も高い姫君だった。ところが、鬚黒との結
婚後、「あやしう執念き御物の怪にわづらひ」時々発
作を起こすことがあって夫の心は離れ、やがて玉鬘と

の結婚に苦しむのである。後には、玉鬘のもとへ出かけようと準備をしている鬚黒に突然、背後から火取の灰を浴びせかける異常な行動をする場面は有名である。現代的に見れば、ヒステリー症、もしくは統合失調症とも言えよう。その根拠として次の鬚黒の北の方の様子から推測することが出来る。

いとささやかなる人の、常の御悩みに痩せおとろへ、ひはづにて、髪いとけうらにて長かりけるが、分けたるやうに落ち細りて、梳ることをもをさをさしたまはず、涙にまろがれたるは、いとあはれなり。(真木柱巻・三六〇頁)

身体は痩せて衰弱し、髪は抜け落ち、梳ることもなく涙で固まっている鬚黒の北の方の様子に痛々しく感じる場面である。鬚黒の北の方に取り憑いた物の怪に

ついで浅尾広良氏は、物の怪に憑かれる紫の上や女三宮は鬚黒の北の方と同じく先帝の系譜に関わっている点をクローズアップして論じている¹²。その内容を見ても、次のようである。

物の怪が彼女と鬚黒との関係を疎遠にさせ、次代の天皇の外戚となる鬚黒との婚姻関係を断つことは、そのまま式部卿宮家の将来の可能性を閉ざすことになるはずである。かつ、同腹の妹の王女御は、冷泉帝に入内しているが子供もなく、六条御息所の守護霊に守られた秋好中宮に気圧されてしまっている。すなわち、紫上・女三宮も含めて先帝の系譜は、物の怪の策動によって胤が絶える方向に進んでいるとみることが出来る。事実、先帝から数えて三代をもつて、ほぼこの系譜は跡絶えてしまふ。とすると、想像をたくましくすれば、鬚黒の北の方に憑

く物の怪も、本文上ではそれと語られてはいないが、六条御息所の霊と敷衍して考えることも許されるかもしれない。

（『源氏物語の準拠と系譜』二六〇頁）

この論によれば、鬚黒の北の方が式部卿宮家の期待を担って、今上帝の母承香殿女御の兄弟であり、今上帝の後見者になる鬚黒と結婚したため、物の怪に憑かれたということになる。

しかし、その物の怪が必ず六条御息所やその父故大臣の死霊とは決めつけられないだろう。何故なら、帝位継承に関わる争いから恨みを持って死んだ怨霊は六条御息所の親子だけではないだろうからだ。例えば、藤原元方のように天皇代々に崇りをなして行く例からも窺える。元方と関わりある天皇のみならず、その何代あとの天皇まで物の怪の影響があつた。従つ

て、『源氏物語』の筆者が触れてない内容について断定することは物語の趣旨に反することになる可能性がある。

② 一条御息所と物の怪

「柏木」巻から登場する一条御息所は、朱雀帝の更衣として、女二宮（落葉の宮）を産む。一条御息所にあって娘の落葉の宮は、高貴な皇女として生きて欲しかったが、そうにはならず、柏木の所に降嫁をする。柏木は光源氏のライバルである頭中将の息子で、女三宮への求婚が実らず、落葉の宮と結婚する。しかし落葉の宮は、更衣腹ゆえに「落葉を拾ったも同然」と夫の柏木に軽視されていた。不幸はそこで終わらず、夫の柏木は早くも亡くなってしまい、落葉の宮は未亡人となる。一条御息所は最初から柏木との結婚に反対していたことが次の引用で分かる。

はじめより、母御息所はをさをさ心ゆきたまはざりしを、この大臣のめたちねむごろにきこえたまひて、心ざし深かりしに負けたまひて、院にも、いかかはせむと思しゆるしけるを、云々

（柏木巻・三二頁）

娘の皇女降嫁に苦しんでいた一条御息所だったが、今度は柏木死後、柏木と友人であった夕霧がその弔問をきっかけに一条宮を頻繁に訪れることに悩む。朱雀帝からの寵愛も薄かった更衣という身分から、自分の娘だけには世間にうしろ指を指される、人のもの笑いとなることを気にしていた。しかし、その思い通りにはならず、嘆き悲しんでいるところを物の怪が取り憑く。

いかならむついでに、思ふことをもまほに聞こえ

知らせ、人の御けはひを見むと思しわたるに、御息所、物の怪にいたうわづらひたまひて、小野といふわたりに山里持たまへるに渡りたまへり。

(夕霧巻・三九六頁)

一条御息所は病気の治療のために小野の山荘に移転する。そこを夕霧が見舞いに行き、落葉の宮への恋心を募らせていた。右の傍線が引いている物の怪とは、一条御息所の病気のことであろう。この物の怪について新古典文学大系の脚注では、「病気の一種」として解釈している。また、新潮日本古典集成の頭注では、「人の生霊・死霊・天狗・狐など、魔性のもののしわざによる病気」として解釈している。つまり、病気に関わる物の怪として解釈していることが窺える。そのある日、夕霧は落葉の宮の傍らで一夜を明かす。その明け方、夕霧の姿を目撃した祈禱の律師から話を聞

いた一条御息所は心を痛め、その真相を確かめるために夕霧へ手紙を贈る。ところが、その手紙は夕霧が見る前に、落葉の宮を嫉妬する雲居雁によって奪われ、隠されてしまふ。その事情も知らず、夕霧からの返事や訪れがなくなつたことに落胆した一条御息所の病勢は悪化し、律師の修法にも効果なく、絶命してしまふ。皇女を産んでも更衣で終わつた一条御息所としては、落葉の宮の皇女としての尊厳を守ることが唯一の生き甲斐であり、希望だつたと考えられる。その生き甲斐が崩れた今、一条御息所の死は物の怪と関係なく、必然的であつたかも知れない。

ここまで述べた、鬚黒の北の方や一条御息所のようなある特殊の症状を現す病気が、物の怪による病気として理解できなくはないが、物の怪と関係ない病気もあるのではないかと考えられる¹³。それについては今後の課題としたい。

③ 朱雀帝の眼病

故桐壺院が遺言として朱雀帝に残したことは、東宮（後に、冷泉帝）と光源氏を重んじることである。光源氏を親王ではなく、臣下として「朝廷の御後見役」をさせようとする理由を言いながら、光源氏のことを頼む。ところが、須磨巻に行くと、光源氏は朱雀帝の世を恐れ、自ら須磨へ退去する。光源氏の須磨流謫後、暴風雨の夜、朱雀帝の夢に故父桐壺院の亡霊が現れる。

三月十三日、雷鳴りひらめき雨風騒がしき夜、帝の御夢に、院の帝、御前の御階の下に立たせたまひて、御気色いとあしうて睨みきこえさせたまふを、かしこまりておはします。聞こえさせたまふことども多かり。（明石巻・二五一頁）

雷とともに雨風の騒がしい夜、怒っている故桐壺院が朱雀帝を睨んでいる夢の描写である。また、

睨みたまひしに見合はせたまふと見しけにや、御目わづらひたまひて、たへ難う悩みたまふ。御つつしみ、内裏にも宮にも限りなくせさせたまふ。(明石巻・二五二頁)

睨んでいる故桐壺院の目に朱雀帝の目を合わせる夢を見てから眼病を患うことになるのである。桐壺院の亡霊のきっかけで光源氏は二年数ヶ月ぶりに京へ戻り、権大納言に昇進する。一方、弘徽殿大后は物の怪に取り憑かれ、病床に臥し衰弱していく。さらに、大后の父太政大臣が亡くなるなど、煩わしいことが起こりつつあった。そこで自業自得のように朱雀帝は東宮

への讓位を思うなど、光源氏の繁栄がここから始まる。朱雀帝の眼病の原因と考えられるのは、先帝の遺言に対する朱雀帝の良心の呵責から桐壺院の亡霊という幻想を見るといふ、思い込みによる精神的苦痛が、眼病として現れたのではなからうか。事実上の記録類によると、長保元年（九九九）十二月九日の『権記』には一条帝が眼病に、それから『御堂関白記』の長和四年（一〇一五）三月二十日以降、三条帝の眼疾について頻繁に記されている。三条帝の眼病は、父冷泉帝の物の怪が原因とされている。『源氏物語』の成立より、後のことになる史実ではあるが、『源氏物語』の朱雀帝の場合と似ている。また『御堂関白記』によれば、藤原道長も眼病にかかっていることが記録されている。

④ 柏木と物の怪

柏木は女三宮と結婚したかったが、思い通りにはならず、朱雀帝の娘落葉の宮と結婚する。女三宮への恋慕は結局、光源氏の正妻という立場にいる女三宮と夕ブーを犯す。その結果、女三宮は不義の子である薫を出産し、出家をする。女三宮との密通事件が光源氏に知られた柏木は、皮肉まじりに光源氏に睨まれる。女三宮が薫の出産後、出家をした話を聞いて柏木はわらに生きる氣力を失ってしまった。この弱った身体に物の怪は取り憑きやすいためである。

わづらひたまふさまの、そこはかたなくものを
心細く思ひて、音をのみ時々泣きたまふ。陰陽師
なども多くは、女の靈とのみ占ひ申しければ、
さることやと思せど、さらに物の怪のあらはれ
出で来るもなきに思ほしわづらひて、かかる隈々

をも尋ねたまふなりけり。(柏木巻・二九三頁)

陰陽師の占いによつて柏木の病の原因が「女の霊」の
仕業であることが告げられる。ここの柏木の病状とし
て「そこはかなくものを心細く思ひて、音をのみ時々
泣きたまふ」といふ様子から「女の霊」であることが
窺える。この表現は、物の怪に取り殺された夕顔の死
後に見られる光源氏の病状と似ている。

いといたく面瘦せたまへれど、なかなかいみじ
くなまめかしくて、ながめがちに音をのみ泣きた
まふ。見たてまつり咎むる人もありて、御物の怪
なめりなどいふもあり。(夕顔巻・一八三頁)

この時、光源氏は瘧病(現、マラリヤに当たる病)を
患つていた。この病気については、物の怪によるものを

とされ、加持祈祷を行われていたことが古記録に残されて
れている。例えば、『小右記』に記されている後一条
帝の病がその例である⁽¹⁴⁾。
代に入ってから急激に増えた。その物の怪を退治する
ために修験者や僧侶、陰陽師などが加持祈祷し、調伏
したのである。加持には、占いやお経を読むなどした
が、それは当時の、物の怪の治療法であった。
一方、民衆が抱いた物の怪の思想といえば、ほと
んど全ての病気は物の怪によるものとして考えられ
たようである。要するに、正体不明の精霊、死んだ
人の御霊、または怨霊がある特定の人に憑いて病気を
起こし、苦しめて死に至らせる恐ろしいものであ
ることが窺える。

四 その他における物の怪

本章では、光源氏が亡くなった後の世代の物語として、宇治十帖の世界、特に「手習」巻に登場する「昔は行ひせし法師」という死霊について、浮舟との関連性や浮舟物語と『源氏物語』の正編との相違点を中心に考察する。夕顔物語に登場する「いとをかしげなる女」も「その他」に分類できるが、それについては、第四章にて述べることにする。

光源氏の弟である八の宮は、朱雀帝の時代、東宮となり、帝位を継ぐ可能性がある親王であった。しかし、母弘徽殿大后の東宮（冷泉帝）廃立という計略が失敗¹⁵した後は、宇治の山荘に引きこもり、都とは交流を絶つて、二人の姫君と仏道修行に専念している。そこを薫が仏法のために通い始める。その三年が経った頃、八の宮は、亡き北の方の腹の大君と中の君、二人姉妹を薫に後見を委託する遺言を残し、娘たちには、宇治

を離れないことを訓戒して亡くなってしまった。その時、薫は大君に恋心を持っていたが、大君は父の遺言を気にして薫の求愛を拒みつつ、匂宮と結ばれた中の君の心を心配するなど、その心労の末、病に臥し、亡くなってしまう。父宮の遺言の通りにはならなく、中の君は匂宮と結ばれた後、匂宮の訪れが途絶えがちとなり、幸せではない生活の姿に、長女の大君としては責任を感じたのである。さらに、宇治の八の宮家を守らなければいけないという立場であったので、薫の求愛はもっと苦しかったかも知れない。薫は、亡くなつた八の宮と大君のために、宇治の山荘を壊して御堂を建てる。薫はこの御堂で、初めて亡き大君の面影がある浮舟を垣間見て感動する。薫は大君の「形代」として浮舟を愛するようになる。

宮の女房として仕えていた中將の君である。ところ、八の

が、北の方の死後、俗聖の生活に入った八の宮との間で浮舟を儲けるが、八の宮はそれを厭い、中将の君の所に来なくなつてしまつた。居づらくなつた中将の君は、陸奥守の常陸介の正妻として浮舟と一緒に下向する。浮舟は皇族の血筋ながら、受領の継娘として養育されるが、うまく行かず、二条院の中の君に引き取られ、一時滞在することになる。そこで好色な匂宮に見つかり、手をつけれそうになつた事件があつて、三条の家に移すが、今度は薰と契りを交わし、宇治に居住させられる。しかし、薰の留守の間に、色好みの匂宮は執拗に薰を装つて浮舟の寢所へ忍び込み、強引に契りを交わしてしまふのである。浮舟は薰に對する罪悪感と匂宮を忘れない揺れる心の中で、どうしようもできず、宇治川へ入水を決意する。この後、浮舟は暗い夜、一人で出かけたところ、「昔は行ひせし法師」の悪靈に取り憑かれたとされてゐる。母中将の君

は、浮舟が川に身を投げたことも知らず、浮舟の失踪について、次のように不審に思っていた。

鬼や食ひつらん、狐めくものやとりもて去ぬらん、いと昔物語のあやしきものの事のたとひにか、さやうなることも言ふなりし、と思ひ出づ。

（蜻蛉巻・二〇九頁）

右の「鬼」という語は、「浮舟物語」に十八例登場する。この「鬼」について、『花鳥余情』では、

伊勢物語の鬼はや一くちにくひたりといふはほり川のおとゝ国経の大納言などの二条后をとり返したてまつりし事をおにといへるなりいせ物かたりの鬼は人をたとへていふまことの鬼にはあらず又江談に小松帝時仁和三年八月武徳殿

松原^ニ有^レ鬼食^レ人は是則大ナル恠也同廿六日帝崩御
是其徵^テ歟云々これは鬼の人をくふためしなり

(『花鳥余情』三三一頁)

と『伊勢物語』六段の「鬼はや一口に食ひてけり」と
注釈している。さらに、『江談抄』では、仁和三年八
月武徳殿の松原に鬼が出現して人を食った話も挙げ
ている。これによつて、当時の「鬼」というものが想
像できよう。靈的存在、つまり人の靈魂とは違った特
殊的な存在として天狗、変化のような妖怪が人間と
もに住んでいたと考えられるのではないか。實際、浮
舟が入水のために、夜一人で出かけようとした時を回
想する場面を見ると、次のようである。

心強く、この世に亡せなん、と思ひたちしを、
をこがましうて人に見つけられむよりは鬼も何

も食ひうしなひてよ、と言ひつつつくづくとゐたりしを、いとよげなる男の寄り来て、いざたまへ、おのがもとへ、と言ひて、抱く心地のせしを、宮と聞こえし人のしたまふとおぼえしほどより心地まどひにけるなめり。(手習巻・二九六頁)

死んだ自分が見苦しいさまで人に見つかると、鬼でも何でも食い死なせて」と言う浮舟の所に、忘れられない匂宮のようないきよげなる男が現れ、「いざたまへ、おのがもとへ」と言ひて抱く感じがしたら浮舟はそのまま正気を失つてしまふ。これはまさに、匂宮のような格好で身を隠した「昔は行ひせし法師」の死霊が浮舟を死の川へ呼び招いている場面であろう。

一行に発見され、比叡山の麓の小里の山里で、横川の僧都の妹尼に世話される。しかし、なかなか意識が

優れない状態が続いたので、物の怪調伏の加持祈祷が
繰り返された。それにも効験が無かったため、最後に
横川の僧都によって祈祷が始まる。ようやく浮舟に憑
いていた物の怪が調伏される場面が次のようである。

「おのれは、ここまで参うで来て、かく調ぜら
れたてまつるべき身にもあらず。昔は行ひせし法
師の、いさかなる世に恨みをとどめて漂ひ歩き
しほどに、よき女にあまた住みたまひし所に住み
つきて、かたへは失ひてしに、この人は、心と世
を恨みたまひて、我いかで死なん、といふことを、
夜昼のたまひしに頼りをえて、いと暗き夜、独り
ものしたまひしをとりにしなり。されど、観音と
ざまかうざまにはぐくみたまひければ、この僧都
に負けたてまつりぬ。今はまかりなん」とののし
る。「かく言ふは何ぞ」と問へば、憑きたる人も

のはかなきけにや、はかばかしうも言はず。

(手習巻・二九四頁)

この物の怪は、自分は簡単に調伏されるものではない、昔は修行を積みながら、些細なことで恨みを残して死んだ法師であることを明かす。その恨みのせいで成仏できず、この世を彷徨っていたところ、「よき女のあまた住みたまひし所」宇治の八の宮家に棲み憑いて、その内、精神的に不安定だった大君を取り殺す。今度は「心と世を恨みたまひて、我いかで死なん」と毎日死を望んでいた浮舟が暗い夜一人でいたところに取り憑いたと語る。されど、観音菩薩の守護が強かったので、横川の僧都の加持に負け、退散すると言う。浮舟に取り憑いた法師の死霊の事例は、『今昔物語集』巻第二十の「染殿后為天宮被嬖乱語」第七に語られて、いる説話がその例である。

今昔、染殿ノ后ト申スハ、文徳天皇ノ御母也。
良房大政大臣ト申ケル関白ノ御娘也。形チ美麗ナ
ル事、殊ニ微妙カリケリ。而ルニ、此后常ニ物ノ
氣ニ煩ヒ給ケレバ、様々ノ御祈共有ケリ。

(③ | 四六頁)

物の怪に悩まされていた染殿の后は、文徳天皇の女御
で、清和天皇の母であり、関白太政大臣良房の娘であ
る。この后のために、「大和葛木ノ山ノ頂ニ、金剛山
ト云フ所有リ」、そこで験力を持っている評判高い聖
人を呼んで、後の加持を担当させた。

次は、加持によって染殿の后に取り憑いていた物の
怪(老狐)が侍女に乗り移って、走り回りながらわめ
き叫ぶ場面である。

御前ニ召テ、加持ヲ參口ルニ、其驗シ新タニシ
テ、后一人ノ侍女忽ニ狂テ哭キ嘲ル。侍女ニ神託
テ走り叫ブ。聖人弥ヨ此ヲ加持スルニ、女被縛テ
打チ被責ル間、女ノ懷ノ中ヨリーノ老狐出テ、転
テ倒レ臥テ、走り行事能カラズ。其時ニ聖人ヲ以
テ狐ヲ令繫テ、此ヲ教フ。(③—四七頁)

これで、後の病氣は治り、父大臣も喜び、この聖人を
しばらく宮中に泊まらせるが、後の美貌に心が揺れ、
思慕するようになる。この聖人は、「我忽ニ死テ鬼ト
成テ、此后ノ世ニ在マサム時ニ、本意ノ如ク后ニ陸ビ
ム」と誓うのである。「物ヲ不食ザリケレバ、十余日
ヲ経テ」餓死してしまい、望んだとおりに鬼となって、
后に取り憑いたのである。すると、后は微笑みながら、
御帳の中に入り、いつの間にか、鬼と二人で笑いなが
ら話をするのである。しかし、日暮れになって鬼が御

帳から出ると、後は、今まで起こっていたことに気づかず、普段と変わらない様子でいるのであった。染殿の後の物の怪の加持を担当した聖人が鬼となったその姿は、次のように描写している。

其形、身裸ニシテ、頭ハ禿也。長ケ八尺許ニシテ、膚ノ黒キ事漆ヲ塗レルガ如シ。目ハ銃ヲ入タルガ如クシテ、口広く開テ、劔ノ如クナル齒生タリ。上下ニ牙ヲ食ヒ出シタリ。赤キ裕衣ヲ搔テ、槌ヲ腰ニ差シタリ。(③―四九頁)

裸に、頭はかっぱ頭のように、身長は約二・四メートルほどで、肌は黒く、目は、カナマリを入れたようで、裂けた口には剣のような歯が生えている。当時の鬼の形と思われる描写が詳細に描かれている。染殿の後の説話は、『河海抄』の「或記云」で、次のように記さ

れている。

むかし染殿皇后御なやみの金峯山より久修練
行の行者まいりて加持し奉る平愈の後本山にか
へりて年来の行業を廻向して誓て鬼となれり紺
青鬼といふつねに后をわつらはしたてまつりけ
るを智証大師ねんころに教誡し給ければ紺青鬼
はちたる色ありてその坐にありなから灰のやう
になりてきえにけり其後后もこのことくになり
給けり云々善相公の記にもみえたり大師の（御）
事はなきにや（『河海抄』五九六頁）

また、「古事談^{ふることだん}」では、染殿の后が、天狗となつた紀
僧正真済に憑依されたという伝承を挙げてゐる。
しかし、浮舟に憑いた物の怪の正体については憑坐
が頼りなかつたため、その正体についてはただ、昔、

修行をしていた法師ということしか分らない。物の怪の調伏もできて、元氣をとり戻した浮舟は横川の僧都に頼んで出家をする。後に、横川の僧都は、薰の思いの人である女性を出家させたことを後悔し、一度出家をした浮舟に還俗を勧めるが、浮舟は、少しずつ甦った過去の記憶を誰にも言わず、仏法に励むのである。

『源氏物語』の正編で現れる物の怪の場合は女の霊で憑かれる者との関係がはつきりしているが、宇治十帖では、男、特に法師の霊で、憑かれた浮舟との関連性がまったくと考えられない。むしろ、憑かれる側のから悪霊を呼び出す奇妙なストーリーから、浮舟の心の中のはななかろうか。

五 まとめ

本章では『源氏物語』における物の怪について、大きく怨念による物の怪と病における物の怪、それから物の怪に憑く側と憑かれる側との関連性がない。その他における物の怪、三つに分けて述べてきた。特に病における物の怪の場合は、人間の弱い所に入つてくるモノとしての物の怪の特徴が考えられる。とてころが、紫式部が考えていた物の怪観はもつと進歩した現代的な考えであることが窺える。それは、『紫式部集』四四、四五番の歌に、次のように記しているからである。

絵に、物の怪つきたる女のみにくきかた描きたる後に、鬼になりたるもとの妻を、小法師の縛りたるかた描きて、男は経読みて、物の怪責めたるところを見て

亡き人に託言はかけてわづらふもおのが心の
鬼にやはあらぬ

返し

ことわりや君が心の闇なれば鬼の影とはしる
く見ゆらむ

ここで、物の怪に取り憑かれて、後妻の後ろに、
死んだ前妻の醜き姿が見えて、その鬼（物の怪）を退
散させようとする場面を記している。この場面を見
て、実にその物の怪（鬼）は、夫自身の「疑心暗鬼」
によるものではなからうかという歌である。つまり、
紫式部は、物の怪というのは、夫の前妻に対しての後
ろめたさ、良心の呵責が心の鬼、つまり、その心が生
んだ幻想であることを語っている。
とさらに、『源氏物語』でも紫式部の物の怪観が窺え
るところがある。朱雀帝の夢の中に亡き父桐壺院が怒

りながら朱雀帝を睨みつけるなどの話を聞いた母弘徽殿大后が次のようにいう。

「雨など降り、空乱れたる夜は、思ひなしなることはさぞはべる。軽々しきやうに、思し驚くまじきこと」と聞こえたまふ。(明石巻・二五二頁)

ここには、「心の鬼」という語は用いられていないが、その語に通じる心境が描かれている。それは、雨などの悪い天候では、思い込んでいることが夢に現れるものなので、驚くことはないということである。まさに紫式部が考えている「心の鬼」、「心の影」と同様の解釈であって、それが物の怪の幻想を見せたとも言えよう。

『源氏物語』に先行する『蜻蛉日記』でも、「心の鬼」を次のように記している。

暗う家に帰りて、うち寝たるほどに、門いちはやくたたたく。胸うちつぶれて覚めたれば、思ひのほかに、さなりけり。心の鬼は、もし、ここ近きところ、障りありて、帰されてにやあらむと思ふに、人はさりげなけれど、うちとけずこそ思ひ明かしけれ。つとめて、すこし日たけて帰る。

（「天縁三年閏二月十日条」二九一頁）

この作者の夫である藤原兼家は、あまり訪ねもしない夫が、ある日の夜中、訪れたことを「疑心暗鬼」として考える。近くの女の所を訪れたが、差し障りがあつて、しようがなく自分の所を訪ねて来たと心の鬼が妄想するのである。つまり、道綱母の物の怪観も紫式部と通じるところがある。以上のように紫式部は、当時の政治的怨念による物

の怪観と異なる「心の鬼」という物の怪観が見られる。
この「心の鬼」とは、「疑心暗鬼²⁰」を指すものであり、
「氣のとがめ・良心の呵責」に当たるものである。光源氏
源氏が見た夕顔を取り殺した「いとをかしげなる女」
や葵の上を襲う六条御息所の生霊、それから紫の上と
女三宮に取り憑いた六条御息所の死霊、すべてが光源
氏しか見ていない。要するに、六条御息所に対する光
源氏の氣のとがめ・良心の呵責、いわゆる、「心の影」
に怯えて物の怪の幻想を見るのではないかと考えら
れる。

注

- (1) 六条邸は雅な伝説の残る地である。『今昔物語集二』(小学館)巻第二十七本朝付靈鬼の「川原院融左大臣靈宇陀院見給語第二」参照。
- (2) 新編日本古典文学全集『源氏物語②』賢木巻を引用すると、「十六にて故宮に参りたまひて、二十にて後れたてまつりたまふ。三十にてぞ、今日また九重を見たまひける。」(九三頁)という、年齢表示が不審なところである。これについては、様々な説がある。
- (3) 森一郎氏「六条御息所の造型―その役割と問題―」(『源氏物語作中人物論』笠間書院、一九七九年)
- (4) 川崎昇氏「六条御息所の信仰的背景」(『國學院雑誌』、一九六七年)
- (5) 三谷栄一氏「源氏物語における民間信仰」(『源

- (6) 氏物語講座』第五巻、有精堂、一九七一年)
- (6) 深沢三千男氏「六条御息所悪霊事件の主題性について」(『源氏物語とその影響研究と資料』古代文学論叢第六輯)『武蔵野書院、一九七八年)
- (7) 松永本『花鳥余情』源氏物語古注集成、第一巻(一九七八年、桜楓社)
- (8) 浅尾広良『源氏物語の準拠と系譜』翰林書房、二〇〇四年
- (9) 保立道久氏『平安王朝』(岩波新書、一九九六年)によると、「左大臣藤原魚名、参議・太宰帥藤原浜成、参議・東宮大夫大伴伯麻呂などのトップクラスの貴族が連座しており、この政変によって天武系王統を支える貴族社会の基盤は崩壊した」という。
- (10) あやしきわざについて、新編日本古典文学全集『源氏物語①』桐壺巻頭注で、「汚物など

(1 1)
をまき散らすことらしい。「(二〇頁)という。
藤壺女御の皇子出産について、紅葉賀巻(三

二頁)を引用すると、「この御事の、十二月も過ぎにしが心もとなきに、この月はさりともと宮人も待ちきこえ、内裏にもさる御心まうけどもある、つれなくてたちぬ。御物の怪にやと世人も聞こえ騒ぐを、宮いとわびしう、このことにより身のいたづらになりぬベきことと思し嘆くに、御心地もいと苦しくてなやみたまふ。(中略)二月十余日のほどに、男皇子生まれたまひぬれば、なごりなく内裏にも宮人も喜びきこえたまふ。」と、出産の大変さより世人を気にしている藤壺の心理描写が主になっている。

(1 2)
注7に同じ。前掲した(イ)前坊と六条御息所の故父大臣の系図参照。

(13) 『病草子』の絵巻をみると、肥満の女や虫歯の人などの絵がある。これらが物の怪と関係ある病気とは考えにくい。

(14) 増補史料大成『小右記』(臨川書店、一九六五年)によると、寛仁四年九月十四日条に、「午終御瘧病發御、未終平復由、入道相府被候御所、以能信卿被告諸卿、左大臣參入、示彼是云、可定申大宋國商客來着事者、諸卿云、御藥間如何、被奏案内、可被從仰歟、仍復陣被奏事由云々、此間御惱更發、重惱御、或云、口平占御邪氣由、仍僧等奉仕加持、」と記されていいる。後一条帝の病を吉平が占い、物の怪による病とされ、加持祈禱を行なったと言

(15) 「橋姫」巻(一二五頁)を引用すると、「源氏の大殿の御弟、八の宮とぞ聞こえしを、冷泉

院の春宮におはしまし時、朱雀院の太后の横さまに思しかまへてこの宮を世の中に立ち継ぎたまふべく、わが御時、もてかしづきたてまつりたまひける騒ぎに、あいなく、あなたさまの御仲らひにはさし放たれたまひにければ、いよいよかの御次々になりはてぬる世にて、いまじらひたまはずまた、この年ごろ、かかる聖になりはてて、今は限りとよろづを思し棄てたり。」と記している。

(16) 総角巻一例、東屋巻二例、浮舟巻一例、蜻蛉巻七例、手習巻七例、合計十八例である。

(17) 玉上琢彌編『河海抄』(角川書店、一九六八年)「或記云」(五九六頁)によるもの。

(18) 玉上琢彌編『河海抄』「故事談」(五九五頁)参照。

(19) 新編日本古典文学全集『蜻蛉日記』の頭注(二

(2 0)

九一頁)によるもの。

清水好子氏『紫式部』(岩波新書、一九七三年)によると、「心の鬼」は「鬼神暗鬼」の「暗鬼」のことで、「恐れ疑う心あるときは、実際にありもせぬ幻想を生じるときをいう」(一五五頁)という。

※ 本文中の『源氏物語』、『万葉集』、『今昔物語集』、
新編蜻蛉日記『伊勢物語』、『紫式部集』の引用は
新編日本古典文学全集(小学館)による。

第四章 夕顔巻「いとをかしげなる女」考

一 はじめに

夕顔巻に登場する「いとをかしげなる女」の正体について、今日に至るまで論争の終結が見えない。本章は、夕顔を取り殺したもののけの正体について考察してみたい。

この正体については大まかに、

イ) 六条御息所の怨霊(生霊)説

ロ) なにがし院に棲み憑く妖物説

ハ) 怨霊説と妖物説の折衷説

と、三説に分けられる。この三説以外にも、六条御息所に仕えている中将の君の生霊という説や頭中将の正妻である北の方の呪詛だという説などがある。しかし、中将の君であれば、面識もある光源氏が「いとをかしげなる女」と区別がつくはずである。ところが、光源氏は「荒れたりし所に棲みけん物」として思っている。また頭中将の北の方とするのであれ

ば、嫉妬の恨み言を吐く相手が光源氏ではなく、頭中將でなければならぬ。従って中將の君や頭中將の正妻と云うことは、この二なる女の正体の可能性として考えにくく、この二つの説に關して、本章ではこれ以上触れないことにする。

さて、夕顔怪死事件は八月十五夜^①の明け方から徐々に展開していく。夕顔が異常に怖がる心境や、なにがし院の描写があり、夕顔の怪死事件はまるで最初から予定されていたかのような雰囲気^②が綴られてきている。例えば、夕顔は自分の死を予告していたのか、^③「山の端の心もしらでゆく月はうはのそらにて影や絶えなむ」と消えてしまいな自分を心細く、^④気味悪いと言っている。次に、夕顔の怪死事件に關する物の怪の出現まで、物語に描写されている状態

況・背景を検討してみよう。

光源氏は人の目を気にして先払いもせず⁽²⁾、装束も粗末な狩衣の姿で、夜更けになって夕顔の五条の宿を訪れる。それはまるで「昔ありけん物の変化」⁽³⁾のようであった。光源氏は落ち着かない五条の宿から気楽な所へと夕顔を誘う⁽⁴⁾。しかし、夕顔は身元も明かしてくれない光源氏の誘いに恐ろしさを感じる。光源氏の誘いに躊躇する夕顔に「いづれか狐なるらん⁽⁵⁾」と、冗談半分で言う。こういう雰囲気では八月十五夜を過ぎた光源氏と夕顔は翌日、荒れ果てた「そのわたり近きなにがしの院」に移る。

た 荒れたる門の忍ぶ草茂りて見上げられたる、
たとしへなく木暗し。(一五九頁)

わ いたいたく荒れて、人目もなくはるばると見
わたされ、木立いと疎ましくも古りたり。
け 近き草木などはことに見所なく、みな秋の野
にて、池も水草に埋もれたれば、(一六一頁)

気味悪い雰囲気の荒れたるなにかしの院は河原院が
モデルだと言われている⁽⁶⁾。当時の人たちはなにがし
の院イコール源融の河原院として考えていたのであ
ろ。日中といえども何か恐ろしく気味悪そうな
雰囲気は光源氏も感知しなから一方では「鬼など
も我をば見ゆるし、てん」と自分勝手な強がりを見せ
る場面もある。夕方になる、その恐ろしさは一段

と増し、夕顔はうす気味悪さの中、尋常ではなかつた。

たとしへなく静かなる夕べの空をながめたまひて、奥の方は暗うものむつかしと、女は思ひたれば、端の簾を上げて添ひ伏したまへり

(一六三頁)

つと御傍に添ひ暮らして、物をいと恐ろしと思ひたるさま(一六三頁)

夕顔の恐怖心は光源氏の傍らから離れられないほど異常であった。何故、夕顔はこれほど怖がっていたのか。この後に起こる事件である。夕顔の心理描写は、この後に起こる事

宵過ぐるほど、すこし寝入りたまへるに、御
枕上に、いとをかしげなる女ゐて、「おのがいと
めでたしと見たてまつるをば、尋ね思ほさで、
かくことなることなき人を率ておはして、時め
かしたまふこそ、いとめざましくつらけれ」と
て、この御かたはらの人をかき起こさむとすと
見たまふ。(一六四頁)

寝入った頃、光源氏の夢枕に現れた謎の女は恨み言
を言い、隣にいる夕顔を引き起こそうとする。この
美しい女の発言の解釈について、二つの見解に分
かれて^①いる。

A 私が(源氏の君を)たいそうご立派だとお見
上げ申している(その私を)云々
B おの(物の怪)がいとめでたしと見奉る(六

条御息所をば、云々
Aの解釈を取ると、この「いとをかしげなる女」の
正体は六条御息所のように思われる。しかし、Bの
解釈を取るのであれば、その正体が不明になつてし
まう。
の正体については、この美しい女（いとをかしげなる女）
の正体について考えてみたいと思う。

二 古注釈による研究

平安末期から鎌倉時代を経て室町の前期までの古
注釈では、夕顔の怪死事件に関するものは見当たら
ない。注釈史の早い段階では「いとをかしげなる女」
に ついてあまり問題にしていなかったようである。
室町時代の後半になって、初めて夕顔怪死事件を言
及したのが、一条兼良の「花鳥余情⁽⁸⁾」である。「あま

り心ふかくみる人もくるしき御もてなし」という所を、

給へるに よりて邪気になれるにや
これは六条御息所の事也源氏の君の思くらへ

と、解釈している。光源氏が上の品である六条御息所と下の品⁹である夕顔を思い比べた結果、六条御息所が邪気、つまり物の怪になるという解釈である。しかし、ここでは文末表現として「也」という断定を避けて「にや」という推測の形式を取っている。

次の藤原正存の「一葉抄¹⁰」では、

源氏の君思ひくらべ給へるを便にて靈も通せ

しにや

続けて、三条西実隆の「弄花抄」⁽¹⁾では、

源氏の思出し給ふを便にて霊も通し也

と、その正体を六条御息所の霊として取り上げてい
る。また、「岷江入楚」⁽¹²⁾でも源氏の枕上の女は「六条
御息所の念なるべし」と、その正体をはつきり明か
している。
ここまでは、中世（鎌倉時代）室町時代の注釈
史における夕顔怪死事件に關わる「いとをかしげな
る女」の正体を探って見た。平安時代から約五百年
も過ぎた解釈であるが、六条御息所の怨霊（生霊）

説が定着していく。しかし、この解釈は江戸時代に入って批判を受けることになる。

江戸初期の陽明学者である熊沢蕃山の「源氏外伝⁽¹³⁾」では、「御枕上にいとをかしげなる女ゐて」のところを次のように述べている。

御まくらは枕かみ也。女は、御息所の念成べし。生霊死霊と云物、億兆の中に一人有かなきか也。昔の人は、魂神強く、魄精あつく、萬事の勉め通りて、根深かりし也。此故に、思ひ入深き物霊と成たるためし、唐日本共にありし也。近世は、人の魂魄薄く成り、萬事の務も深からず、思ひもあつかからざる故に、霊になるもの希也。昔より云ならはしによりて、さも有かとおそるゝ者あれば、其心の虚に乗じて、狐狸など

やうの物など、靈のまねをして人を誑かすと見えたり。実の靈はなき事也。希に死靈になりたるも、数ありて、後は消失する物也。又子孫を立祭らしめ、或はほこらなど立て、神のより所をなせば、其靈やむ物也。夕顔は恐るゝ心深き故に、我となくなり給ふ成べし。御息所の靈にては有べからず、狐は罪なくとも弱き者による、常の事也。

最初は、「六条御息所の念」ということで中世の見解と同じ考えであるが、文章の最後まで読んでみると、結局、「御息所の靈にては有べからず」と死靈・生靈の存在自体を否定している。また熊沢蕃山はこれを狐や狸などが靈を真似たものとして捉えている。また、萩原広道の「源氏評釈」⁽¹⁴⁾では、夕顔を取り殺し

た「いとをかしげなる女」について「此院に住めり
けん変化のもの」として捉えている。今までの「六
条御息所の怨霊（生霊）説」という伝統的見解を否
定し、「なにがし院に住む変化のもの」という説を明
確に提示している。さらに、「余釈」では、今までの
「六条御息所の生霊説」という中世の見解の捉え方
について詳しく説明している。

怨念と見られたるは、葵ノ巻の事により御息所の
あてに定められたる也。そはまづ、此巻のはじ
めに六条わたりのは見えたと書出せしより次に
のわたりのは見えたと書出せしより次に
いふ事をばあらはさず。ただ六条わたりの人
のやんごとなき女に通ひ給ふ様にのみ言へるに
此夕顔の事は俄に出来たる事に、御息所の知

せ給ふべきやうもなければ、怨念あるべき理なし。されば唯此荒たる院に住める変化の物の所^ッ為^ラとのみ見るべき也。然れども六条の事もその匂ひとはしたる書様也。さるは此巻の初をかこの事もて書おこされたるよりして、御息の打とけぬ御本上をも書あらはしおきて、ここに至りて御息所と夕顔とを思ひ比べ給ふ事を言へる等、又おのがいとめでたしと見奉るをば云々と言へるも、全くかの御息所の事を源氏君のいとほしく思ひ出給ふによりて現はれたる変化とおぼしき書様なれば也。されば此院に住める妖物の御息所の様になりて、源氏君の思ひしをれ給ひ、夕顔ノ上物のおぢする本上なるをとりて現はれたる様とは心得べき也。もし旧説の如き意ならば、をかしげなる女とは言はずし

て、「六条わたりの御有様なる女の」等言はでは
えあらぬわざ也。さてまた此下に引れたる江談
抄の河原院の準抛の事等は、げにさる物語の世
に言ひふれけんを思はれたりとは見ゆれども、
それにつけても中々に御息所の怨念ならぬ事を
知るべし。総てこの大方の様は此巻の末に源
氏君の夢に夕顔を見給ひし処に「荒たりし所
住みけん物の我に見入れけんさらにかくなりぬ
ることと思し出づるにもゆゆしくなん」とある
が作り主の意と見えて、この変化の事の注釈の
如き詞也。心をつけて味はふべし。

今までの中世の見解は、夕顔物語の全体の構成を把
握しないで、夕顔怪死事件が起った八月十六日の
夜の場面、即ち光源氏の枕上に現れた女の恨み言だ
けを捉えて、「六条御息所の怨霊説」、つまり「生霊

の顔と比べられ。さらには女の恨み言は、まるで六条の
る。と、光源氏の夢に現れた謎の女は下の品である。夕
なる。女の登壇に、なが。この場面に焦点を当て
べの。あ、と、寝入り。の。場面に。変。わ。つ。て。い。と。を。か。し。げ
ば。や。と。と。ふ。と。思。い。比。べ。て。し。ま。う。光。源。氏。の。思。い。比
心。深。く。見。る。人。も。苦。し。き。御。有。様。を。対。し。と。り。す。て
ら。六。条。御。息。所。へ。六。条。わ。た。り。に。対。し。は。あ。ま。り
て。何。心。も。な。き。さ。し。む。か。ひ。を。あ。は。れ。と。思。い。な。が
か。し。げ。な。る。女。が。現。れ。直。前。光。源。氏。は。夕。顔。に。対
前。も。家。柄。も。何。も。描。か。れ。て。い。ない。と。こ。ろ。が、い。と
物。語。が。始。ま。る。この。段。階。で。は。六。条。御。息。所。に。つ。い。て。名
る。変。化。が。六。条。御。息。所。の。姿。に。化。け。て。現。れ。た。と。言。っ。て。い

御息所の心の叫び、そのものである。この「いとを
かしの解が一般的であつた。それには、前にも触れた
Aの解が一般的であつた。それには、前にも触れた
解は、岩城準太郎氏の『黄昏より黎明まで⁽¹⁵⁾』で初め
て指摘した新しい解釈である。
古注釈史の最初の段階では「六条御息所の生霊説」
として具体的に、六条御息所の念から霊へと定着し
て行く。しかし、江戸時代に入って、狐や狸などの
変化もの⁽¹⁶⁾の仕業という妖物説へと変わって行く。近
世の解は中世の解よりもっと具体的に合理的な
解が目立つ。
ここまでは、古代の夕顔巻に関わる「いとをかし
げなる女」の正体について考察してみたが、今日の
国文学研究者たちはどう考えているのか。まず、三

つ の 説 に 分 け て 考 え て み た い 。

三 六 条 御 息 所 の 怨 霊 (生 霊) 説

い そ う ご 立 派 だ と お 見 上 げ 申 し て い る (そ の 私 を) た
云 々 と い う A の 解 釈 を す る 。

所 、 光 源 氏 の 乳 母 の 見 舞 い に 行 っ た 「 六 条 御 息
そ の 近 所 に 住 む タ 顔 と い う 六 条 を 中 心 に 物 語 は 始 ま
る 。 も し か す る と 、 作 者 紫 式 部 は 六 条 御 息 所 を 意 識
し な が ら タ 顔 物 語 を 創 作 し た か も 知 れ な い 。 そ れ で
は 、 六 条 御 息 所 と は ど の よ う な 存 在 ・ 人 物 で あ ろ う
か 。 タ 顔 巻 で は 次 の よ う に 描 か れ て い る 。

む け き こ え た ま ひ て 後 、 ひ き 返 し な の め な ら ん
六 条 わ た り も 、 と け が た か り し 御 気 色 を お も

はいとほしかし。(一四七頁)

六条御息所は光源氏の求愛にもなかなか応じなかつた。プライド高い貴婦人である。この貴婦人は光源氏が訪ねた翌朝、人の目を気にして明るくなくなる前に光源氏は起こし、出させるのであつた。だからこそ彼女になる人言を気にして眠れない日々を送つていた。噂話である。その上、あまりにも物は思ひ詰める六条の性格は光源氏にとって息苦しく感じたり、ずだろ。当時は、あまりにも物を思ひ詰める遊離自分の身体から魂が離れて行動する、いわゆる遊離魂⁽¹⁷⁾という俗信があつたと思われる。このような六条御息所のあまりにも物を思ひ詰める性格から物の怪へと変化した可能性は充分にあるだろう。

さらにも、この説の大きな可能性として「いとをか
しげなる女」が現れる直前、光源氏が夕顔と六条御
息所を思い比べたことが挙げられる。光源氏が紫の
上に故藤壺中宮の話をしたところ、その夜、光源氏
の夢に藤壺が現れ、恨み言を言ったという例⁽¹⁸⁾（朝顔
巻）がある。また若菜下巻では、六条御息所の死霊
が紫の上に取り憑き、胸を悩ませたという例⁽¹⁸⁾がある
が、これも光源氏が紫の上に故六条御息所の樽をし
た夜の暁方である。「樽をすれば影」ということわざ
通りに夕顔巻に登場する「いとをかしげなる女」は
光源氏の思い比べによるものではなかろうか。

山口剛は論文⁽²⁰⁾「源氏物語研究―夕顔の巻に現れた
るもののけに就いて―」に六条御息所の生霊説の代

表的なものとして、次のように述べている。

「夕顔の巻」のものゝけは、畢竟、六条御息所のいきすだまである。されど、また源氏心内に潜在するものゝ具体化とも解し得よう。作者、この二つの関係を交錯して、深くあなぐらず、却つて、院内に棲める妖怪と解すべき余地を残した。(中間省略)

夢の如く、幻の如く、現の如く、六条御息所の如く、源氏心内の影像の如く、院内の妖怪の如くおもはしむる所、作者の最苦心した所である。

このように、夕顔巻は作者がわざと謎のような書き方をしている。それによつて夕顔物語の高い芸術性が語られる。しかし、夕顔物語の結果として、夕顔

は物の怪によつて命を落とす。この物の怪が六条御
息所であれば、夕顔が死に至る必要性があったのか
疑問が残る。六条御息所と夕顔の接点がない。六条御
息所は光源氏が夕顔の所に通つていない。現在な
に、がしの院に一緒にいないことも知っている。そ
上、夕顔との面識もない。葵巻に登場する六条御息
所の生霊は、「車争い」という大勢の前でやつしとい
た自分の正体が惨めにさらけ出された屈辱という
「きつかけ」がある。これほどのきつかけが夕顔と
六条御息所の間にあったのか。このままでは「六条
御息所の生霊説」は夕顔の死事件に結びつかない。
もう一つの大きな問題は、光源氏はこの「いとを
かしげなる女」を三度も見るが、その正体を六条御
息所ではない、荒れた所に住む変化と結論を出して
いる。

それが、近世に入って有力視されていゝな
がし院に棲み憑く妖物」が夕顔を取り殺したの
ろがか。

四 なにがし院に棲み憑く妖物説

妖物説では、「おの（物の怪）がいとめでたしと見
奉る（六条御息所）をば、云々」というBの解釈を
する。最初、光源氏は宵過ぎる頃夢で「いとをかしげな
る女」と対面する。二度目は、夕顔の様子を見るた
めに紙燭を召し寄せて見ると、先ほど光源氏の夢枕
に現れた女と同じ容貌の女が夕顔の枕上に幻となつ
て見え、ふと消えるのであった。さらに、三度目は、
夕顔の四十九日の法要が行われた翌日の晩、夕顔の
姿とともになにかし院で見た謎の女の姿を見る。こ
れでやつと光源氏はこの「いとをかしげなる女」を

「荒れたりし所に棲みけん物」が自分に惚れて、隣にいた夕顔を取り殺したと、気味悪く思っている。玉上琢弥の『評釈源氏物語』によると、

夕顔の巻をよんでいるあいだは、この「ものけしは、源氏の解釈どおり（夕顔の四十九日の法要の翌日の源氏の述懐を指す）作者の指示とおり、某院のものけし、有名な「河原院に住む霊」と考えているべきである。そして、六条の女君が夕顔の巻に出るは、下の品と思われた夕顔の住む五条と、作者の上なる女君の住む六条とを対比せしめた、作者の技巧を思うべきである。

と言っている。玉上琢弥の論はさらに、『源氏物語』を読み進んだ人は、夕顔巻の冒頭に登場する六条御

がし院について『江談抄』⁽²²⁾の一節を引用しながら詳
 しく説明している。河原院は左大臣源融が賀茂川の
 ほとりに建てた邸宅で、融の死後、宇多法皇(寛平
 法皇ともいう)に献上されたが、その後、宇多法皇(寛平
 この河原院伝説は、宇多法皇が京極御所を伴って
 この院に宿った時、御源融の死霊が出て来て、京極御
 息所に取った憑き、御息所が、氣を失ってしまつた話で
 ある。また『伊勢物語』は、ある大事に育つた女に夜
 思いを寄せた男が女を盗み出して逃げたが、夜
 になつてある荒廃した蔵に女を置いて、雷雨を避け
 ているうち、女は鬼に食われ、文脈の流れがあ
 る程度想像できる。話から夕顔物語の文脈の流れがあ

鎌倉時代の『無名草子』⁽²³⁾では、

あさましき事。夕顔のこだまにとられたる事

と、夕顔が「木靈こだま」に取り憑かれて殺されたと言ひ、
『源氏くらべ』の中の「源氏四十八ものたとへの事」
は、「あさましき事、なにがしゐんに夕がほのうゑこ
だまにとられたること」という。また『伊勢源氏十
二番女合』では、

夜ふけはてて。こだまとかいふもののきたり
て。女君をとり奉る

と解釈している。当時の読者は「いとをかしげなる女」の出現場面であらうか。話を想起しながら物語を讀んでいたのである。そうすると、夕顔を殺した物の怪はこのような妖物説で良からうか。

顔に對する嫉妬の恨み言を發したのか、さらには、取り殺すほどの恨みを持つている妖物だ、つたのか、疑問に残る。もし、夕顔の異常な怯えによつて變化も、のが人間の真似をしていたからあまりにも具體的、条御息所を連想させるセリフがあまりにも具體的、リアル過ぎる。

鬢(24)巻で登場する夕顔の乳母が、光源氏が夢枕で見た謎の女の姿と一緒に夕顔の夢を見るが、このなにが

し院から遠く離れた九州まで、場所に棲みつくもの
が現れるというのはどう解釈すればいいのか疑問で
ある。池田弥三郎⁽²⁵⁾は「現象としては場所に居つくも
ので、作者が物語の中で六条御息所の生霊として脚
色している」という。また石村貞吉⁽²⁶⁾は「初めは怨霊
のような形式であるが、本来は狐変化などの魅入っ
たもの」と述べている。これですつきりしない謎の
女の正体についての方を場所に棲みつく妖物説の
問題点から生霊説と妖物説の「折衷説」に移りたい
と思う。

五 怨霊説と妖物説の折衷説

「いとをかしげなる女」の問題の発言から分かる
ように、恨み事の内容は確かに六条御息所の心境で

生靈であつたことが窺える。

今日の新しい説として現れたのは、六条御息所に
対する光源氏の「心の鬼」(良心の呵責)が「いとを
かしげなる女」という幻影を生み出したという考え
方である。岡一男は『源氏物語事典』の「物怪の精
神分析」⁽²⁷⁾で「葵上や夕顔の場合も、六条御息所の生
靈は源氏の心の鬼の影でしかない」と述べている。
これに関しては、三谷栄一の「夕顔物語と古伝承」⁽²⁸⁾
や原岡文子の「六条御息所考」⁽²⁹⁾などにも「心の鬼」
としての解釈が見られる。そして深沢三千男も「物
の怪の発言内容が六条御息所を顧みず、夕顔に夢中
になつてゐる源氏のあるまじき心を責めたもので、

それは同時に源氏の心中とも重なり合う」という。また、「おのが」は妖物自身を指すものであるとともに光源氏自身でもあると述べている。

光源氏が夢で見た物の怪は、光源氏自身が「心の鬼」に責められた結果、現れた形象であろうか。ここで物の怪の発言「おのがいとめでたしと見たてまつる云々」と言うところをもう一度考えてみたい。

物の怪は自らのことを「おのが」と言っている。しかし、六条御息所へ生霊・死霊を含むは自分のことを「おのが」という言葉では全く使っていない。このことからタ顔怪死事件の犯人として六条御息所の可能性は低くなるだろう。

それでは、光源氏の「心の鬼」である可能性はあるのか。『源氏物語』の中で「おのが」という言葉を用いている例を調べた結果、二六例（正編一四例⁽³¹⁾、

続編一二例⁽³²⁾がある。この言葉はだいたいの尼君や男、物の怪（浮舟に取り憑いた物の怪⁽³³⁾）などが用いてい
る。その内、光源氏が「おのが」という言葉を使用
した例が四例もある。
作者紫式部の物の怪観がよく見られる『紫式部集』
の四四〇四五番の歌によると、

絵に、物の怪つきたる女のみにくきかた描き
たる後に、鬼になりたるもとの妻を、小法師の
縛りたるかた描きて、男は経読みて、物の怪責
めたるところを見て
亡き人に託言はかけてわづらふもおのが心の
鬼にやはあらぬ

返し
ことわりや君が心の闇なれば鬼の影とはしる
く見ゆらむ

と、いう。これは物の怪に取り憑いて、その鬼を退散さ
に、死んだ前妻の醜姿が見えて、その鬼を退散さ
せよ。と疑心暗鬼にある。この絵を見て、その鬼を退散さ
自身、疑心暗鬼にある。この絵を見て、その鬼を退散さ
う歌である。紫式部は物の怪といふのは、夫の前妻に
対して、後ろめたさ、良心の呵責が心の鬼を生んだ
幻想である。また、源氏物語の中でも紫式
部の物の怪観が窺えるところがある。朱雀帝の夢の
中に亡き父桐壺院が怒りながら朱雀帝を睨みつける。
この話を聞いた母弘徽殿大后が次のようにいう。

「雨など降り、空乱れたる夜は、思ひなしな

ることはさぞはべる。軽々しきやうに、思し驚くまじきこと」と聞こえたまふ。

(明石巻・二五二頁)

それは、雨などの悪い天候では、思い込んでい
とが夢に現れるものなので、軽率に驚くことはない
と安心させる。しかし、この夢のせいにか、朱雀帝は
眼病を煩うことになる。
思っている光源氏の思い込み、言い換えると、良心の
つて責があの晩、光源氏の思い比べをきっかけに「い
とをかしの素性も分からない下の品の夕顔を二条院に
しかして行こうとも思つた光源氏が、いくら「心の鬼」
のせいにしてても夕顔を殺す理由があつたのか、すつ
きりしない疑問が浮かぶ。私案として考えられるの

は、夕顔怪死事件に関わる「いとをかしげなる女」
はいったい誰なのか。「六条御息所の生霊」か、それ
とも「なにがし院に棲み憑く物の怪」なのか、「狐狸
のような変化もの」であるか、「光源氏の心の鬼」で
あるか、とさういふところではなく、これらの全てを
含めた塊として考えたい。

六 まとめ

め、夕顔怪死事件の現場であるなにがし院の風景も含
め、事件の全貌をまとめると、次のような物の
怪顕現の条件に満たすことが分かる。
時は八月十五夜、男女が契りを交わすのは不吉で
あつたので会うことも避けていた当時、光源氏は人
の目を避けて暗くなつてから先払いもしないので
の夕顔の家にも宿る。その翌日の八月十六日、人の目
を避けて明るくなる前、なにがし院へ移る。この場

いは、素性も分からないう顔と、思ひ比べてしまふ心の影、御息所の中心を見抜いて、光源氏にこの心鬼が、た心の状況も考えられ、さういふ御心算、女一の魂が常に、そのもの光を、光源氏への心と訴え、ついでに、分の持主だ、た、た、め、光源氏への恨み、心を、高貴な六条御息所、あ、まり、にも、物を、思ひ、詰、め、る、性、格、す、い、れ、に、似、た、顔、の、異、常、に、怖、が、る、弱、い、心、が、モ、ノ、に、憑、き、や、そ、の、真、似、を、し、て、い、た、ず、ら、を、す、る、と、い、う、昔、話、で、あ、る、人、の、真、似、を、し、て、い、た、ず、ら、を、す、る、と、い、う、昔、話、で、あ、る、続、い、て、荒、れ、果、て、た、場、所、は、狐、狸、の、よ、う、な、変、化、も、の、が、憑、き、一、時、氣、を、失、わ、せ、た、と、い、う、伝、説、の、場、所、で、あ、る、融、の、死、靈、が、宇、多、法、皇、の、連、れ、て、来、た、京、極、御、息、所、に、取、り、出、す、こ、の、河、原、院、と、い、え、ば、河、原、院、の、元、主、で、あ、る、六、条、の、な、が、し、院、と、い、え、ば、誰、に、も、が、河、原、院、を、思、い、所、は、昔、の、物、語、を、連、想、さ、せ、る、場、所、で、あ、つ、た、。、当、時、は、

も考えられる。
このらの条件を細かく役割分担をして見ると、六
条御息所の念が謎の女の恨み言の発言を、光源氏の
心の鬼は「いとをかしげなる女」という形象を、
にがし院に棲み憑く死霊は六条御息所と念と光源氏
の心の鬼と合体、即ち妖物が夕顔の怖がる弱い心を利
用して死に変化、あたると言えよう。なにがし院に漂う
これらの悪い気運は、ある程度夕顔の怪事件を予
測出来たかも知れない。そういう意味で、なにがし院は、
たかも知れない。そのいう意味で、なにがし院は、
物の怪が出現しやすい負^{マイナス}の集積所であるとも言えよ
う。
。本章のまとめとして考えられるのは、「いとをかして
げなる女」の正体を今までの説のどれかを切り捨て

ていくより、これらの条件が合成された物の怪の頭
現として捉えた方が『源氏物語』に描かれて
の怪を理解するのに良いのであろう。

注

(1) 新編全集の頭注一四によると、「陰曆八月十五夜。中秋の名月の夜である。旧注では、この夜男女が契り交わすのを不吉とする。」とする。

(2) 『河海抄』は、「さきもをはせ給はす」という所に「昔は内々のありきにもさきをひけり云々用心のため也變化の物もさきのこゑにこそるゝなといへり西宮左大臣神泉苑の良角にて變化の物にあはれけるにもさきのこゑする時はひき入けるとありこれとはさきと記しひやつれたれはさきもをはすと云也」と記している。

(3) 「深きほどに人をしづめて出で入りなどしたまへば、昔ありけん物の變化めきて、うたて思ひ嘆かるれど」(一五三頁)

(4) 「なほあやしう。かくのたまへど、世づかぬ御

もてなしなれば、もの恐ろしくこそあれ」(一五四頁)

(5) 「げに、いづれか狐なるらん。ただはかられ
たまへかし」(一五四頁)

(6) 新編全集の頭注によると、「河原院は、六条坊
門の南、万里小路の東にあつた。左大臣源融
(八二二、九五)が陸奥塩釜の景を移して造
つた後、宇多法皇に献上、皇室御領となる。
種々の古記録によれば、延長四年(九二六)
六月二十五日、融の亡霊が現れた。十世紀中
ごろには荒廃していた」とする。

(7) 門前眞一氏「夕顔の巻の構成と、もののけの
正体」(『源氏物語新見』一九六五年三月)で
は、

I わたくしが(あなただつて自分でさう
考へられるでせう。)大變すばらしく立

派だと、見申上げてゐる方を心をとめて親切にたづねようとお思ひにならな
いで、こんな格別なこともない平凡な
人をつれて来て御寵愛なさるのは大変
心外でつらいことです。(あなた方もさ
う思つてをられることです。)

II

わたくしがあなたを大変立派なお方だ
とお慕ひ申し上げてゐますのに、たづ
ねても下さらないでこんな格別なこと
もない人を……(以下同じ)

と、記している。IIの口語訳の場合は、「をば」
の文法的ミスを指摘し、このような誤訳が源氏
物語の多くの注釈家によつて長く通用されて
いたのはものけの正体を最初から独断的に
生霊と決め付けた先入観であると厳しく批判
している。

(8) 一条兼良(一四〇二〜八一)によって、文明四年(一四七二)に初度本成立。

(9) 夕顔の亡き父は三位中将だったが、この時点では光源氏が夕顔の素性を知っていなかった。この時点で、住まいなどの状況から下の品だと思っ

(10) 明応三年(一四九四)頃成立。本文の引用については、『一葉抄』源氏物語古注集成第九卷(編者井爪康之)、桜楓社、一九八四年による。尚、(注10)、(注11)、(注12)に引用した本文は、引用者により濁点や区読点を補った。

(11) 三条西実隆(一四五五〜一五三七)によって、永正元年(一五〇四)第一次本成立。本文引用については、『弄花抄』源氏物語古注集成第八卷(編者伊井春樹)、桜楓社、一

九八三年による。
中院通勝（一五六六—一六一〇）によつて

慶長三年（一五九八）成立。母は三条西公
条の娘で、三条西家の源氏学の影響を受け
たのではないかと考えられる。本文の引用
に ついては、『岷江入楚』（第一巻、編者中
田武司）源氏物語古注集成第十一巻、桜楓
社、一九八〇年による。

（ 1 3 ）

江戸初期の陽明学者である熊沢蕃山（一六
一九—九一）によつて、延宝元年（一六七
三）頃成立。堤泰夫氏によれば、「源氏物語
注釈書の形式を借りて、自分の主張、即ち
儒教徳目に基づく道徳的教戒説を述べた書
であり、先行諸注を引用したり、批判した
りすることとは全く見られない」とする。

（ 1 4 ）

萩原広道によつて、嘉永七年（一八五四）

刊行。「いとをかしげなる女」の正体として妖物説の實質的提唱者である。本文の引用については、『源氏外伝』（春之巻）国文注釈全書第十三巻、すみや書房、一九六九年。『源氏物語講義』國語と國文學（東京大学言語国文学会、一九二四年）

（16）狐が美女に化けて男を誘惑する話は『日本靈異記』にも記されている。また中国の唐代伝奇小説である『任氏伝』（沈既濟著）と夕顔巻との関わりが指摘されている。新間一美の論文「もう一人の夕顔」（『源氏物語の人物と構造』笠間書院、一九八二年）参考。

（17）この考え方は『源氏物語』の夕顔巻と浮舟巻にも見られる。
・身ひとつのうき嘆きよりほかに人をあし

かれなど思ふ心もなけれど、もの思ひに
あくがるなる魂は、さもやあらむと思し
知らるることもあり（葵巻・二九〇）
かく参り来むともさらに思はぬを、もの
思ふ人の魂はげにあくがるものになむ
ありける（葵巻・三三）

かくのみものを思ほせば、もの思ふ人の
魂はあくがるものなれば、夢も騒がし
きならむかし（浮舟巻・一八八）

また紫式部と同じ時代の和泉式部の歌や伊
勢物語でも見られる。

をとこにわすられて待けるころきぶねに
まゐりてみたらしがはにほたるのとび待
けるをみてよめる 和泉式部

ものおもへばさはのほたるもわがみ
よりあくがれにけるたまかとぞみる

（『後拾遺集』一一六二番）

・むかし、おとこ、みそかに通ふ女ありけり。それがもとより、「こよひ夢になん見え給ひつる」といへりければ、おとこ、思ひあまり出でにし魂のあるならん夜ふかく見えば魂むすびせよ

（『伊勢物語』一一〇段）

このように自分の身体から魂が遊離するという考え方、つまり生霊信仰が当時広く流布していた事が文学の中から窺える。

（18）朝顔巻四九一〜四九六頁参照。

（19）若菜下巻二〇八〜二一七頁参照。

（20）『源氏物語Ⅲ』（日本文学研究資料叢書）有精堂、一九七一年一〇月

（21）「なにかしの院」について次のように記述してある。

五条よりそのわたりちかきなにかしの
院とあれは也六条坊門万里小路坊門南
万里小路東相_ニ叶京極御息所先蹤_一歟
彼院左大臣融公旧宅也又号六条院後_ニ宇
多院御跡也延喜御記云此日参入六条院
此院是故左大臣源融朝臣宅也大納言
源朝臣奉_ニ進於院_ニ
（22）「むかし物かたりなとにこそかゝる事はきけ
と」について『江談抄』から引用した記述
が次のようである。

寛平法皇与京極御息所同車渡_テニ河原院_ニ
歴_キニ覧_ラ山川形勢_ヲ一入_レ夜月明_{ナリ}令_テ取_ニ下_サ

御車ノ 疊ヲ 仮カリニ為ニ 御座ト 一 与ニ 御息所 一 被レ 行ニ
 房内術ヲ 一 之間 開ニ 塗籠ヌリコメ之戸ヲ 一 有ニ 出 声 一 法
 皇令レ 問給 对云 融候 欲ヲモフレ 賜ントニ 御息所ヲ 一 法
 皇答テ云ハク汝チ在 生之時 為ニ 臣下 一 我 為ニ 天子
 一 何得レ 出ニ 此語ヲ 一 乎 早可ニ 退シリソケル 歸 一 者 靈レイモツ物
 抱ニ 御息所 御腰ヲ 一 半死ハヌ 前駟等 皆候スニ 中門
 外ニ 一 御声 不レ 可レ 及レ 達タツスルニキウ 牛童 頗スコフル 近 侍 喰カフニ
 御牛ヲ 一 召テニ 件 牛童ヲ 一 令レ 召ニ 人 々ヲ 一 差サシヨセテ 寄ニ

(2 3)

御車ヲ - 令レ 乘ヲハシメス 御息所 顔色無レ 之不レ 能
= 起立リウニ - 之扶タスケ 抱ケレテ 乘還 御之後 召テ = 淨藏 大法
師ヲ - 令ム = 加持 - 譏ワツカニ 蘇生セイト 云々 法皇 依テ = 先世
之行業ニ - 為リ = 日本之帝王 - 雖トモ 避サルト = 宝位ヲ -
神祇奉ニ 守護シ - 追ヲヒ = 退融 靈ヲ - 也 件ノ 戸ノ 面ニ 有ニ
打物跡 -
物語の形式による文芸評論書ともいうべき
作品である。現存する文芸評論書としては
最も古く、特異な物語的構成は『大鏡』や
『宝物集』の場合と類似している。成立年
については、建久九年（一一九八）以降建仁二

年（一・二〇二）説がおよそ妥当な見解とされていたが、最近では、更に正治二年（一二〇〇）以降建仁元年に絞って推定する説もある。（岩波書店『日本古典文学大辞典』による）

（24）「夢などにいとたまさかに見え給ふ時などもあり。同じさまなる女など、添ひて見え給へば、名残心地悪しく悩みなどしければなほ世に亡くなり給ひにけるなめりと思ひなるもいみじくなむ」（九〇頁）

（25）『日本の幽霊』（中央公論社一九七四年）、『はだか源氏』（講談社、一九五九年）参考。

（26）「源氏物語に表れたる物の氣に就いて」（國語と國文學、一九二五年）

（27）「物怪の精神分析」（『源氏物語事典』）春秋社刊、一九六四年。

(28) 秋山虔他二名編『講座源氏物語の世界』(第一集)有斐閣刊、一九八〇年。

(29) 『源氏物語の探究』(第八輯)風間書房刊、一九八三年。

(30) 「夕顔怪死事件について一考察」(『源氏物語の形成』)桜楓社、一九七二年九月

(31) 正編の十四例は次の通りである。

① 夕顔巻(二三八頁)..いとをかしげなる女
おのがいとめでたしと見たてまつるをば

② 若紫巻(二〇七頁)..尼君(若紫の祖母)
おのがかく今日明日におぼゆる命をば、
何とも思したらで

③ 葵巻(二五頁)..話し手
おのが顔のならむさまをば知らで笑みさ
かえたり。

④ 須磨巻(二一一頁)..明石入道

故母御息所は、おのがをぢにものしたまひし按察大納言の御むすめなり。

⑤ 滯漂巻（三〇八頁）..（話し手）光源氏

おのが心をやりてよしめきあへるも疎ましう思しけり。

⑥ 蓬生巻（三四三頁）..話し手

おのが身々につけたるたよりども思ひ出でて

⑦ 胡蝶巻（一八二頁）..光源氏

ませのうち根深くうゑし竹の子のおのが世々にや生ひかわかるべき

⑧ 藤袴巻（三三六頁）..光源氏

おのが心に任せんことはあるまじきことなり

⑨ 真木柱巻（三五八頁）..式部卿宮

おのがあらむこなたは、いと人笑へなる

さまに従ひなびかでも、ものしたまひな
ん

⑩ 真木柱巻（三五五頁）.. 光源氏

おのがものと領じはてては、さやうの御
まじらひも難げなめる世なめり。

⑪ 真木柱巻（三七〇頁）.. 式部卿宮

おのがあらむ世の限りは、ひたぶるにし
も、などか従ひくづほれたまはむ

⑫ 真木柱巻（三八〇頁）.. 光源氏

おのが心ひとつにもあらぬ人のゆかりに、
内裏にも心おきたるさまに思したなり。

⑬ 若菜下巻（一七四頁）.. 話し手

酔ひ過ぎにたる神樂おもてどもの、おの
が顔をば知らで、おもしろきことに心は
しみて、

⑭ 夕霧巻（四七一頁）.. 花散里

(3 2)

さかしだつ人の己が上知らぬやうにおぼえはべれ」とのたまへば、続編の一二例は次の巻にある。

① 竹河巻 (七五頁) ② 椎木巻 (二〇七頁)

③ 総角巻 (三二八頁) ④ 早蕨巻 (三四二頁)

⑤ 東屋巻 (六八頁) ⑥ 浮舟巻 (一二八頁)

⑦ 浮舟巻 (一七二頁) ⑧ 浮舟巻 (一七四頁)

⑨ 蜻蛉巻 (二三八頁) ⑩ 手習巻 (二四七頁)

⑪ 手習巻 (二八四頁) ⑫ 手習巻 (三〇八頁)

(3 3)

浮舟に現れた美しい姿をした男の言葉を引用すると、「いざたまへ、おのがもとへ、と言ひて、抱く心地のせしを」(手習巻・二九六頁)である。

第五章

歴史物語における物の怪

一 はじめに
延暦十三年（七九四）桓武天皇は長岡京から平安
京へ遷都し、平安時代は幕を開ける。遷都の理由は
奈良仏教の勢力から距離をおくこと、貴族を土地か
ら切り離すことなど、さまざまなことと考えられる。
その一つに怨霊の恐怖から逃れることがあつたらう。
その暗部には政治的権力闘争による暗殺事件や謀反
によつて非業の死を遂げた人が多くいた。桓武天皇
は、廃后井上内親王（光仁皇后）と廃太子他戸親王
の崇りから逃れるかのようになり、天皇に即位後平城京
から長岡京へと都を移すところがあり、長岡京造営監
督中の藤原種継（藤原式家）の暗殺事件に巻き込ま
れた皇太子早良親王が廃太子となり、淡路に移送さ
れる途中亡くなつた。桓武天皇の子安殿親王（平
城天皇）は病弱で病気がちだつたが、それを神祇官
に占させ、病弱で病気がちだつたが、それを神祇官
に占させ、病弱で病気がちだつたが、それを神祇官

であつた。これについて『日本紀略』は、「癸巳。皇太子久病。ト之崇道天皇爲祟。遣諸陵頭調子王等於淡路國、奉謝其靈。」(『日本後紀』卷一逸文)と、記している。また、天然痘(裳瘡)が広く流行し、多くの民が亡くなつたため、民衆の間で怨霊の崇りを鎮める祭を行なう御霊信仰が深まっていた。⁽¹⁾桓武天皇はやがて、長岡京廃止を決意し、今の京都である平安京へと遷都する。しかし、怨霊の崇りから逃れることはできず、国家行事として御霊会が神泉苑で行われる。⁽²⁾このように、政治上の混乱は怨霊を生み、その怨霊の崇りとともに平安時代は始まる。そして平安中期に行くと、藤原氏の権力争いが激化し、怨霊の崇りが物の怪という名の下で発動して行く。

本稿の第二章にも述べたように、古代の怨霊発動

については、歴史上の人物を何人か挙げている。本章では、史実を基にした歴史物語の人物を中心に、平安時代を代表する怨霊（物の怪）について考察する。特に、『栄花物語』と『大鏡』で多く登場する菅原道真と藤原元方、藤原顕光の執念深い崇りについて検討する。

二 菅原道真の怨霊

平安時代初期の怨霊として、また天神としても有名な菅原道真はどのような人物であったのか、また清涼殿落雷事件と関わる道真の怨霊の出現についても考察する。

菅原道真は、承和十二年（八四五）文学博士である。菅原是善の三男として誕生、恵まれた教育を受けながら育てられる。道真は早くも十八歳で式部省試に登科し、菅家三代にわたる文学博士の勤めを経て、

仁和二年（八八六）道真四十二歳の時、讃岐国の
 守に任じられる。その頃宮中では、仁和三年（八八
 七）源姓を賜って臣籍に降下した光孝天皇の第七皇
 子である源定省（後に宇多天皇）が親王に復し、翌
 日皇太子に立てられ、光孝天皇が崩御するまでの、
 わずか二日間であつた。道真は、
 この立太子と同時に即位した宇多天皇の信任を得て、
 ようやく昌泰二年（八九九）右大臣に任じられる。
 同日、ライバルである藤原時平は左大臣となる。
 『源氏物語』の桐壺巻に言及されている宇多天皇
 の『寛平御遺戒』は敦仁親王（後に醍醐天皇）への
 譲位に際して、新帝醍醐天皇に与えた訓戒書で、道
 真と時平を重んじて二人の輔弼に従うようにと書か
 れている³。その内容は、時平に対することより道真
 に対することがおよそ四倍も多いことから、宇多天

皇がいかにかに道真のことを大事にしたのが窺える。
 当時の政治を動かしていた藤原氏にとつては異例の
 出世を重ねる道真の存在が疎ましかつたであらう。
 時平は、宇多法皇の第三皇子である齊世親王の妃が
 菅原道真の娘であることを利用して、道真が醍醐天
 皇を廃し、天皇の異母弟である齊世親王を帝位に就
 けようと画策している」と讒言する。その内容は『政
 事要略』⁽⁴⁾ 卷廿二に次のように記している。

右大臣菅原朝臣寒門与利俄尔大臣上收給利。而
 不知止足之分。有專權之心。以佞諂之
 情一欺二惑前上皇之御意。然乎恐二慎上皇之御情
一天萬奉行。无三敢怒二御情一天。欲下行二廢立一離
二間父子之慈一淑中皮兄弟之愛上。詞者辞比順天者之
 心者逆。是皆天下所レ知奈利。(年中行事八月)

醍醐天皇がいくら道真を時平より信任し、格別に
たとしても、このことを聞いた以上、そのま
てはいられなかつたろう。結局、時平の陰謀で道
真は昌泰四年（九〇一）太宰権帥に左遷され、筑紫
国に配流となる。道真の左遷を知つた宇多法皇は急
遽、醍醐天皇に面会するため、内裏に駆けつけたが、
門前に座つたまま一日が過ぎても内裏の門は開くこ
とはなかつた。道真はひと夏の夢のようになり、大
いふ栄光の座から、いきなり罪人に落とされ、配所
では廃屋のようにな官舎に住まわされ、過酷で屈辱
的なたげによつて道真はたまらない怨念の情を募ら
せたかも知れない。『北野天神縁起絵巻』には、太宰
府に流された道真が、自分の無実を訴える祭文を山
上から天帝に捧げている絵があるが、この祭文が空
を飛んで、梵天に到達したと語つてゐる。道真の訴

えは、時平と醍醐天皇の不当を訴えるものである。
そんな配所での生活が始まった道真は、『菅家後集』
に自分の無実を訴える詩文三十八編を作つて紀長谷
雄に贈つたが、無念にも延喜三年（九〇三）五十九
歳の生涯を閉じてしまふ。ところが、道真の死で終
わらず、政治の陰謀による怨みと怨霊となつて崇つ
ていく。道真を讒言し、流罪にさせた藤原時平が、
延喜九年（九〇九）病に伏してしまふ。その時、三
善清行の息子浄蔵法師が物の怪調伏のため加持祈
禱を行なうが、そこに道真の怨霊が青竜となつて時
平の左右の耳から現われる。これにたいして『扶桑略
記』には、「菅丞相の霊、白昼顯形す。左右の耳より
青竜出現す」と記している。また『北野天神縁起絵
巻』からもその様子が見られる。このように、道真
の怨霊が時平に憑いて病を起こし、結局三十九歳の

若さで亡くなつてしまふ。
しかし、時平が最初に崇られたとは、厳密にはい
えない。延喜八年（九〇八）十月、参議従四位上藤
原菅根が雷に打たれて五十四歳で亡くなる。この時
は、まだ当時の人々は道真の怨霊を意識しなかつた
ようだ。「北野聖廟縁起絵」では、「菅根卿はあられた
に神罰を蒙て、その身はうせにけり」と、神罰で亡
くなつたと記している。藤原菅根は藤原南家で、村
上天皇の時代に怨霊として有名な藤原元方の父であ
る。また道真に薦められて昇進して来たのに、道真
の左遷を止めようと宇多法皇が内裏に参内した時、
内裏の門前で阻んだ人物である。道真から見ると、
肝心なところでは味方になつてくれない裏切り者とい
うことになる。う。

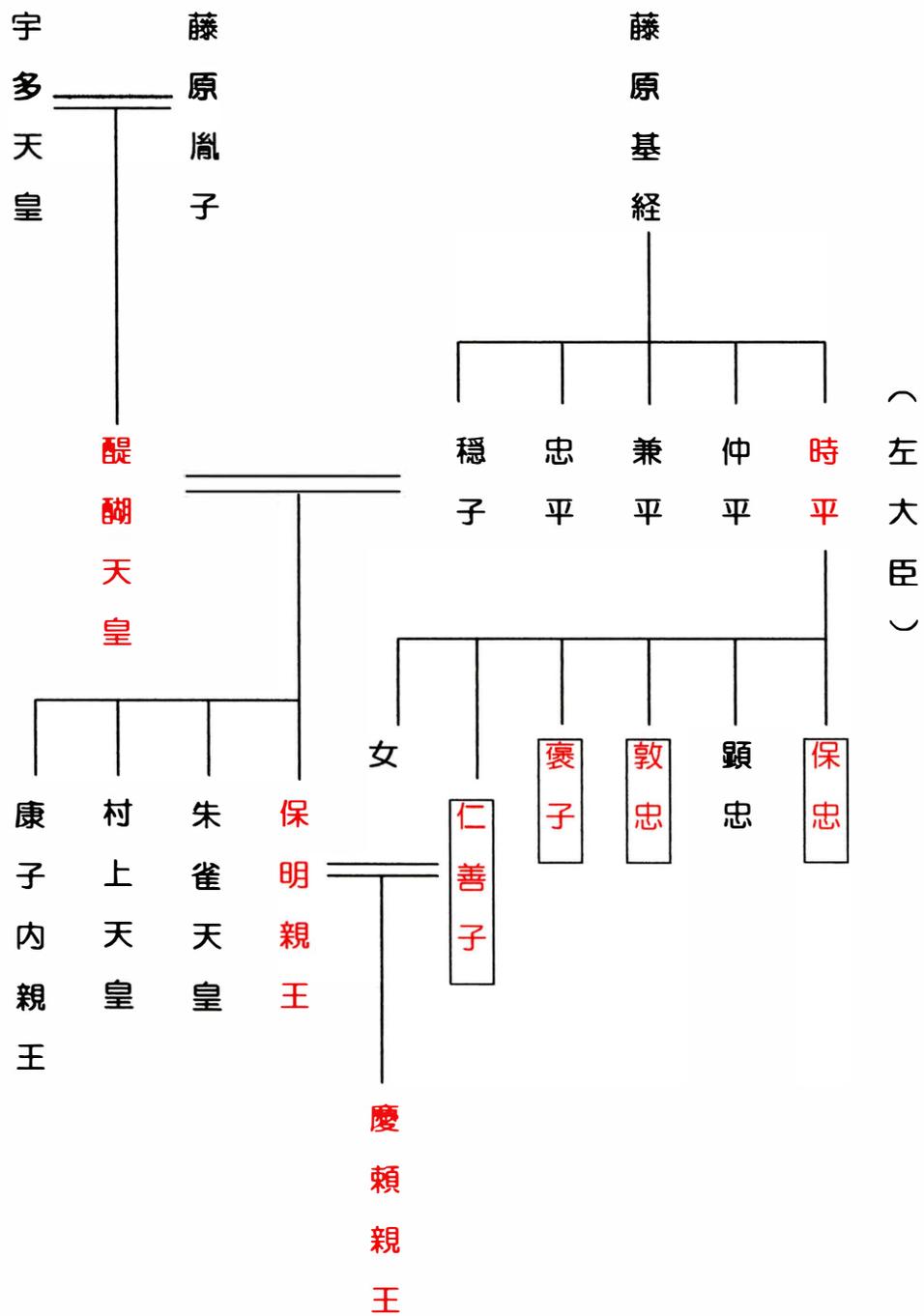
源光の不審死など、怪異が続く中、左大臣時平の血

統を継ぐ、皇太子保明親王が二十一歳という若さで死去してしま⁽⁵⁾う。この保明親王の母は時平の妹藤原の穩子である。道真の崇りを恐れた醍醐天皇は、道真の怨霊の鎮魂のために、道真死後二十年が過ぎた延喜二三年（九二三）、菅原道真を本官の右大臣に復し、正二位を贈位した。また左遷の宣命を破棄するなどその名誉を回復させた。さらに、延喜から延長へと改元もした。

（九二五）皇太子慶頼親王（母は時平の娘）も夭折する。そして、延長八年（九三〇）六月、清涼殿に落雷があった。大納言藤原清貫が胸を焼き裂かれて死亡、右中弁平希世は顔が焼きただれ伏し、また右兵衛佐美努忠包は髪が焼けて死んでしま⁽⁵⁾うなどの

事件が起こる⁽⁶⁾。この清涼殿落雷事件でシヨックを受けた醍醐天皇は体調を崩し、同年九月、寛明親王⁽⁷⁾（後に朱雀天皇）に譲位、七日後、四十六歳で崩御する。この落雷事件が道真の怨霊を火雷神ともみなされる契機となったのであろう。

このように、道真の死後、宮廷では不吉な出来事が頻繁に起こったことから菅原道真の怨霊の仕業である⁽⁸⁾と信じられた。また、『松崎天神縁起絵巻』には、醍醐天皇が地獄に堕ちて苦しんでいる様子の絵があり、当時の人々が道真を追い落とした醍醐天皇について地獄で苦しんでいると認識していたろう。道真の怨霊は時平だけではなく、その子孫まで崇めて行く猛威さを次の系図から確かめてみよう。



宇多天皇



橘義子

齊世親王

菅原是善——道真

(右大臣)



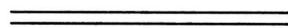
衍子

(宇多女御)

淳茂

高視

女



囲み線

赤文字

物の怪による死
短命(早死)

以上のように、道真の怨霊は自らの政治生命を絶たれたことによつてその政敵の一族に次から次へと祟つたと思われる。またこれによつて宮廷では不吉な出来事が起こると、道真の怨霊の仕業として認識され、その怨霊の発動によつて混乱と恐怖におびえることになつた。

三 藤原元方の怨霊

『栄花物語』の中で最も政治的怨念が色濃く、執念深く、天皇家と藤原北家である師輔一家を崇つていく藤原元方（藤原南家）の怨霊について考察する。当時の貴族社会にとつて娘を大事に養育し、天皇に入内、中宮にさせることが最高の望みであつた。それは天皇の外戚として政治的権力が保証されることと同じであるからだ。元方も大事に育て来た娘祐姫を村上天皇に入内させていた。当時の政治的実

権を握っていた師輔も娘安子を入内させ、安子はやがて中宮となった。ところが、中宮安子が生んだ子は師輔が期待した皇子ではなく、皇女（承子内親王）であつた。しかも四歳で亡くなつてしまふ。その頃、元方の娘祐姫に念願の皇子が生まれたのである。この皇子が村上天皇の第一皇子広平親王である。元方は「東宮はまだ世におはしまさぬほどなり、何のゆゑにか、わが御子、東宮に誤ちたまはんと、このころ大變喜び、期待がふくらんだのに違ひない。このころ師輔の娘中宮安子も懐妊したので、第一子の期待外れの皇女誕生と早死の件があつたので、元方はあまりにしていなかつた。ところが、広平親王誕生と同じ年である天曆四年に村上天皇第二皇子となる憲平親王が誕生する。さらには、二か月で東宮のとなつた。安子より祐姫が先に入内し、村上天皇の

第一皇子を産んだのにも関わらず、当時権力のトツプにいた師輔が後見する、憲平親王が皇太子となつたのである。この時の元方を『栄花物語』では、次のように描写している。

元方の大納言かくと聞かぬに、胸ふたがる心地して、物をだにも食はずなりにけり。「いとみじく、あさましきことをも、し誤ちつべかめるかな」と、もの思ひつきぬ胸をやみつ、病づきぬる心地して、同じくは今はいかで疾く死なんとのみ思ふぞ、けしからぬ心なるや。

(巻第一「月の宴」二六頁)

娘の入内や第一皇子の出産によつて、政治的権力を期待していた元方に思ひもよらず、権力は藤原師輔の期にわたつてしまつた。右の傍線部は、東宮に對

して呪詛をするかも知れない元方の思いが語られて
いる。ところか、『大鏡』では、「やがて、胸に釘は
うちてき」と、師輔の人形を作った胸に釘を打ち込
んで呪いをかけたと記している。当時の政争の悍ま
しさを描くことは、虚構の物語といおうジャンルを利
用した歴史物語にみえる特徴ではなからうか。それ
ほど、娘の入内や皇子出産はその一族の繁栄につな
がる重大なことであった。元方はこの政治的失望か
ら胸が詰まるような気持ちになり、食物のどに通
らないほど、悲しみに落ち込んでいた。さらに、元
方は早く死ぬことだけを望む日々を送っていたのだ。
その間、村上天皇の後宮では御息所や更衣によって
皇子が九人、皇女が十人お生まれつた。元方の喜びで
あった広平親王が生まれて四年、つまり東宮憲平親
王が四歳になつた天曆七年三月に元方は亡くなる。
また、その後を追うようにして村上天皇の第一皇子

広平親王とその母祐姫も亡くなってしまった。これで歴史から藤原元方の姿は消えてしまったわけだが、彼らの無念を思う人々によって、死んだ後も政争で負けたその怨みから怨霊となつて、天皇家に崇つて行くといふ話になる。中宮安子が生んだ東宮憲平親王（後冷泉天皇）にその崇りを向ける。

東宮いとたてき御物の怪にて、ともすれば御心地あやまりしけり。いとほしげにおはしますをりありけり。さるは御かたちつくしうきよらにおはします。ことかぎりなきに玉に瑕つきたらんやうに見えさせたまふ。（中略）御けはひ有様、御声つきなど、まだ小さくおはしまし人の御けはひと見えきこえず、まがまがしうゆゆしう、いとほしげにおはしましけり。

（巻第一「月の宴」三十四頁）

帝、例の心地におはしますをりは、先帝にいとよう似たてまつらせたまへり。御かたち、これは今すこし勝らせたまへり。あたら帝の御物の怪いみじくおはしますのみぞ、よに心憂きことなる。（巻第一「月の宴」六十二頁）

『栄花物語』では冷泉天皇（憲平親王）の狂気について、容姿が可愛らしく気品高いが、もののけに取り憑かれたことだけが玉に瑕のついたかのようひどくせつないと気の毒さを強調している。現代冷泉天皇の異常行動について服部敏良氏は、現代医学的視点から解明している。¹⁰⁾服部氏によると、冷泉天皇の二十歳から約三十年間の間はものけ憑依

らしき行動が明らかではないので、異常行動を第一期と第二期に分けて病名を診断している。第一期は、「顔、形、声等が常人と異なっていた」こと、「七、八歳のころ天皇への消息に男子の性器を画いた」こと、「清涼殿の屋根に上って坐御した」こと、「足に怪我をしながらも梁の上に鞠をとめようと熱中した」こと、「また、「即位して間もなく高声で歌を歌った」こと、「天皇の御璽の篋を開けようとした」こと、「道長の邸宅を脂燭をもって焼こうとした」ことなどから、「早発性自閉症に基づく精神分裂症」と推定していた。続いて第二期では、「天皇が髪をふり乱して宮廷を出、泥土に平伏す」こと、「宮殿が火事に遇って命からがら脱出しながら、火事の火を燎火とみて神楽歌を歌った」こと、「全身浮腫を帯び命旦夕にせまりながら、大声をあげて歌を歌った」ことなどから、第一期幼時より早発性自閉症を基とする「症

候性精神病」と推定していた。その反面、幼少年期と老後の行動だけで精神異常者と判定するのは難しいと言葉を加えている。しかし、当時はこのような医学的知識がなかったもので、精神異常に関しては物の怪（怨霊）の仕業として考えるのが普通であった。元方の祟りは冷泉天皇を狂気にさせるだけではない。ライバルであった師輔の娘中宮安子にも向けられた。中宮安子が七回目懐妊をした時、病気になる、加持祈禱をひっきりなしに行なっていた。この頃、村上天皇は元方のものをけを意識して、中宮安子がいる里邸に退出していた。為平親王に元方の死霊が取り憑くのではないかと心配する。憲平親王に続いて中宮安子にも執念深い元方の怨霊が取り憑き、さまざま耳かましきまでの御祈りども」の効験もなく、「御物の怪どもいと数多かるにも、かの元方の大納言の霊いみじくおどろおどろしく、いみじきけ

は、その明まつ庚へ、憑き、くごるいと、は
 一、のけつ申藤元、き、効不時、る、ひ
 な、まがての原方、き、験例節、う、中
 ほ、また眠日兼の、崩御させ、なく、で、も、ち、宮、て、
 こ、亡であらな、あ、家、の、崇、り、は、こ、こ、で、止、ま、ら、ず、
 れ、く、ある、い、た、た、の、に、崇、る、の、で、あ、る、
 も、な、た、た、め、に、さ、ま、ざ、ま、の、途、中、で、寝、入、つ、た、冷、泉、院、
 か、つ、超、子、は、遊、び、の、途、中、で、寝、入、つ、た、冷、泉、院、
 の、て、子、は、遊、び、の、途、中、で、寝、入、つ、た、冷、泉、院、
 御、し、ま、は、遊、び、の、途、中、で、寝、入、つ、た、冷、泉、院、
 物、つ、た、び、の、途、中、で、寝、入、つ、た、冷、泉、院、
 の、た、の、途、中、で、寝、入、つ、た、冷、泉、院、
 し、こ、途、中、で、寝、入、つ、た、冷、泉、院、
 つ、れ、を、聞、い、た、冷、泉、院、
 る、を、聞、い、た、冷、泉、院、
 と、聞、い、た、冷、泉、院、
 ぞ、い、た、冷、泉、院、
 一、た、冷、泉、院、
 と、冷、泉、院、
 、泉、院、
 元、院、夜、集、に、子

方（12）の仕業であると思う。
 これ以外にも、円融天皇に憑依したり、また花山
 天皇にも憑依して讓位を考へさせる。結局、花山天皇
 は突然姿を消し、花山寺で出家をする。花山天皇
 に取り憑いた物の怪にまついて「榮花物語」は、「冷泉
 院の物の怪のせさせたまふなるべし」と、元方の怨
 霊の仕業であるとする。このように、元方の怨霊は
 天皇五代にわたつて崇りをなす。それでは、元方の
 崇りを左の系図で再確認してみよう。
 崇り
 を左の系図で再確認してみよう。

右の系図を見ると、元方の怨霊に崇られる五人の天皇はすべて師輔を外戚とし、一族の一員である。元方の執念深い怨念が師輔一族の繁栄を阻止しようとする、当時の物の怪を代表する怨霊であつたことが分かる。

四 藤原顯光と延子の怨霊

藤原元方の次なる怨霊（物の怪）として有名な人物は、平安中期の貴族藤原顯光である。顯光は死後、「悪霊の左府」（『宝物集』）と呼称されるほど、道長系を崇つていく。その藤原顯光は天慶七年（九四四）関白兼通と昭子女王の長男として生まれる。また一条・三条・後一条に仕え、二十六年間大臣として、二人の娘元子と延子をそれぞれ一条天皇と敦明親王（小一条院）に入内させている。普通なら右大臣の座に上り、一面幸せの絶頂ではないかと思われるが、

当時の権力は藤原道長が握っていて、顕光の栄華は道長の蔭に隠れて不幸な出来事が現われ始める。堀河大臣と呼ばれる顕光は、長女元子（承香殿女御）を一条天皇の後宮に入れるが、分娩に異常があり、多量の水を生んでしまう。『栄花物語』では、この時の顕光の心境を次のように記している。

七日病むといふらむやうに、あさましういみじきに、搔膝といふことをさせたまひて、空を仰ぎて、夢さめたらむ心地してゐさせたまへり。（巻第五「浦々の別」二九〇頁）

期待していた孫ではなく、水をいっぱい流すだけで終わった元子の出産に落胆状態の顕光を表わして、それに対して、道長は彰子を一条天皇に、敦成親王（後一条天皇）を生み、翌年には

まい、延子は「胸塞がりて、つゆ御湯をだに参らで
臥し、ている悲しい日々を過ごす。「愚管抄」では、
顕光が道長を恨んで悪霊となり、一夜で白髪となっ
たと伝える。やがて、延子は悲しみの余り寛仁三年
（一〇一九）息絶えてしまふ。延子の死から二年後
の治安元年（一〇二二）、顕光は七十八歳で亡くなる。
子を思う親の心が怨霊となつて道長一家に崇つて行
く。道長に対する顕光と延子の怨霊はまず、小一条院
の母である城子と婿取りした道長の娘寛子に取り憑
いて苦しめるのである。これによつて、小一条院の母
始まりであり、また、寛子も万寿二年（一〇二五）二十
七歳で亡くなり、なつてしまふ。

御物の怪どもいといみじう、「し得たり、し得

たり」と、堀河の大臣、女御、諸声に「今ぞ胸
あく」と叫びのしりたまふ。

（巻第二十五「みねの月」四八二頁）

寛子が死んだ時、顕光と延子の怨霊が現われ、これ
で怨みを晴らし、気分がすっきりしたと大声を上げ
て叫ぶ。しかし、これで崇りが終わったのではなく、
次に寛子の妹である尊子にも取り憑き、苦しめる⁽¹⁴⁾。
次に寛子の相手が、道長の娘で、敦明親王が東宮の
位を譲った敦良親王の女御嬉子である。嬉子が懐妊
中に赤裳瘡（赤疱瘡・赤斑瘡）に罹ったが、まもなく
くして治り、出産に挑む。しかし、親仁親王（後冷
泉天皇）を出産後、顕光と延子の怨霊によつて十九歳
の若さで亡くなる。嬉子への崇りは、恐ろしくも予
告されたことである。嬉子への崇りは、恐ろしくも予

院は、女御の御悩みのをり、堀河の大臣の、「督
の殿の御産屋にかならず参りて見たてまつら
んとありしを、人知れずつねに恐ろしう思し
出でさせたまふ。

（巻第二十五「みねの月」四九一頁）

寛子の病気の折、顯光と延子の怨靈が嬉子の出産に
必ず見に来るという予告であつた。これを思ひ出し
た小一条院は、自分の周囲に顯光と延子の怨靈が現
われ、の当然のことであると思う。その思いとは
別に、道長の娘で東宮敦良親王の妃尚侍である、嬉子
に顯光と延子の怨靈が崇りをなすことにいついて、道
長が婿である自分のことを不快に思つているのでは
ないかと心配する。嬉子は無事親仁親王を出産する
が、三日後僧侶の加持も空しく亡くなる。この時、

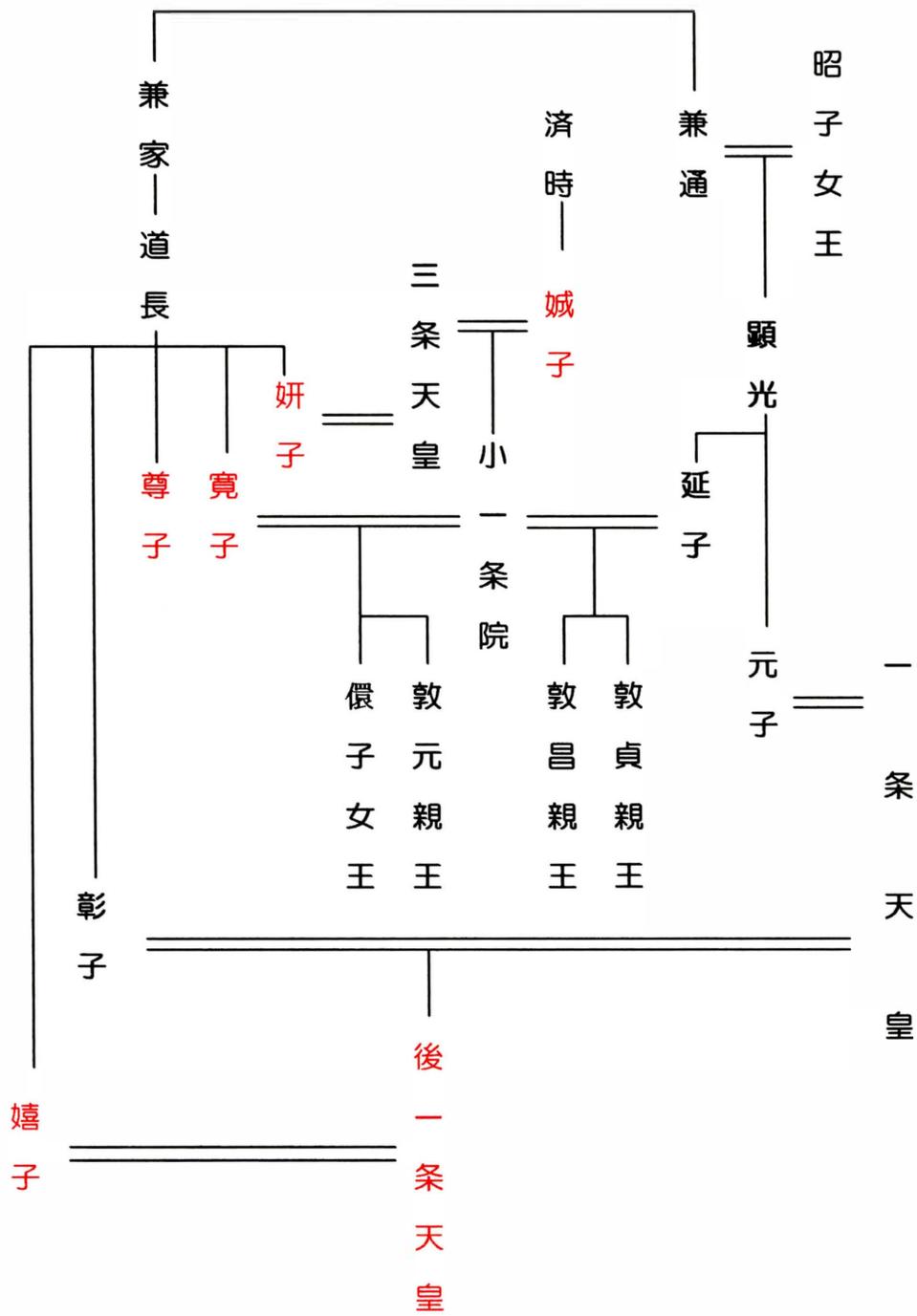
嬉子の魂魄を呼び戻すために上東門院の東対の屋上で嬉子の衣服を振る招魂の法を行なった記事が『栄花物語』⁽¹⁵⁾や『左経記』⁽¹⁶⁾や『小右記』⁽¹⁷⁾に記されている。この中で、『小右記』の作者藤原実資は「近代不_レ聞事也」と、当時、嬉子の魂呼びの呪法は一般に行なわれた死霊の招喚法とは違うことであつたことが窺える。次は、道長の娘で、三条天皇の中宮妍子に取り憑き、病気にさせる。道長は「宮の内のはさるものにて、四方の山々寺々、数をつくす御祈り」を行なうが、結局、三十四歳で亡くなつてしまふ。なお、妍子の加持祈祷に現われた物の怪は顕光と延子の怨霊だけではなく、嬉子の霊も現われる。嬉子は前掲したように東宮敦良親王（後朱雀天皇）の女御であつたが、親仁親王を生んで亡くなつた人物である。

し、かし、何故、妍子に取憑いたのである。か。妍
子は自分の娘、内親王を敦良親王へ、後朱雀天皇へ
に入させ、たので、顯光と同じく子を思う親の心が
嬉子の息子親仁親王の未來を思い、守護靈として現
われたといふようにも考えられる。このようにな想定
外の人物の憑依についで、当時どのよう解釈され
たかは、いずれ稿を改めて考察した。人物は、後
一條天皇に顯光と延子の怨靈が取り憑いた。孫で、一條天
皇と彰子中宮の息子である。

御物の怪ども移りてのしるさまいと恐ろし。
例の堀河左大臣殿、女御殿具したまひて出でお
はし、さらぬものさまざま名乗り、いと苦しき
御心地云々（巻第三十二「譚合」二五八頁）

後一条天皇の病気に現われた物の怪は、またしても
顯光と延子の怨靈であつた。天皇は長元九年（一〇
三六）二十九歳で亡くなつてゐる。

左の系図からも分かるように、顯光と延子の怨靈は、
藤原道長の娘寛子、尊子、嬉子、妍子の四人と、孫
後一条天皇に取り憑き、病に苦しめ、死に至らす恐
ろしい祟りをなす怨靈である。



また『大鏡』(伊尹伝)では、藤原顕光のことを「悪
 霊の左大臣殿」と伝えていゝところ、顕光と延
 子の怨霊は何故、怨みを持つていゝ道長に祟りをし
 ないで娘たちと孫に祟りをなしたのか疑問が残る。
 『源氏物語』の光源氏のモデルとして何人かの人物
 を挙げられるが、その中で藤原道長がモデルだとい
 う説がある。物語では光源氏の最愛の女君たちに六
 条御息所の人物の怪が現われ、苦しめていゝ。何故、
 光源氏その人に祟りが現われないで、光源氏の最愛
 の女君たちには祟りが現われないのである。それは『源
 氏物語』の本文に六条御息所の言葉に答えがある。

この人を、深く憎しと思ひきこゆることはな
 けれど、まもり強く、いと御あたり遠き心地し
 てえ近づき参らず、御声をだにほのかになむ聞
 きはべる。(若菜下巻・二三七頁)

紫の上の危篤状態に、女三宮の病気のところから無
我夢中で戻って来た光源氏の前に六条御息所の死霊
が現われる。光源氏の最愛の女紫の上に取り憑いた
理由は、紫の上が憎いからではなく、光源氏には「ま
でもり強く」、つまり仏神の加護が強くて近づくことが
できないなかったと言う。藤原道長は摂関家に生まれな
がら、兄やその子供たちの存在で、通常ならば出世
もおぼつかない立場だった。それが、むろん本人の
努力もあつたらうが、希にみる強運の持ち主で、権
力を掌握した。藤原道長の娘彰子中宮に仕えていた
紫式部は、光源氏の人物像に道長の強運な面も取り
入れているのではないかと考えられる。また、藤原
道長の栄華を描いた『栄花物語』を始め、当時、最
高の権力を握っていた道長に関する記録は超人的な
ところを強調した。顕光と延子の怨霊が直接道長を

つるを発大いおら
 ま師天動臣てい藤以五
 り輔神す藤原述の顕上、ま
 元と神とる原へ物の光菅と
 方の南し。時平の来たの親子道真の怨霊と藤原元方
 の家で祀のの謀略によつて宇多、醍醐朝に怨霊の祟り
 怨霊あることは史実でも恐れられ、藤原北家で
 発元方とのなる。争いは、負けた側、
 動方のなる。争いは、負けた側、
 さの権力。争いは、負けた側、
 せる。争いは、負けた側、
 。争いは、負けた側、
 最後は、負けた側、
 は、負けた側、
 同じた側、
 藤原、

て怨よが崇
 歴靈つでら
 史たてきな
 物ち間なく
 語も接く、
 のまたなそ
 中で、苦し代は、
 機能長のをり、
 しの与、
 て偉え彼の
 いたさをと娘が
 のを証明由を
 である。する装
 。る装置とい
 し。に

込む平安以前
の神の崇
りに比べ
れば、平
安中期に
なる
入む平安
以前
の神の崇
りに比べ
れば、平
安中期に
なる
を、怨霊
の祟り
の範囲
が狭く
なっ
て、その
一族に
祟り
をなす
とい
う
祟り
の
範囲
が
狭
く
な
っ
て
い
る
特
徴
が
見
え
て
き
た
。

注

- (1) 『続日本紀』延暦十年九月十六日条によると、
「伊勢・尾張・近江・美濃・若狭・越前・紀
伊などの国々の人民が、牛を殺して漢神に捧
げ祀ることを禁止した。」と、民衆の間で御霊
信仰としての祭が行われたことが窺える。そ
の祭に対して、国家の安寧を損ねる恐れから
禁止したのであろう。
- (2) 御霊会については、第二章の注1に同じ。
- (3) 日本思想大系『古代政治社会思想』（岩波書店、
一九七九年）の「寛平御遺誠（宇多天皇）」に
よると、道真について「右大将菅原朝臣は、
これ鴻儒なり。また深く政事を知れり。朕選
びて博士と為し、多く諫正を受けたり。よて
不次に登用し、もてその功に答へつ。」と書か
れている。しかも、醍醐天皇を東宮に立てた

時にも「朕前の年東宮に立てし日、ただ菅原朝臣一人とこの事を論じ定めき。その時共に相議する者一人もなかりき。」と道真だけに相談して決めたことが記されている。

(4)

新訂増補國史大系『政事要略』卷廿二、年中行事八月上（北野天神會）、吉川弘文館、一九三五年。

(5)

新訂増補國史大系『日本紀略後篇』（吉川弘文館一九二九年）、延長元年三月条によると、「廿一日乙未。國忌。是日也。依皇太子臥病。大赦天下。子刻。皇太子保明親王薨。年廿一。天下庶人莫不悲泣。其聲如雷。擧世云。菅帥靈魂宿忿所爲也。」と記している。

(6)

新訂増補國史大系『日本紀略後篇』、延長八年六月条によると、「廿六日戊午。諸卿侍殿上

(7)

之。各議請雨之事。午三刻。從愛宕山上。黑雲起。急有陰澤。俄而雷聲大鳴。墮清涼殿坤第一柱上。有霹靂神火。侍殿上之者。大納言正三位兼行民部卿藤原朝臣清貫衣燒裂天亡。年六十四。又從四位下行右中弁兼内藏頭平朝臣希世顔燒而臥。又登紫震殿者。右兵衛佐美努忠包髮燒死亡。紀蔭連腹燔悶亂。安曇宗仁膝燒而臥。民部卿朝臣載半部。至陽明門外。載車。希世朝臣載半部。至修明門外。載車。時兩家之人悉亂入侍。哭泣之聲。禁止不。自是天皇不豫。又自去春。至此夏。疾疫不止。と記している。

新訂増補國史大系『日本紀略後篇』、延長八年九月条によると、「廿二日壬午。天皇逃位讓於皇太子寬明親王。詔曰。左大臣藤原朝臣

保ニ輔幼主一攝ニ行政事一。内侍執ニ劔璽一。参
ニ宣耀殿一。先帝御春秋卅六。今上八。(中略)
廿九日己丑。(中略)依ニ太上皇不豫一。大ニ
赦天下一。卯刻。法皇幸ニ右近衛府一。未一刻。
太上皇崩給。」と記している。

(8) 『大鏡』時平伝(八二〇八三頁)参照。

(9) 『栄花物語』巻第一「月の宴」によると、元方
は「いで、さりとともさきのこともありき」と、
安子懐妊の噂を聞き流したとする(①―二四
頁)。しかし、『大鏡』師輔伝によると、庚申
待ちで双六をしていた師輔が「この孕まれた
まへる御子、男におはしますべくは、調六出
で来」と、投げたサイコロに六が出れば男が
生まれると自信満々に言ったのが、その通り
に、一度でその目が出た。そこで、元方の顔
は真っ青になり、機嫌が悪くなったと記して

いる（一六七頁）。

（10）『王朝貴族の病状診断』（吉川弘文館 二〇〇六年）、『平安時代医学の研究』（科学書院 一九八〇年）

（11）『栄花物語』に、「御読経、御修法など、あまた壇おこなはせたまふ。かかれどさらに験もなし。例の元方の靈なども参りて、いみじくののしるに、なほ世の尽きぬればこそ、かやうのこともあらめど、心細く思しめさる。」①（五八頁）と記しているように、元方の靈が村上天皇の病にも関わっていることが分かる。

（12）超子頓死事件については、『栄花物語』巻第二「花山たづぬる中納言」一〇七〜一一〇頁参照。

（13）承香殿女御（元子）と源頼定との密通事件

により、父顕光が元子の髪を切って尼にさせたと
たという記事がある。これについては『栄花物語』
巻第十一「つぼみ花」(②—一九—二〇頁)を参照。

(14) 尊子は寛子と同母(高松殿明子)の妹で、
父道長の命によって頼通の養子である師房
を婿取る。寛子危篤の時、妹尊子も寛子と
同じ物の怪に苦しんでいた。それは顕光と
延子の物の怪であろう。『栄花物語』巻第二
十五「みねの月」(四八三頁)参照。

(15) 『栄花物語』巻第二十六「楚王のゆめ」(五
〇七頁)参照。

(16) 増補史料大成『左経記』(臨川書店、一九六
五年)、萬壽二年八月二十三日条(一五二頁)
参照。

(17) 増補史料大成『小右記』(臨川書店、一九六

五年）、萬壽二年八月七日条（六一〜六二頁）
参照。

※本文中の『栄花物語』、『大鏡』、『源氏物語』は、
新編全集（小学館）による。

結

論

本稿では、平安文学における物の怪について五つの章を立てて考察した。第一章では、「物の怪」とは何かを探るために、中国の古文獻と照らし合わせることに、漢字表記の混同や意味の変化を探った。その結果、中国の古文獻にみられる「物怪」は「天変」、「奇怪な方術・妖術」、「奇怪な物」、つまり「怪物現象」のこととを意味している。一方、韓国では、「物怪」の語は見当たらないが、朝鮮時代の医学書である『東醫寶鑑』に「邪祟」についての記述がある。「邪祟」は『古事類苑』に「ものけ」のことと記述されている。「東醫寶鑑」によらぬ、見聞・言動するものが筋の通らない非現実的な様子である、病気のことが筋の通らない非現実的な様子である、折口信夫氏を始め、「物の怪」は怨

靈の祟りであり、その祟りによって起こる病気のこ
とも含めて「物の怪」という。ところが後になつて、
怨靈そのものを「物の怪」というようになったこと
が分かつてきた。このような物の怪の意味の変遷の
中で表記をめぐる混同が今日まで論争されている。
天変地異のことを「物の怪（恠）」だという説と、病
気を意味する「物の氣」だという説がある。これら
は物語や日記の作者が物の怪の意味をどちらに重
を置くかによるだけで、漢字表記によって物の怪の
定義が変わることはない。従つて本論では、現在一
般的に使用されている「物の怪」の表記で統一した。
このような物の怪に対して、古代の人々はどのよ
うに対応したのか。平安文学の中から、密教の僧
侶や修験者による加持祈祷と、山岳信仰がもとな
る聖、陰陽師による呪法などによって物の怪を退治

したことが窺える。特に『紫式部日記』や『枕草子』には当時の加持祈祷の凄まじさが生々しく描かれて
いる。仏の力によつて災厄を払うという加持祈祷は、
物の怪調伏に欠かせないことで、まず病氣の人がい
て、それを物の怪の仕業だと判断し、僧や修験者を
招いて祈祷を行なう。その祈祷には、憑よ坐りましという靈
媒が用意される。病人の体から靈媒者、すなわち憑
坐へ物の怪が駆り移されると、物の怪の調伏が出来
て、やがて病人の病氣は治ると信じていた。この憑
坐になる人は、物の怪が移りやすい若い童女を選ぶ。
また、病人の近くで仕えている人で、病人の悩みや
人間関係についてよく知っている人を選ぶことが、
祈祷を成功させる秘訣でもあった。

古くから存在した日本の民間信仰の基本となるシヤーマニズムは、平安時代の物の怪調伏と関連性を保持している。物の怪を名乗らせるためには憑坐（巫女）が人と物の怪の間に必要である。つまり、霊と人間の間をつなぐシヤーマンの存在が必要なわけである。シヤーマン、または巫女の役割として、古代国家では、天皇が夢で神のお告げを聞く、または皇后や『日本書紀』の倭迹迹日百襲姫の神懸りによる神託など、祭政一致がみられる。

民衆の中のシヤーマンは、どのような巫女の役割を担ったのであるだろうか。その発祥は不明であるが、トランス状態での神託する沖縄の「ユタ」や歌舞などをともなう状態での神託する同じく沖縄の「ノロ」、東北

地方の「イタコ」のような巫女によって、占いや悪霊祓い、祖霊との交信などをしたことが現代でも民族事例の中に窺える。特に、沖縄の「ノロ」(祝女)は琉球王国時代、王府より任命される神官として記録されている。アニズムと祖霊信仰を基本とする琉球の信仰におけるノロは、琉球の神々と交信したり、祭祀の時に自分の身に神を憑依させるなど、琉球王国が制定した女神官である。このようなシャーマン的存在は韓国にも、ムダン(巫堂)という巫女があり、日本の「ノロ」や「ユタ」、イタコともその性質が似ている。しかし、ムダンは、天神・地神・山神・人神(人神は、善霊である神明と、悪霊である鬼神がある)などの神々を崇拜して、この神々と人間をつなぐ仲介者である。またムダンが中心となって、神に供え物をして踊り、歌い、それを通じて人間の吉凶禍福を調節してくれ

ること祈願する「クツ（ク）」という儀礼を行う。
特に悪霊である鬼神によって病気になるなど、家に
起こる悪霊の仕業に対し、それを追い払う役割もあ
る。
以上のように第一章では、古代人の霊的存在に対
する働きかけが、畏怖しながら超自然的な力を借り
る、つまり物の怪の存在と宗教的行為とが密接であ
ること確認できた。
第二章では、物の怪の本質につながる手掛かりを
平安以前の文学から探った。平安時代に多く見られ
る物の怪という語は、平安以前の文献からは見当た
らない。しかし、それに当てはまる語として、「神の
氣」が挙げられる。また奈良時代の話として、平安
初期に成立した『日本靈異記』の中からも特定の人
物の死霊を指す、たとえば長屋王のこと、「親王の氣」
が挙げられ、物の怪（物の氣）との関連性が窺える。

古代（奈良以前）には怨霊の存在や、その意識すらなかつたと考えられる。存在したのは神の祟りであり、神の示現である。この神の祟りは、記紀神話での怨霊を予感させる三つの恥問題から探ることができた。この恥問題は『源氏物語』に登場する六条御息所の生霊事件へとつながる。本稿で取り上げた（イ）伊耶那美の辱、（ロ）大物主神の羞、（ハ）豊玉依比売の作から分かるように、「見るな」、「驚くな」という禁忌が破られたことから関係の断絶、破壊が生じたのである。言い換えれば、神としての神性、本性が暴かれることによって、神としての尊さ、威厳が失墜される。いわゆるゆるる神による恥の意識が祟りの感覚と近く現われるのである。ところ、都市国家の発展によって神を中心とした生活が人間中心となり、神は人間の延長のよう捉えられた。人間中心の都市国家は権力を握るための政変によって、人

が人を恨み、その結果政争で負けた側が死後、神の示現のようになり、祟りをなすという思想が生まれたのである。それを証明するかのうちに平安初期、民衆の中であつていた御霊信仰が国家の行事として神泉苑で御霊会が行われる。その原点を記紀神話から探ると、物にまつて、祟りが神の祟りから特定人物の祟りへと発展した。この政治の権力争いによる怨霊を祀ることにまつて、「怨霊の祟り」を鎮めようとする思想へと発展したことが明らかになつた。

氏物語に描かれてある物の怪の様相はどのようないふまでもない。『源氏物語』に於ける物の怪は、歴史を準拠とした物語の構造も含まれて考察した。まず、『源氏物語』における物の怪の様相はどのようないふまでもない。『源氏物語』に於ける物の怪は、歴史を準拠とした物語の構造も含まれて考察した。

大きく三つに分けられる。怨念による物の怪と病に
おける物の怪、さらには物の怪に憑かれる側との関連
性が不明なその他の物の怪である。
た。最初に、六条御息所の物の怪を中心として考察し
父大臣の御霊出現の噂や前坊の存在から、廃太子の
歴史的事件を思わせる政治的怨念による物の怪を疑
わせる。また、当時の一夫多妻制という正妻の座を
争う貴族社会で生まれた女の嫉妬心は、時には相手
をいじめたり、呪詛したりするなど、心的苦しみを
与えた結果、死に至らせることも多かったとはいえ、
このような悲劇を受けた人がすべて物の怪になると
は言えない。六条御息所を物の怪へと変貌させたの
は、男女の恋愛による嫉妬心より貴族社会での身分
制度が大きく影響を及ぼしている。六条御息所は齋
院の御禊の日、葵の上の一行との車争いによってプ

ライドを傷つけられた。その屈辱感がきつかけで生
霊へと変貌するのである。つまり嫉妬心という感
情よりも身分意識によるプラウドが崩れた時の屈辱
感が物の怪と大きく関わっている。これはある面、
記紀神話の恥問題とつながる。
病気に関わる物の怪の様相として、出産に関わる物
の怪が挙げられている。むろん、怨念に
よる物の怪の要素も含まれていて、その現われ方
が、出産の場と病床という点をおきたい。平
安文学の中で、出産の場面には様々な物の怪が描か
れる。それは生命の誕生と同時に、難産による死が
交錯する場であるからだ。そのため、様々な物の怪
の出現は物語の構造上、必然性を持っている。病気
に关わる物の怪からは、紫式部の物の怪観が窺える。
当時は病気のことを殆ど物の怪のせいにして、薬を
飲んで治療をするより僧侶を呼んで加持祈禱を行な

うことが普通であった。しかし、紫式部は物の怪の
ことを「疑心暗鬼」によるものであり、良心の呵責の
が心の鬼を幻想として見せるものとして考えていた。
それに「紫式部集」四四〇四五番の歌が
挙げられる。物の怪に取り憑いている後妻の後ろに、
死んだ前妻の醜き姿が見えて、それを退散させよう
とする場面を記している。この場面を見て、実は、
その物の怪（鬼）は、夫自身の「疑心暗鬼」による
もので、はなからいうかという歌である。つまり、紫式
部は、物の怪というのは、夫の前妻に對しての後ろ
めたさ、良心の呵責が心の鬼、つまり、その心が生
んだ幻想であること語っている。

き父桐壺に、「源氏物語」では、朱雀帝の夢の中に亡
よつて眼病を患うことなる。朱雀帝を睨みつけたことに
母弘徽殿は、雨などの悪い天候では、思ひ込んでいて

し、浮舟物語でも紫式部の物の怪観が窺える。浮舟の心の影が物の怪を呼び出し、入水を凶ったことが本文の描写にある。従って、六条御息所の生霊、死霊を一つの例として考えると、物の怪は、光源氏の六条御息所に対する気の咎め、良心の呵責が見せたもの、と捉え直すことも可能だ。本章の『源氏物語』における物の怪は、いわゆる人々の心の鬼によつて、物の怪として幻想を現わしたものといえよう。その幻想は出産の場においても、病気の場においても同様である。

第四章では、第三章で挙げた「その他の物の怪」に分類される、夕顔物語における物の怪を考察した。夕顔物語に現われる物の怪は「いとをかしげなる女」で、その正体については（イ）六条御息所の怨霊（生霊）説、（ロ）なにがし院に棲み憑く妖物説、（ハ）怨霊説と妖物説の折衷説、この三つの説が挙げられ

れた娘延子に期待を注いでいた。なか、藤原道長の娘の
 策略によつて敦明親王は東宮退位、さらには
 寛子に媚を横取りさされ、延子のところには来なく、
 つた悲しさ、苦しむ顕光と娘延子。彼らはその恨みに
 で死んでも成仏できなかつた。彼らはその恨みに
 怨霊となるが、仏生前自分にくみ、怨霊が共通し、
 族を、徹底的に祟つて、いゝ様子が、いゝ。彼
 ら三人の祟りに、祟り、怨霊の祟りに、いゝ。彼
 を疫病などには、怨霊と関わり、ある物やその一
 平安時代に、怨霊と関わり、ある物やその一
 崇りをなすといふ。祟りの範囲が狭くなつて、
 が見えてきた。祟り、怨霊の祟りに、いゝ。彼
 物の怪に、対する考へ、記紀、神話から、中期に
 の形は異なつても、記紀、神話から、中期に
 での人は、異なつても、記紀、神話から、中期に
 で、人々に、恐ろしい存在と、して、畏怖され、
 存在と、して、畏怖され、

との怪の究な　　う当展病氏文のといで
 で、の関て係今　　。時開の物学崇密、ある
 紫顕わいにつこ　　他せ行『はかなの。そ
 式現りにたいと　　のたではおれ人係をれ
 部とのついでと　　文のはないらのに借ゆ
 がの関い。はし　　学であくは物り崇ありえ
 考わて具、て　　品と。人、のへたう人
 えり探体的物　　一この心純と発とすは
 てを、にから怪　　線の点を支配す紫配異登場させ、あ、自然
 いた明、それ、も　　を画、紫配すものの幻、もし、くに『平安神
 『心かによって罪意と仏教　　るものであった観は疫源安
 鬼する。その意識と物　　るものであった観は疫源安
 の。その意識と物　　るものであった観は疫源安
 問題うするこ　　るものであった観は疫源安
 が明ら　　るものであった観は疫源安

い し の か
。 を 共 に
述 通 な
べ 点 る
る や は
に 差 す
と 異 で
ど も あ
め 考 る
、 察 。
ひ し ま
と て た
ま い 、
ず く 中
筆 必 世
を 要 に
擱 が お
く あ け
こ る る
と が 物
と 、 の
し 見 怪
た 通 と

初出一覧

第一章

ものけ考 | 日・中・韓、比較文化的視点
を含めて | : 書き下ろし

第二章

上代文学における怨霊の始源 : 原題は「古
代文学にみる怨霊の始源」『専修国文』第八
十九号、二〇一一年九月。

第三章

『源氏物語』における物の怪 : 原題は「源
氏物語における物の怪 | 政争と一夫多妻制
を起点に | 専修大学大学院『文研論集』
第五十二号、二〇〇八年一月、に大幅加
筆。

第四章

夕顔巻「いとをかしげなる女」攷：原題は
「源氏物語」『いとをかしげなる女』攷「専
修大学大学院」『文研論集』第五十四号、二
〇一〇年三月、に大幅加筆。

第五章

歴史物語における物の怪：書き下ろし